

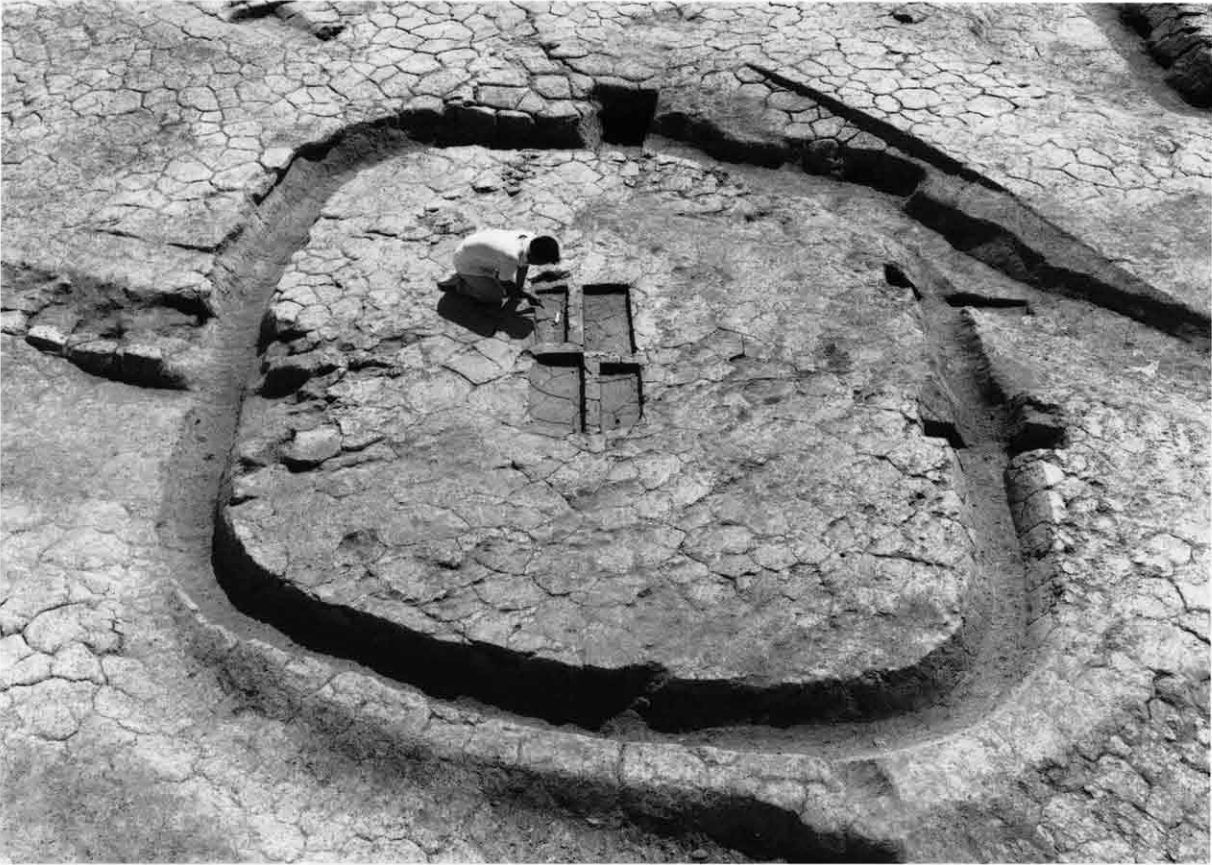
京都府埋蔵文化財情報

第78号

下植野南遺跡方形周溝墓出土の磨製石剣 -----	野島 永・魚津 知克 --	1
今林古墳群の発掘調査 -----	福島 孝行 --	7
弥生墳墓における鉤の副葬作法について(1) -----	福島 孝行 --	11
京都府内出土の石鍋について -----	中島 史子 --	17
戦争の誕生—人間の攻撃性と戦争の社会的起源をめぐる比較考古学— --	河野 一隆 --	23
平成12年度発掘調査略報 -----		43
7. シリガイ・東禅寺古墳群、エノク経塚群		
8. 植物園北遺跡		
9. 三山木遺跡		
府内遺跡紹介 89. 井ノ内稻荷塚古墳 —継体朝の「弟国宮」と下植野南遺跡— -----		48
長岡京跡調査だより・75 -----		50
センターの動向 -----		52
受贈図書一覧 -----		54

2000年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1)下植野南遺跡方形周溝墓S T99 (西から)



(2)方形周溝墓S T99主体部遺物出土状況 (東から)



(1)今林6号墳出土鏡



(2)今林8号墓出土鏡

しもうえのみなみ ほうけいしゅうこうぼ
 下植野南遺跡方形周溝墓出土の磨製石剣

野島 永・魚津知克

1. はじめに

下植野南遺跡の所在する大山崎町は、京都府の南部、山城を貫流する桂川・宇治川・木津川の三河川が合流して淀川となる交通の要衝にある(第1図)。下植野南遺跡は、乙訓郡大山崎町下植野・円明寺に広がる縄文時代から近世までの複合遺跡で、桂川の右岸、ちょうどその支流の小畑川と小泉川に挟まれた沖積低地に位置している。南東に桂川があり、西に山崎合戦で有名な天王山を望むことができる。

当調査研究センターではこの下植野南遺跡について、名神自動車道大山崎ジャンクションの建設に伴う事前の発掘調査を行っている。調査地は大山崎町大字円明寺小字門田で、大山崎町立体育館の南西に隣接する。これまでも、近接地では数次にわたる調査が行われ、弥生時代中期の方形周溝墓群や古墳時代後期の大規模集落が検出されている(巻末文献参照)。

磨製石剣は、下植野遺跡で検出された60を超える方形周溝墓群のなかのひとつ、平成12年度調査のJ地区で検出された方形周溝墓S T99の埋葬主体部から出土した。磨製石剣だけでなく、打製石鏃・緑色凝灰岩管玉・安山岩剥片など多彩な遺物も相伴している。後述のように、磨製石剣はほぼ間違いなく副葬品とみなされ、畿内地域における弥生時代中期前半の珍しい例となった。副葬品研究に資する重要な調査成果だと言えよう。整理途中ではあるが、方形周溝墓S T99とその出土遺物の一部についてその概要を示し、現時点での私見をのべておきたい。



第1図 調査地位置図(1/25,000)

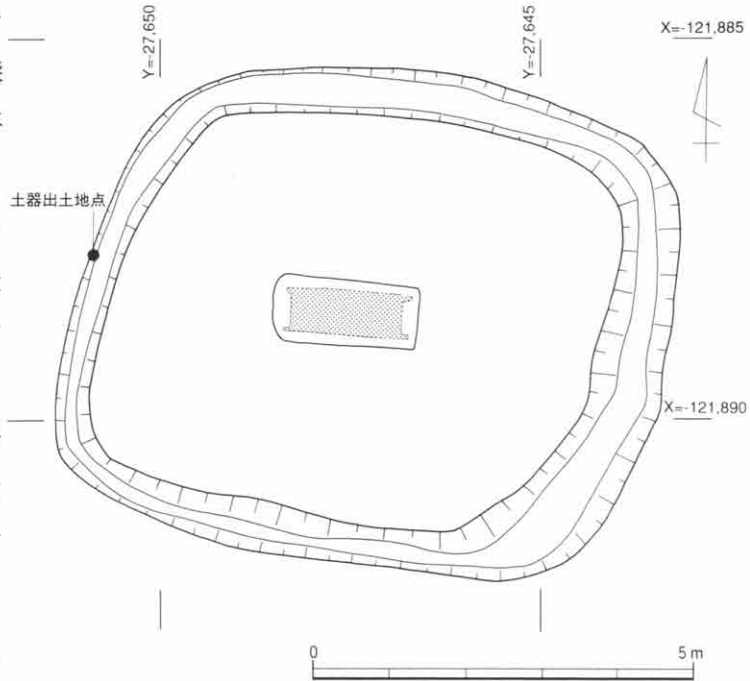


第2図 下植野南遺跡J地区方形周溝墓(調査中)(1/500)

2. 方形周溝墓 S T 99

方形周溝墓 S T 99は、下植野南遺跡 J トレンチ南半中央に位置する(第2図)。S T 99は、周溝心々間で南北約 6 m・東西約 7 mの規模を測る。平面形態は長方形というよりは平行四辺形にちかい(第3図)。周溝は墳丘を全周して、掘形は逆台形状を呈していた。方形周溝墓 S T 19の東に隣接しており、西側の周溝は、一部 S T 19の東側周溝と検出面で重複しており、両者に共有されるようであるが、周溝最深部は各墳丘側に分離して検出された。つまり、当初両周溝は、それぞれの墳丘より別々に狭く掘削されたが、埋没が進んだある時点で、両者をひとつの溝として広く再掘削した可能性が考えられる。周溝底からは埋葬施設と考えられる小規模な墓壇・木棺痕跡などは認められなかった。西側周溝底から40cm程浮いた地点で、摂津型甕形土器(第4図)が出土している。復原口径18.4cm・残存高15.7cm。器壁は口縁部5cm・胴部3.5~4cm前後を測る。器表面には、肩部から縦ハケを施すが、接合の際の粘土紐による隆起がのこる。2cm角以下の長石・石英・チャート・赤色斑粒が含まれ、肌色を呈する。畿内第Ⅲ様式前半と考える。

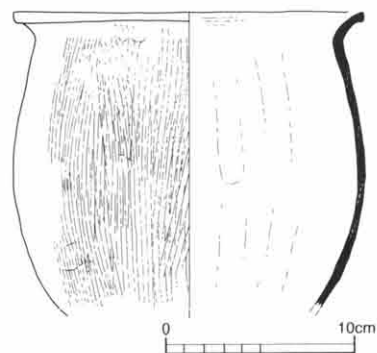
当初、墳丘頂部で埋葬主体部を検出することができず、周溝最深部から15～30cm程まで墳丘を削平したところ、初めて埋葬主体部1基を検出することができた(第5図)。今夏の著しい土壌の乾燥のため、墓壙が墳丘頂部から穿たれていたのか、主体部木棺埋置後に、墳丘を一部構築したものか判断できなかった。墓壙はほぼ東西方向に穿たれる。東西幅ほぼ1.9m、南北幅は東側で80cm、西側は幅広となり、88cmを測る。墓壙検出時に、木棺の長側板と小口板の痕跡も確



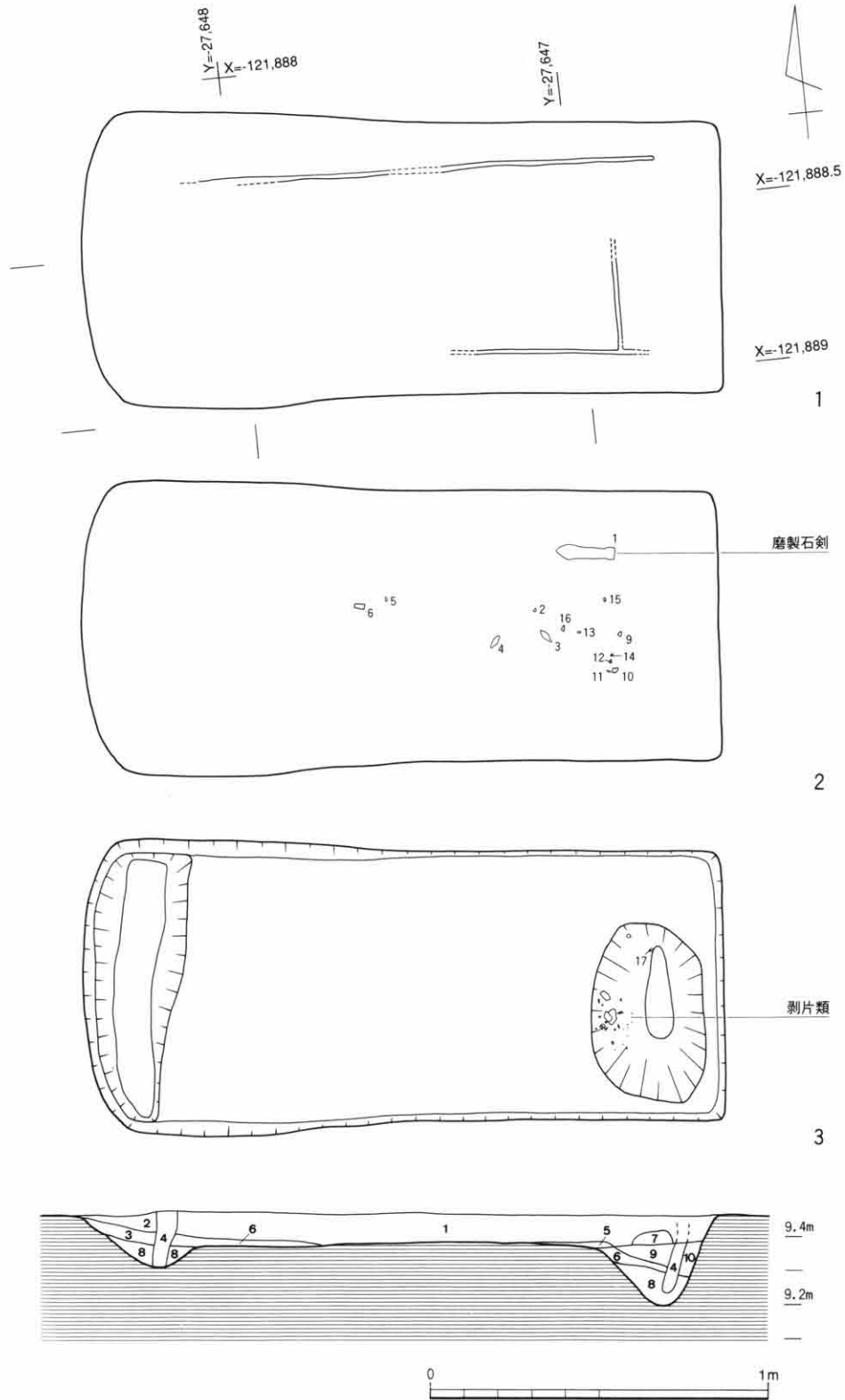
第3図 方形周溝墓S T99平面図(主体部検出時)(1/100)

認できた(第5図1)。板材自体はすでに腐朽していたが、幅1cm内外の暗褐色粘質土に置き換わっていた。木棺は、長側板が小口板よりも外側に伸び、小口板設置用掘り込み(いわゆる小口穴)を穿つ通有の組合せ式(福永伸哉氏分類I型木棺^(注1))であるが、東西の小口穴の形態は異なる。西側は底板の短辺と同じ幅の小口板を外接させる。東側では底板の短辺を「凹」字型に切り取り、底板より小さい下端幅の小口板を立てたものとみられる(福永氏分類I-a型式とI-b型式の折衷形態)。検出時の木棺痕跡の長側板の幅からすれば、東側が頭位であった可能性が高い。検出時の東側小口板(第5図1)と断面において観察し得た小口板(第5図断面図)の位置がずれるが、小口板が腐朽によって内側に倒れかかったものとみられる。

安山岩製磨製石剣は、墓壙検出面からわずか10cm足らずで出土した。北側長側板に沿った平置き状態で、鋒を西側に向けていた。安山岩製石鏃3点・安山岩剥片数点が、付近から出土している。石鏃は原位置不明の1点を加え、計4点出土である。鋒が折れて数cm離れたところから出土しているものもある。石剣・石鏃・剥片は棺内堆積土の暗褐色粘質土(1層)の出土である(第5図2)。また、東小口板近くの標高9.35～9.37mの位置から、緑色凝灰岩製管玉や安山岩製剥片類が出土している(第5図3)。位置的には、暗黄灰色粘質土(9層)に含まれる。現時点では、黄灰色粘質土(6層)を木棺底板痕跡と判断しており、管玉・剥片類は石剣などと同様に棺内の遺物とみなした。9層に含まれる遺物の解釈であるが、当初から東下がりの構造の棺のくぼんだ部分に配置されていたのか、あるいは当初水平だった底板が陥没したところに遺物が溜まっているのか、いずれとも決定しがたい。



第4図 摂津型甕形土器(1/4)



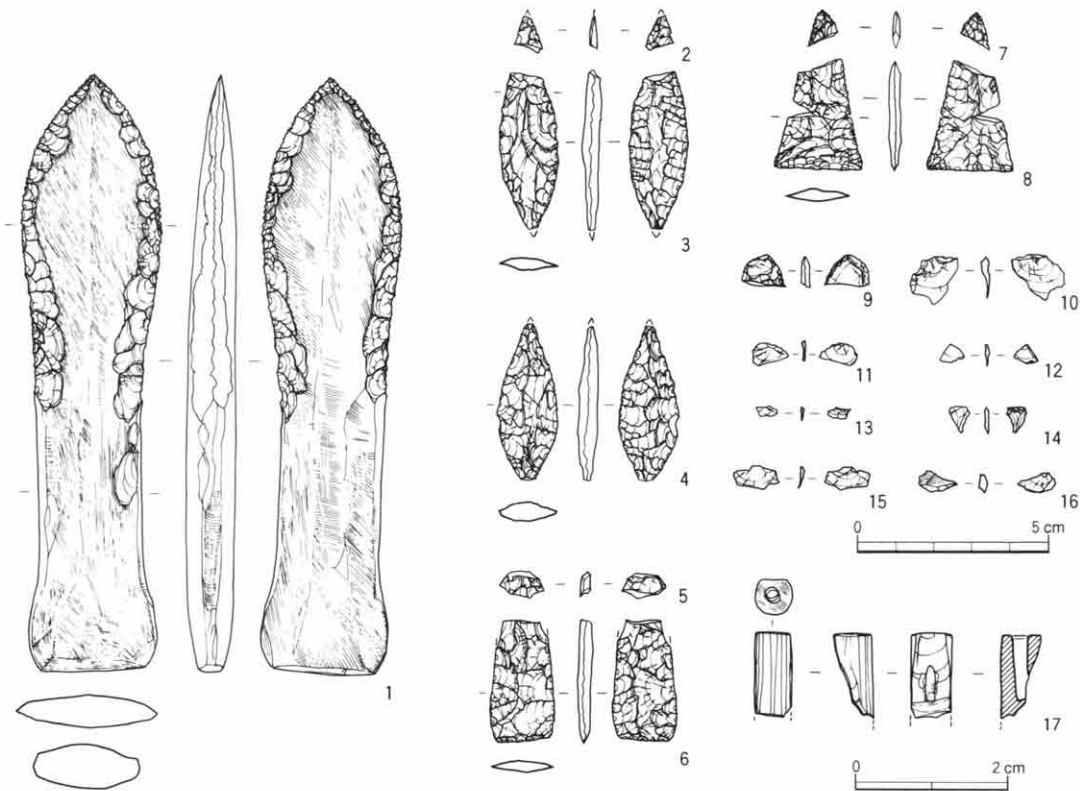
第5図 方形周溝墓S T99埋葬主体部

(1. 木棺検出状況 2. 遺物出土状況(番号は第6図対照) 3. 木棺小口設置掘り込み検出状況および剥片類出土状況)

- | | | | | |
|------|----------|------------------------|--------------------------|-----------|
| 土層断面 | [棺埋土] | 1. 暗褐色粘質土(黄斑粗砂混) | 7. 暗黄褐色粘質土 | 9. 暗黄色粘質土 |
| | [棺裏込め] | 2. 暗褐色粘質土(1よりも黄斑、砂粒多) | 3. 黄灰褐色粘質土(黄斑多) | |
| | [棺小口板] | 4. 暗褐色粘質土(1よりも砂、黄斑少なめ) | | |
| | [棺底板] | 5. 茶褐色粘質土 | 6. 黄灰色粘質土 | |
| | [小口板裏込め] | 8. 灰褐色粘質土(黄褐色粘質土混、暗め) | 10. 暗黄色粘質土(9よりも1cm大礫少なめ) | |

3. 出土遺物の概要

磨製石剣(第6図1)は、全長15.73cm・刃部最大幅3.68cm・柄尻幅3.32cm・最大厚1.21cmを測る。柄尻幅が一段大きくなる形態をもつ。石材は安山岩製である。刃部・柄部ともにほぼ全面に研磨による擦痕を残す。研磨後、刃部側縁には、入念な調整剥離が施される。さらに鋒側では、幅・深さ1mm弱のノッチを入れ、鋸歯状の刃部を作りだしている。柄部に近くなるにつれて、石剣は厚くなり、刃部の剥離方向の俯角は大きくなる。刃部折損後、刃部の再研磨と剥離による整形によって再加工した可能性も捨てきれない。打製石鏃(第6図2～8)は、先述したように4点出土した。2と3、5と6、7と8は接合するが、当初から分離して検出された。2・3は、鋒先端と基部を欠損して出土した。残存長4.83cm・最大幅1.48cm・最大厚0.42cm・重量2.74g。4は、残存長4.02cm・最大幅1.56cm・最大厚0.48cm・重量2.72g。出土後、鋒をわずかに欠損した。5・6は、残存長3.65cm・最大幅1.70cm・最大厚0.33cm・重量2.33g。7・8は上層(1層)出土であるが、正確な出土位置を確認しえなかった。推定全長4.2cm前後・基部の最大幅2.33cm・最大厚0.46cm・重量2.44gとなる。上層出土の剥片には、安山岩剥片(第6図9～15)7点と、粘板岩剥片(第6図16)1点とがある。9は、表裏交互に調整剥離が行われており、打製石鏃製作過程の破損品とも考えられる。15は、磨製石剣の刃部調整剥離に接合する剥片である。16は、粘板岩の剥片で擦痕をもつ平坦な一面がある。磨製石剣もしくは磨製石鏃の刃部破片の可能性もある。緑色凝灰岩製管玉(第6図17)は下層(9層)からの出土で、出土時すでに破損していた。残存長1.12cm・最大径0.51cm・重量0.33gを測る。外側面には、剥離面を除き、12面の縦方向に細長い幅1mmほどの研磨面がみられるが、径1.7mm程の穿孔が施される。平坦に近い穿孔底面を残して



第6図 出土遺物実測図

1. 磨製石剣(1/2) 2～8. 打製石鏃(1/2) 9～16. 剥片類(1/2) 17. 緑色凝灰岩管玉(1/1)



写真1 石剣・石鏃出土状況(北から)



写真2 安山岩剥片類出土状況(西から)

おり、穿孔途中であることがわかる。穿孔は石針で行ったらしく、穿孔方向に直交する擦痕が顕著に認められる。剥離面の形状からすれば、管玉穿孔面を打面として、下方向(穿孔方向)にウートラパッセ状に剥離したものとみられるが、穿孔途中に破損した可能性もある。これが事故によるものか、あるいは意図的なものであるのかは不明である。

そのほか、下層(9層)から安山岩剥片類が出土した(写真2)。打製石鏃未製品を含め、総数58点以上を数える。棺内埋土水洗や接合作業を進めた後、改めて報告したい。

4. おわりに

棺内から出土した磨製石剣は、その出土状況から副葬品と考えてほぼ間違いのない。副葬時に磨製石剣の調整剥離を行った可能性がある。3点の石鏃の検出レベルの差異は1cm以内に収まる。出土状態もほぼ水平で、副葬品と解釈するには有利な証拠である。だが、鋒部分が離れて出土したこと、そして石剣もしくは石鏃の可能性が高い粘板岩破片の存在も考え併せるならば、体内に射込まれた可能性も捨てがたい。中川和哉氏の^(注2)分析も踏まえ、今後検討していきたい。一方、下層出土の管玉・石鏃未成品は、未完成という点に共通性を見出せる。製作途中のものを意図的に副葬したのか、あるいは磨製石剣も含めて製作行為自体が葬送儀礼に組み込まれていたのだろうか。いずれにせよ、当時の副葬意識に迫る貴重な資料といえよう。

なお、小稿をなすにあたって、当調査研究センター中川和哉、兵庫県教育委員会種定淳介氏、京都大学大学院博士課程大賀克彦氏、大阪大学大学院博士課程寺前直人氏に御教示を得た。内容はもちろん筆者らの責に帰すが、記して感謝したい。

(のじま ひさし=調査第2課調査第2係調査員)

(うおづ ともかつ=京都大学大学院文学研究科研修員)

注1 福永伸哉「弥生時代の木棺墓と社会」(『考古学研究』第32巻第1号 考古学研究会) 1985

注2 中川和哉「乙訓地域における弥生時代集落と石器生産」(『長岡京跡左京二条三・四坊・東土川遺跡』(京都府遺跡調査報告書第28冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000

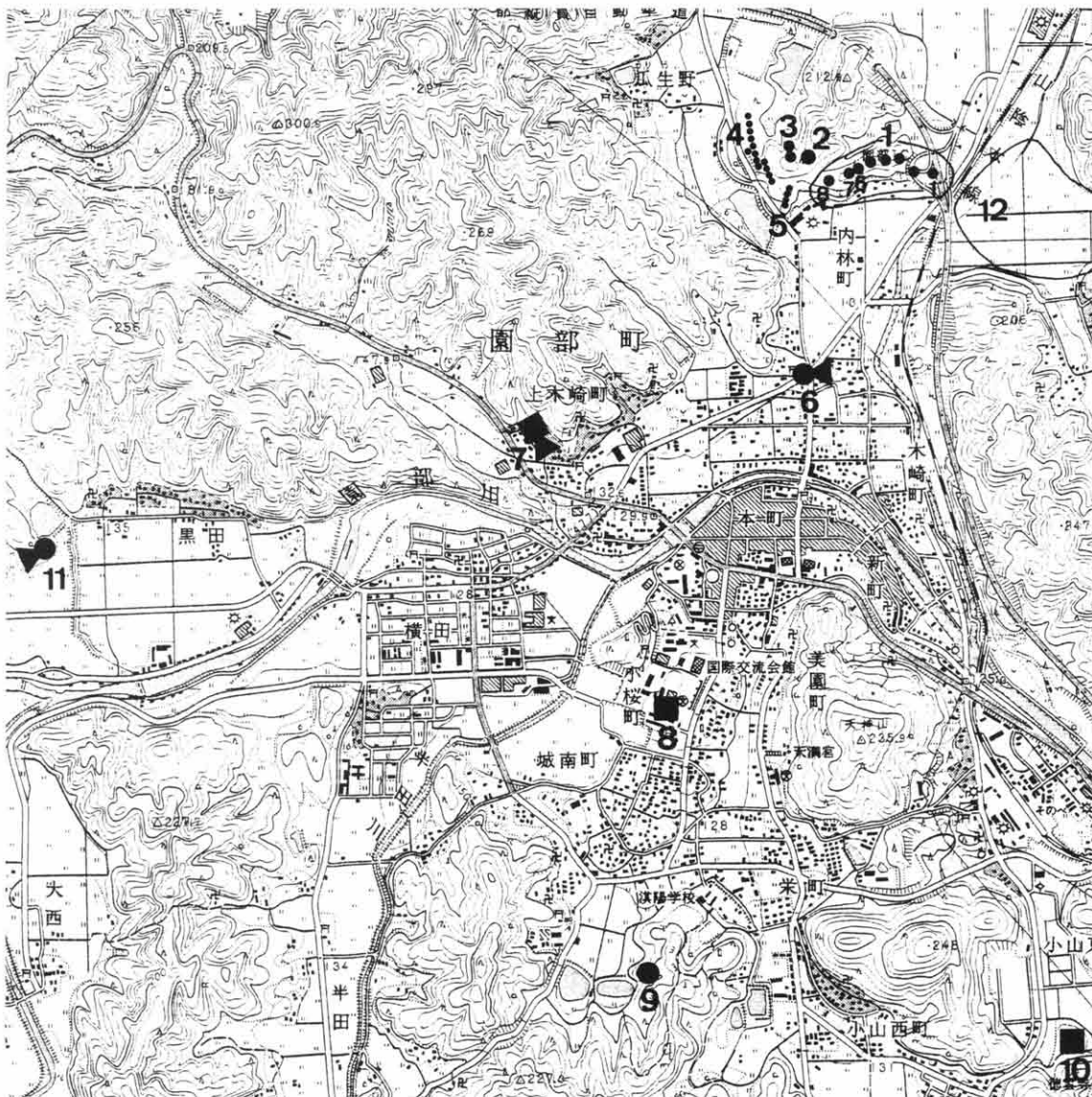
下植野南遺跡関連文献 林 亨・近澤豊明・中塚 良『下植野南遺跡—長岡京跡右京第188次調査報告—』(大山崎町埋蔵文化財調査報告第13集 大山崎町教育委員会) 1996、中川和哉ほか『下植野南遺跡』(京都府遺跡調査報告書第25冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999、石井清司・竹下士郎・中村周平ほか「名神大山崎ジャンクション関係遺跡 平成10年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第90冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

いまばやし
今林古墳群の発掘調査

福島孝行

1. はじめに

今回の調査は京都新光悦村建設事業に先立ち、京都府企業局の依頼を受けて実施した。今林古墳群は船井郡園部町内林に所在し、丹波山地から派生する独立丘陵、通称平山の南東部に位置する。昨年度から今年度にかけての平山丘陵内の調査によって明らかになった遺跡群を総括して平



第1図 調査地および周辺の遺跡(1/25,000)

- | | | | | |
|------------|-----------|------------|-----------|-------------|
| 1. 今林古墳群 | 2. 平山古墳 | 3. カチ山北古墳群 | 4. 狭間古墳群 | 5. カチ山古墳群 |
| 6. 園部垣内古墳 | 7. 中畷古墳 | 8. 小桜古墳群 | 9. 岸ヶ前古墳群 | 10. 徳雲寺北古墳群 |
| 11. 園部黒田古墳 | 12. 曾我谷遺跡 | | | |

山遺跡群と呼ぶこととなったが、今林古墳群も平山遺跡群を構成する遺跡の一つである。今回は現地説明会時点では明らかでなかった8号墓を中心に中間報告を行う。

2. 調査概要

(1) 今林6号墳

6号墳は東西22m・南北15mを測る長方形の方墳で、墳頂部には埴輪列をめぐらせていた。主体部は墳頂部南寄りに主軸を東西にとって設定され、長軸7.2m・短軸3.6mを測る変則的な3段墓壇に箱形木棺を直葬している。棺内からは長宜子孫銘蝙蝠座鈕内行花文鏡、鉄剣、鉄刀、鉄斧、鉄鉞、棺外から長方板革綴短甲、鉄鏃、棺上から落ち込んだ状態で緑色凝灰岩製勾玉、同管玉、ガラス製平玉、ガラス製小玉、豎櫛、裏込め土内から鉄矛がそれぞれ出土した。

古墳の築造時期は古墳時代中期前半で、須恵器の出現直前頃であると考えられる。

(2) 今林7号墳

7号墳は東西13m・南北11mを測る方墳である。6号墳の西隣に築造され、溝を共有している。主体部は中心からやや西寄りに、主軸を南北にとって設けられている。こちらは小口溝を持つ木棺を直送しており、棺蓋上から落ち込んだと見られる位置から曲刃鎌、墓壇上から落ち込んだと見られる位置から「U」字形鋤先が出土した。墳丘の北裾から完形の須恵器甕が出土している。

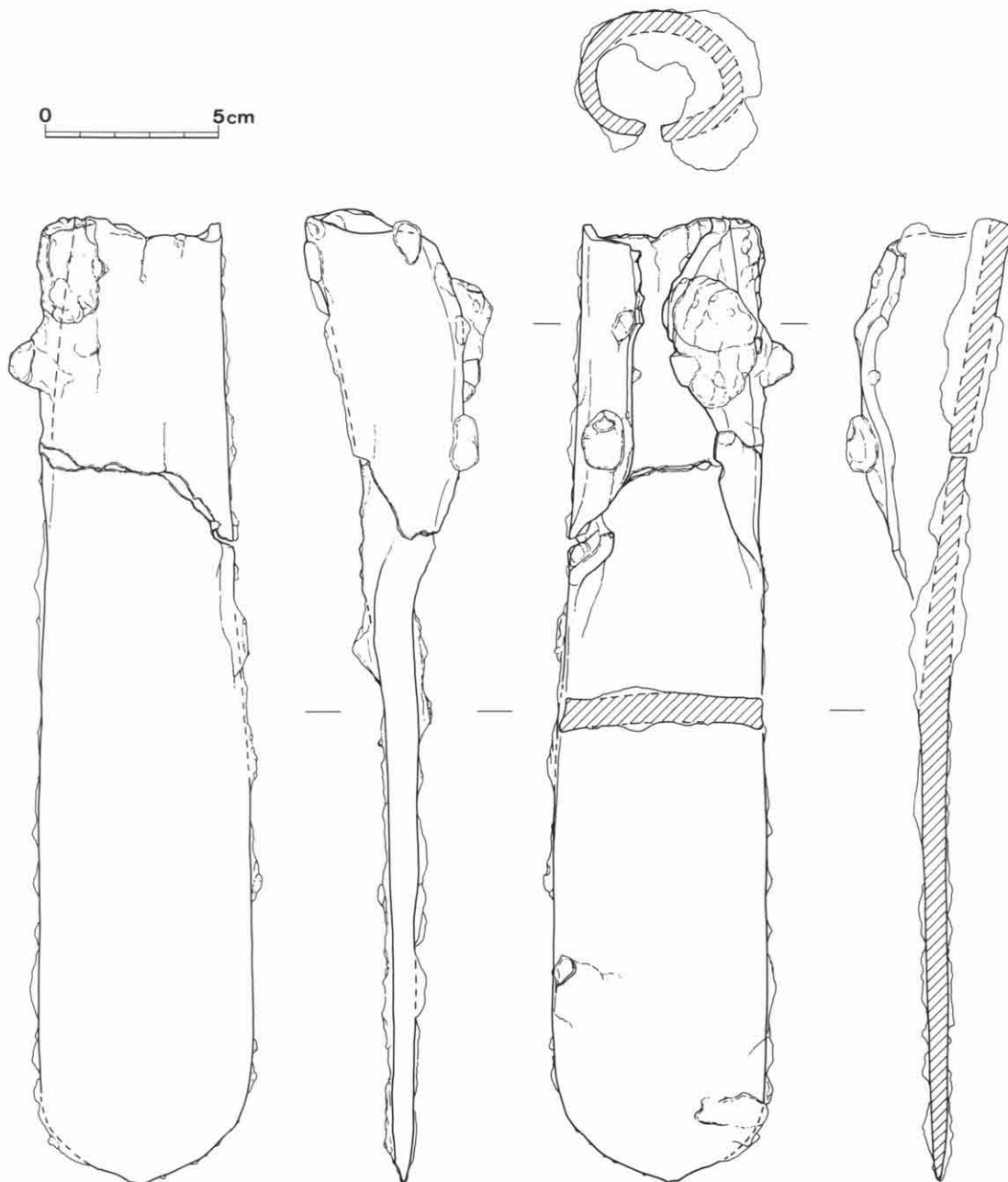
古墳の築造時期は甕の型式がTK208であることと、鉄器から古墳時代中期後半であると考えられる。

(3) 今林8号墓

この墳墓は当初8号墳と呼ばれていたが、調査の進展に伴い、弥生時代末と考えられる庄内式併行期であることが判明してきたため、8号墓と呼び変えることとなった。^(注1)

8号墓は東西18m・南北15mを測る狭義の墳丘墓である。墳丘の北側は墳高のおよそ半分ほどが浅い溝によって造成されているが、その上部を盛土によって整形しており、南側は墳丘のほとんどを盛り土によって造成している。墳頂部には主体部を3基設けている。中心となる第1主体部は主軸を東西にとる木棺直葬墓で、長軸5.4m・短軸2.1m・深さ90cmを測る深い二段墓壇に箱形木棺を直葬しており、棺蓋上東寄りには人頭大のチャート礫を7個置いていたと思われる。この礫のすぐ西側から鉄製品が2点出土しており、一方は方形刃先、もう一方は「タビ」と呼ばれる土掘り具である。方形刃先は長さ6cm・幅13cmを測り、弥生時代的な形態を有する。^(注2)「^{タビ}」は朝鮮半島の原三国時代に特徴的な農具であり、「踏鋤」などと訳される。日本では山陰でわずかに例があるのみで、本州の内陸部で出土したのは今回が初めてである。^(注3)出土した「^{タビ}」は長さ27.5cm・幅6cmを測り、20cmを測る刃部に袋部が付く。二つに断裂しているため正確な角度は不明であるが、刃部と袋部との境界部でやや反っている。この二つの鉄製品のやや西に棺底材に接して鉄製槍先が切先を東に向け、副葬されていた。さらにその上に銅鏡が鏡面を上に向けて置かれていた。槍は全長30cm・刃部長19.5cmで、明瞭な鎬は持たない。茎には目釘穴が1個穿たれている。鏡は面径10.5cmを測る。外区は鋸歯文の内側に細い無文帯を挟んで櫛歯文という構成であり、内区は獣形から頭部を省いたものが4体連なっている。また棺内と棺上から落ち込んだ状態でガラス製管玉が8点出土した。鏡のすぐ北側で、棺上から落ち込んだ状態の甕形土器の底部

が出土した。底部は小さな平底になっており、この主体部の時期が布留0式を下らないことを示している^(注5)。また墓壙上からも細片化した土器が出土している。第2主体部は第1主体部の北に主軸を東西にとる木棺直葬墓である。長軸3.35m・短軸1.4mを測り、二段墓壙に東側のみ小口溝を有する組合式木棺を納め、裏込土上および棺を10cmほど埋め戻した上に人頭大～60cm大のチャート礫を30個以上も置いている。棺内には棺上から落ち込んだ状態で「S」字状に曲げられた鉈と幅6cmの小型の方形刃先が出土した。墓壙上の落ち込み土の内部からは細片化した土器が出土したが、胴部片にはジグザグの線刻が見られ、底部片には突出するものがある。第3主体部は第2主体部の真西にある。第3主体部は直径46cmの土壇に扁球形の体部と突出した底部を持つ壺形



第2図 今林8号墓出土「タビ」実測図

土器を正位に納めた土器棺墓である。土器は外面タタキ調整の後ハケ調整を施しており、内面はハケ調整を行っている。

8号墓の築造時期は土器から見ると、前述した特徴を持つ土器が平山丘陵の東麓、曾我谷遺跡で出土しており、庄内期の時期が与えられている^(注6)。口縁部の破片が無い^(注6)ため細かな時期までは不明だが、第1主体部の棺内に落ち込んだ土器片とも併せて8号墓は庄内期に築造された可能性が極めて高い。

3. まとめ

今林古墳群は既往の調査と併せて5基が調査され、多くの事実が判明した。特に今回の調査において小型の中期古墳から鏡と短甲を含む豊富な副葬品を出土したことは特筆に値する。今林6号墳の被葬者は園部町のその他の中期前半の古墳の分布状況から見て、園部町の北半部をその支配領域としていたと考えられる。さらに庄内期の墳墓が調査され、朝鮮半島から搬入されたか、もしくは非常に強い影響の元で製作された「タビ」が出土したことは、今後当該地域と半島との関係を検討する上で非常に貴重な資料を提供することとなった。また、8号墓から出土した鏡は、出土状況から見限り庄内期に副葬されたと考えざるを得ない状況で出土している。しかし、現状の仿製鏡研究の枠組みでは古墳時代前期中葉、雪野山古墳を遡らないということであるから、今後の鏡研究にも一石を投ずる資料が得られた^(注7)。今林古墳群では以前に1号墳で庄内期の墳墓が調査されている。下層の墳墓が庄内期であるかどうかについては再検討の余地があるが、今回の調査成果と比較すると、墳丘の成形が曖昧であること、副葬品を持たないこと、上層の墳墓は単数埋葬であることなどの相違が見られる。こうした違いは時期が接近している墳墓同士では階層差による可能性が高い。8号墓は1号墳よりも階層が高く、眼下に見下ろす曾我谷遺跡の首長層が葬られている可能性が高い。園部町には古墳時代前期において南丹波最大の前方後円墳である園部垣内古墳が存在するが、この古墳は平山丘陵の目の前にあり、平山遺跡群の庄内期や古墳時代中期の首長とも無関係ではないと考えられる。このように今回の調査からは南丹波の弥生から古墳時代への変革期を知る上で欠くことのできない資料であるということができよう。

(ふくしま・たかゆき＝調査第2課調査第1係調査員)

注1 都出比呂志「前方後円墳体制の提唱」(『日本史研究』第343号) 1991

注2 松井和幸「鉄の鋤・鍬先」(『弥生文化の研究』5 道具と技術I) 1997

注3 東 潮『古代東アジアの鉄と倭』(溪水社) 1999

注4 村上恭通氏(愛媛大学)よりご教示いただいた。

注5 寺澤 薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」(『矢部遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所) 1986

注6 平良泰久『曾我谷遺跡』(園部町教育委員会) 1977

注7 鏡の編年観については京都大学の森下章司氏、下垣仁志氏のご教示、及び以下の論文を参考にした。

森下章司「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」(『史林』第74巻第6号 史学研究会) 1991

岡村秀典「後漢鏡の編年」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集 国立歴史民俗博物館) 1993

弥生墳墓やよいふんぼにおける鉦の副葬作法について(1)

～丹後地域～

福島孝行

1. はじめに

平成11年度、当調査研究センターが峰山町において行った赤坂今井墳丘墓の調査は、丹後弥生時代後期を研究する上で多くの問題を提起した。この墳丘墓には中心主体部、中心主体部と切り合う主体部、切り合わず墳丘上平坦部周縁部に位置する主体部、周辺主体部の間に墓壙規模の明確な格差があり、これが階層差を表していると考えられる^(注1)。しかしながら墳丘平坦面上の主体部のみならず、周辺主体部にも鉄製品の副葬が見られたことは、中心主体を除く各階層間で、副葬品に関する規制が緩かったか、もしくは中心主体部が副葬品を独占し、中心主体部と切り合う位置に墓壙を作る階層の人間でさえ鉦しか副葬することを許されない強い規制が行われていたか、あるいはその双方の規制が同時に行われている可能性を示唆している。そこで鉦副葬を検討する上での基礎作業として、丹後、但馬、丹波の鉦を副葬する墳墓を集成し、特に副葬時の鉦の扱い方に注目して検討していくこととする。この際、頭位の認定方法であるが、①装着状況を示す玉類の出土位置、②木棺の幅の広い方、③木棺の底面の高い方の優先順位で決定した。なぜ木棺の幅が広い方が頭位であるかについては、人体の最も幅の広い部分が肩の部分であり、必然的にこの部分が広くなることが推定されるからである。木棺の底面が高い方が頭位であるかどうかについては経験則によっている。ただし今回は②まででほとんどの主体部が処理できたため、③については疑義があっても大勢に影響はない。なお、鉦の副葬位置については肥後弘幸氏が概略を述べているが、小稿はその具体相を追求するものである^(注2)。

2. 各事例の検討

鉄製鉦の副葬の開始は弥生時代後期初頭、三坂神社墳墓群、左坂墳墓群に始まる。そして弥生時代後期を通じて副葬し続けられる。

京都府大宮町三坂神社墳墓群、左坂墳墓群は後期前半の墳墓群であるが、鉄製鉦はいずれも棺内に副葬される。その位置は棺側付近に棺側に沿って配置され、被葬者の上半身から頭部の右側に置かれている。切先の方向は頭部側、爪先側の両者があり、有意差が見られない。

京都府丹後町大山墳墓群は後期中葉の墳墓群であるが、7号墓第1主体部のみが頭部の右側に配置し、他は下半身や、中央部・頭部の小口板に平行する例などがある。また棺内に副葬せずに、裏込め土上面や、墓壙上に置く例も見られる。切先の方向と頭位の間には何ら関係は見られない。

京都府岩滝町大風呂1号墓第3主体部で鉦が出土している。この主体部は北西側の小口が広く、南東側の小口が狭い。したがって北西側頭位と判断されるが、管玉が木棺中央部に集中している。

第1表 銚出土墳墓群

墳墓群	墳墓名	主体部名	出土位置	分類	切先	頭位	時期
三坂神社墳墓群	3号墓	第1主体部	棺内棺側上半身右側	1AR-b	爪先	西	5-1
		第3主体部	棺内棺側頭部右側	1AR-h	頭部?	西	5-1
		第10主体部	棺内棺側頭部右側	1AR-h	爪先	西	5-1
左坂墳墓群	16号墓	第2主体部	棺内棺側上半身右側	1AR-b	頭部	北	5-1
	17号墓	第1主体部	棺内棺側上半身右側	1AR-b	頭部	南	5-1
		第2主体部	棺内棺側上半身右側	1AR-b	爪先	北	5-1
三坂神社墳墓群	5号墓	第2主体部	棺内中央上半身寄り	1AC-b	不明	北西	5-2
	8号墓	第7主体部	棺内棺側頭部右側	1AR-h	爪先	南	5-2
大山墳墓群	7号墓 周辺	第1主体	棺内棺側頭部右側	1AR-h	頭部	西	5-3
		第1主体	墓壙上	3	不明	不明	5-3
		第9主体	棺内棺側下半身右側	1AR-l	爪先	北東	5-3
		第12主体	棺内小口部頭部付近	1B-h	左	北西	5-3
		第17主体	裏込上面中央部	2β-c	不明	不明	5-3
		第18主体	棺内棺側中央部右側	1AR-c	頭部	西	5-3
		第27主体	棺内中央部頭部側	1AC-h	頭部	東	5-3
大風呂南墳墓群	1号墓	第3主体部	棺内中央部上半身側	1AC-b	不明	不明	5-3
帯城墳墓群	B地区	南群第4主体部	棺内		不明	西	5-4
浅後谷南墳墓		第1主体部	棺内棺側上半身右側	1AR-b	不明	東	5-4
		不明	墓壙上?	3	不明	不明	5-4
金谷1号墓		第6主体部	棺内棺側頭部左側	1AL-h	頭部	東	5-4
		第12主体部	棺内棺側上半身左側?	1AL-b	不明	東	5-4
		第14主体部	棺内棺側下半身右側	1AR-l	爪先	東	5-4
		第15主体部	棺内棺側上半身左側	1AL-b	爪先	西	5-4
赤坂今井墳丘墓		第2主体部	棺内棺側上半身左側	1AL-b		南	5-5
		第3主体部	棺内棺側頭部右側	1AR-h		南	5-5
		第7主体部	棺内棺側頭部右側	1AR-h		北	5-5
		第8主体部	棺内棺側頭部右側	1AR-h	頭部	北	5-5
		第11主体部	棺内棺側頭部右側	1AR-h	爪先		5-5
内和田墳墓群	5号墓	SX02	棺内棺側頭部左側	1AL-h	頭部	北西	5-5
		SX03	棺内棺側頭部右側	1AR-h	頭部	南東	5-5
		SX06	棺内中央部	1AC-c	不明	不明	5-5
		SX14	墓壙底中央部	1AC-c	不明	不明	5-5
左坂墳墓群G支群	12号墳	第1主体部	棺内小口部頭部付近	1B-h	左	東	5-6

玉類は1か所に集中する場合頭部から胸部にかけてと思われる部分に分布することが多い。したがってこの場合、管玉が分布する北西の端に頭部が存在していたと解釈できる。もしそうだとした場合でも南東小口まで約150cmほどの空間が存在するため、当時の平均身長が150~160cm程度であることを考えると、伸展葬に十分な空間が確保されている。このように埋葬位置を推定した場合、銚は被葬者の胸の上当たる位置に副葬されている。

京都府峰山町金屋1号墓は後期後葉の台状墓であるが、第6主体部では頭部左側、第12・15主体部では上半身左側、第14主体部では下半身右側に配置されている。切先の方角は、頭部に置かれたものが東部側を向き、肩より下半身側に置かれたものが爪先を向くという前期古墳の刀剣類の配置に近い傾向がうかがわれる。^(注3)

京都府網野町浅後谷南墳墓は後期後葉の台状墓であるが、第1主体部では上半身の右側に置かれている。

京都府峰山町赤坂今井墳丘墓は庄内期前半の墳丘墓であるが、第2主体部で上半身の左側、第3・7・8・11主体部では頭部の右側に配置されている。やはり切先の方角と頭位の間には何ら関係は見られない。^(注4)

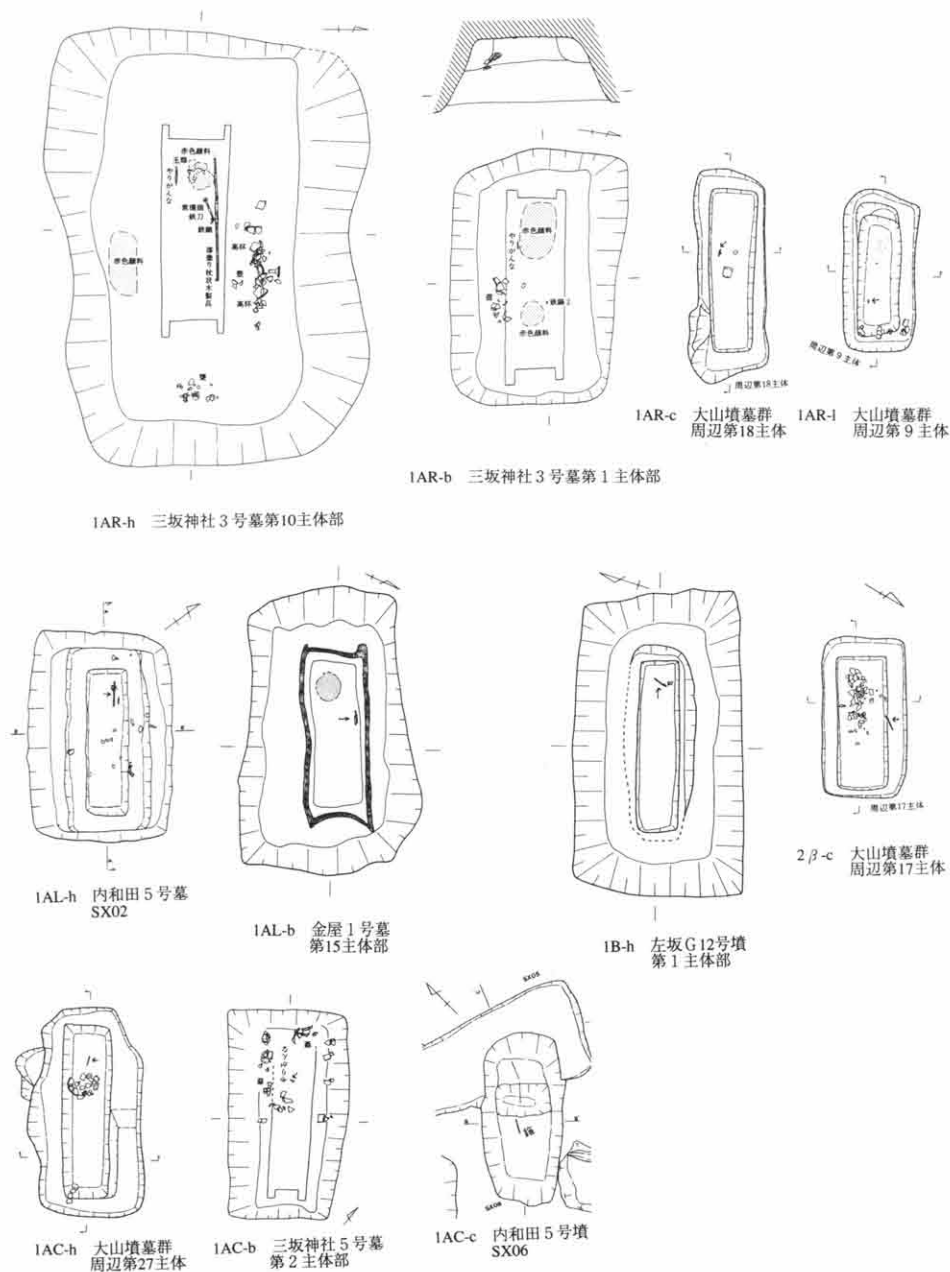
京都府野田川町内和田5号墓は庄内期前半の台状墓であるが、SX02が足元右側、SX03が頭部右側、SX06とSX14が中央部に配置している。切先は頭部側に置かれたものも、足元に置かれたものも、頭部側を向いている。

京都府大宮町左坂墳墓群G支群12号墳は庄内期後半～布留0式に前後する時期の台状墓であるが、第1主体部の棺内に頭部側の小口板に平行して置かれている。

3. 分類

以上見てきた鉤の副葬位置について、以下の基準に基づいて分類する。

- 1 棺内を1類、棺外を2類、墓壙上を3類とする。



第1図 鉤副葬位置分類図(上が頭位)

- 2 1類の内、長側板平行をA類、小口板平行をB類とする。
- 3 1A類の内、被葬者の右側をR類、左側をL類、中央をC類とする。
- 4 1類の内、被葬者の頭部付近をh類、上半身付近をb類、中央付近をc類、下半身付近をl類とする。
- 5 2類の内、棺蓋上を α 類、裏込め土上を β 類とする。
- 6 2類の内、そのほかの状況がわかるものは1類に準じて分類する。

4. 副葬位置の推移

(1)後期初頭

三坂神社墳墓群においては第1表より、1AR-h類2例と1AR-b類1例が見られ、左坂墳墓群では3例とも1AR-b類である。

(2)後期前葉

三坂神社墳墓群で1AR-h類1例と1AC-b類1例が見られる。

(3)後期中葉

大山墳墓群では1AR-h類1例、1AR-l類1例、1AR-c類1例、1AC-h類1例、1B-h類1例、2 β -c類1例、3類1例が見られる。

(4)後期後葉

浅後谷南墳墓では1AR-b類1例、3類1例が見られる。金屋1号墓では1AR-l類1例、1AL-h類1例、1AL-b類が2例が見られる。

(5)庄内期前半

赤坂今井墳丘墓で1AR-h類4例、内和田5号墳で1AR-h類1例、1AR-l類1例、1AC-c類2例が見られる。

(6)庄内期後半

左坂墳墓群で1B-h類1例が見られる。

時期ごとに見ると後期の初頭においては1ARのhもしくはb類に限られ、h類をb類の一部とみなせば、すべてが1AR-b類に包含される。従って弥生後期に入って鉦が副葬され始めた時期においては1AR-b類が最も標準的な副葬位置であったと考えられる。また、1AR-h類は三坂神社墳墓群中最大規模の3号墓第10主体で見られ、後の大山墳墓群7号墓第1主体でも見られることから、墳墓(群)の中心的な被葬者に対して特にそのほかの被葬者と分離して行われる1AR-b類の変種と考えられる。やや時期が下って後期前葉になると被葬者の上に置く1AC類が現れる。また中葉になると下半身に置く、1AR-l類、小口の頭側に置く1B-h類、裏込め上に置く2 β -c類、墓壙上に置く3類が現れる。しかし被葬者横に置く場合は右側に置くという原則は守られることが多く、左側には置かれない。しかし後期後葉に入るとこの原則は崩れ、左側にも置かれるようになる。庄内期に入っても前半においては上半身右側の原則は守られ、1AR-h類が5例を占めるが、被葬者の上(1AC-c類)にも置かれる。庄内期も終わりに近づく

第2表 分類別変遷表

	1類									2類		3類	
	A類									B類	α類		β類
	R類				C類			L類					
	h類	b類	c類	l類	h類	b類	c類	h類	b類	h類	c類		
後期初頭	2	4											
後期前葉	1					1							
後期中葉	1		1	1	1					1		1	
後期後葉		1		1				1	2			1	
庄内期前半	5						2	1	1				
庄内期後半										1			
細分の合計	9	5	1	2	1	1	2	2	3	2	0	1	2
左右別合計	17				4			5					
向きの合計	25									2			
棺内外の合計	27									3			

と小口の頭側(1 B-h類)に副葬される。

5. 階層構造と副葬位置

丹後地域において数多くの弥生後期の墳墓が調査されたが、中心主体に鉤が副葬された例はわずか4例にとどまる。^(注5)そして上半身特に頭部右側(1 A R-h類)を原則として副葬され、庄内期後半に小口側(1 B-h類)に移行する。

野島 永が丹後の弥生墳墓について、中心主体およびそれを囲んで切り合う主体部の構造を埋葬中核構造と呼んだが、この埋葬中核構造の内、中心主体部を省いたものを中核主体と便宜的に呼ぶこととする。また、墳頂部にあつて中心主体と切り合わないものを非中核主体と呼ぶこととする。中核主体では頭部右側(1 A R-h類)も多いが、被葬者の上(1 B類)や上半身左側(1 A L-b類)や、足下右側(1 A R-l類)に置かれたりもする。非中核主体は頭部右側か被葬者の上に置かれる。周辺主体は古い段階では上半身右側(1 A R-b類)を原則とするものの、時期が下ると原則を離れた副葬位置が多くなる。しかし時期が下がっても上半身(頭部)右側は副葬位置の主体を占める。

6. まとめ

以上丹後地域の弥生墳墓における鉤の配置を見てきたが、弥生時代後期においては、棺内で長側板に平行して、被葬者の上半身特に頭部の右側に置く例(1 A R-h類とb類)が卓越することが明らかとなった。また、切先の方向は頭位とは特に関係しないことも明らかとなった。しかし、時期が下るにつれて上半身側だけでなく、下半身側に置く例や、頭部に小口板と平行して置く例、墓壙上や木棺の裏込め土の上に置く例などが加わり、被葬者の左側に置くものも現れる。ただし、時期が下がっても上半身と右側は強く意識され、このどちらかは守られることが多い。したがって下半身(足下)左側という事例は丹後地域内では管見に入らなかった。

時期が古いほど副葬位置が定まっており、下がるほどバラエティが増すという事実は、後期初頭に完成された習俗として丹後に鉤副葬が導入されたことを示唆する。丹後に先行して鉤を専ら

副葬する地域は他にはないため、日本国内からの影響というよりは、海外の墓制の影響と見るべきであろう。^(注7)ここで朝鮮半島の例を見ると、韓国側では茶戸里遺跡、老圃洞遺跡、林堂洞遺跡など洛東江流域に鉦の副葬圏が見られる。北朝鮮側では平壤近郊の夫祖叢君墓で1例見られ、慈江道渭原郡龍淵洞遺跡でも1例見られるが、朝鮮半島での副葬習俗において、副葬品に鉦を用いる地域は洛東江流域と見ていいだろう。^(注8)丹後地域の鉦副葬習俗は原三国時代の弁韓の地域である洛東江流域からもたらされた可能性が高い。階層構造との関係では、中心主体では副葬例が少ないことと、1AR-h類が比較的遵守されることが判明した。しかし、その他の主体部、特に周辺主体部では原則から外れる主体部も多いことが明らかとなった。

今回の検討で2α類、すなわち棺蓋上に分類されるものが存在しなかったが、これは次稿で検討する但馬地域に多いものである。

大山墳墓群で木棺裏込め土上に置かれた例があるが、こうした事例は三丹地域全体を見渡してもこれ一例のみであり、例外的なあり方と言える。

副葬される鉦の数量は基本的に1点であり、例外的に内和田5号墓SX02などで、2点の例がある。

今回は、丹後地域について検討したが、次稿では但馬、丹波地域について検討する。

(ふくしま・たかゆき＝調査第2課調査第1係調査員)

- 注1 福島孝行「赤坂今井墳丘墓に見る階層制」(『京都府埋蔵文化財情報』第76号) 2000
- 注2 肥後弘幸「弥生墳墓における石器、鉄製品、玉類の出土状況の検討－丹後の場合－」(『太邇波考古学論集』) 1997
- 注3 用田政晴「前期古墳における副葬品配置」(『考古学研究』第27巻第3号) 1980
- 注4 黒坪一樹「赤坂今井墳丘墓・今井城跡・今井古墳発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第92冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- 注5 左坂16号墓、17号墓は人為的な造作によって墳丘、墓域を作り出していないため、1基の独立した墳墓とは認められず、階層性に関わる意味での中心主体からは除外した。
- 注6 野島 永・野々口陽子「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(2)」(『京都府埋蔵文化財情報』第76号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- 注6 例えば北部九州の事例では福岡県全域で78例の墳墓出土例があるが、中期とされるものは9例、中期後半に限定できるものは3遺跡4例に過ぎない。また後期前半、中葉に限定できるものは無く、後期後半～末とされる時期から増え始め弥生時代末～古墳時代初頭に爆発的に増加する。墓制全般の影響関係は総合的に考えなければならないが、この段階での鉦副葬習俗の展開はむしろ丹後からの影響を考えるべきである。資料検索は川越哲志編『弥生時代鉄器総覧』(広島大学文学部考古学研究室考古学研究室) 2000による。
- 注7 朝鮮半島の事例については東 潮氏の『古代東アジアの鉄と倭』(溪水社) 1999によった。野島永は素環頭刀などから後期初頭において新・漢(楽浪郡)との関係を指摘しているが、楽浪郡の領域には2例ほどしか鉦は副葬されていない。
- 野島 永「弥生時代の対外交易と流通－弥生墳墓の副葬鉄器を通して－」(広瀬和雄編『丹後の弥生王墓と巨大古墳』) 2000

京都府内出土の石鍋いしなべについて

中島史子

1. はじめに

石鍋は10世紀末に出現し、16世紀初頭に消滅すると考えられている滑石製の鍋で、近年全国的な視野で分類・編年が行われ、平成5年に木戸雅寿氏がその生産と流通についてまとめている^(注1)。

石鍋の生産地としては長崎県西部や福岡県北部が古くからよく知られており、最近では山口県西部でも確認されている。近畿地方では、和歌山・丹後に滑石鉱脈が存在することが明らかになってきており^(注2)、生産地の存在が想定されているが、今のところ確認されていない。

木戸氏によると、石鍋の分布には近郊地流通(生産地を中心とする分布)と遠隔地流通(九州以東の都市を中心とする分布)の2つの傾向があり、後者については、瀬戸内海沿岸や草戸千軒町遺跡・京都・鎌倉などの特定地域に集中する傾向があり、海運を利用して都市に搬入された後、周辺地域にもたらされたと考えられている。畿内に分布する石鍋の型式は、初期段階のものが京都にわずかに持ち込まれる以外はⅢ類以降の鍔付きのものが圧倒的に多い。

京都府内出土の石鍋については、1982年の岡田晃治氏の論考がある^(注3)。岡田氏は、丹後地方出土の滑石製石鍋を集成・分類するとともに、石鍋の生産地が丹後地方にも存在する可能性があることを指摘された。その根拠の一つに、丹後地方にある滑石鉱脈の存在が挙げられるが、未だ生産遺跡は確認されていない。本稿は、京都府内出土の石鍋を集成し、上記のような地方と都市(特に都)での出土傾向がうかがえるか検討しようとしたものである。

2. 京都府内での出土状況

表1は京都府内出土の石鍋を集成したものである。出土地点は百を超えるものの、残念ながら、出土点数と型式が明らかなものは半数に満たなかった。資料が限られる中で出土の傾向をまとめると次のようになる。

(1) 出土遺跡の分布からみていくと、その大半が京都や宇治といった都市遺跡での出土が多く、地方での出土量は少ない。遺跡の性格としては京都市内では寺院関係や八条三坊あたりでの出土が目立つ。宇治市はもちろん寺院関係の遺跡が多く、乙訓地域では山陽道や西国街道沿いの主要遺跡から出土するようである。その他の地方における出土地点は、物資の集積地(公私は問わない)もしくはその輸送ルートにあたるようになるようである。出土点数が10点を越えるのは六角町遺跡・平安京左京八条三坊・中野遺跡の3例で、六角町遺跡・平安京左京八条三坊での出土点数は群を抜いている。そのほかの遺跡ではほとんどが1・2点の出土である。

(2) 出土資料の型式については、ほとんどが鍔を持つタイプ、木戸分類のⅢ類であり、Ⅲ類

でも a, b が多い。口縁部の 2 方または 4 方に瘤状把手がつくタイプ(Ⅱ類)はわずかに 5 例見られるのみである。時期的には、平安後期から室町にかけて出土するが、鎌倉時代にピークがあるようである。

(3) 出土状況については、遺構から出土した例は少なく、包含層出土資料が多い。多くが破損品で、煤が付着していることから鍋として使用されていたことは明らかである。中には鏝を削り取って平滑にするなど再加工し、転用されている例がみられる。石鍋の型式と遺構の年代観にズレのある場合があるが、これは石鍋として使用された後、別のものに転用された時間が反映されているものと考えられる。また、平安京左京八条三坊二町出土の断面に漆が付着している資料や烏丸線内遺跡No. 71地点出土の須恵器と接いでいる資料などがあることから大事に使用していたことがうかがえる。

(4) 再加工による転用品は温石と考えられているものが圧倒的に多く、ほかに硯やスタンプ等がある。温石は焼いた石を布などで包んで懐中に入れ、身体を暖めるのに使われたもので、病気の治療にも使用されたようである。また、鎌倉ではスタンプに転用される例が多くみられるようであるが、明らかにスタンプと考えられるのは木津川河床遺跡表採の 1 点のみである。平安京左京八条三坊出土資料に秋草文が浮き彫りにされた例や線刻が施された例があるが、スタンプと同様のものと考えられる。

以上の傾向は、これまでの研究成果とほとんど変わっていないが、若干気付いた点を述べておきたい。まず、スタンプについては、生産地である長崎県石鍋製作所跡でも出土していることから、製品として動いている可能性があり、消費地での転用とは限らないといえる。

3. おわりに

今回は、石鍋について現在刊行されている文献にあたって集成したが、出土していることは記載されているものの出土点数や型式が不明なものが多々あったため、出土地名表を作成するにとても苦労した。したがって、実際の出土量はもっと増加すると思われる。

最後に若干の所見を述べてまとめにかえたい。

石鍋は、生産地が限定されること、全国的に分布することから広域流通品として注目されてきた。畿内では、出土量が13世紀ごろに増加する傾向にあり、その時期に輸入陶磁器が全国に流通することからその流通ルートに乗って運び込まれるのではないかと考えられる。京都府内での出土状況から、その供給先の中心となるのは寺院およびその門前町で、九州地方のように定着していないことから貴重品であったと考えられる。なぜ畿内で鎌倉から室町にかけての時期に石鍋の受容が高まるのか、これまでの技術史や流通史からの視点に加え、調理法についてなど食文化史の視点から検討してみてもよいのではないかと思う。

なお、資料収集にあたっては、植山 茂氏((財)京都文化博物館)、松井忠春(当調査研究センター)にお世話になった。記して感謝したい。

(なかじま・ふみこ＝調査第2課調査第4係調査員)

- 注1 木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究』IX 中世土器研究会 1993
「石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 1995注1
- 注2 山岡邦章「あら川石筆山考一紀ノ川南岸滑石鉞床の開發と現状1ー」『紀伊考古学研究』第3号
2000、泉 拓良ほか「農学部遺跡BF33の発掘調査」(『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和51年
度) 1977
- 注3 岡田晃治「丹後出土の石鍋」『太邇波考古』創刊号 両丹技師の会 1982
- 注4 鎌倉市千葉地遺跡などでは、砥石やスタンプがまとまって出土している(『千葉地遺跡』千葉地遺跡
発掘調査団 1982)。
- 注5 大瀬戸町教育委員会『大瀬戸町石鍋製作所遺跡』大瀬戸町文化財調査報告書第1集 1980

京都府内石鍋出土地名表

番号	遺跡名	所在地	点数	型式	遺構	時期	文献	調査機関	年次	備考
1	平安京右京	京都市	1	Ⅲ-a	SX22	13世紀初頭	花大考研報告7	花園大学考古学研究室	1989	
2	平安京右京1・4・ 15	京都市	4	Ⅲ-a, b	SE01・SD22	13~14世紀後半	花大考研報告9	花園大学考古学研究室	1994	
3	平安京右京5・2・ 9,16	京都市	1	Ⅲ-b	包含層		京文博報7	(財)京都文化博物館	1991	
4	平安京右京6・1	京都市	1	Ⅲ-a	溝V008	平安末~鎌倉	京市埋研報11	(財)京都市埋蔵文化財 研究所	1992	
5	平安京左京3・3・ 11	京都市	1	Ⅲ-a	SD46	16世紀代	平安京跡報告14	古代学協会・平安博物 館	1984	
6	平安京左京4・1	京都市	5	Ⅲ-a, b	SK10・SD13・ 包含層	12世紀後半1・戦 国1	文献6	平安京調査会	1975	
7	平安京左京4・3・ 13	京都市	2	Ⅲ-b	包含層・ SK49	平安後期・鎌倉 ~室町	平安京跡報告 11	古代学協会・平安博物 館	1984	
8	平安京左京5・3・ 8	京都市	4	Ⅲ-a, d	土坑62・包含 層	室町・鎌倉	平安京跡報告 19	(財)古代学協会	1996	転用品1点
9	平安京左京5・4・ 5	京都市	1	Ⅲ-a			京都市立会H6	京都市文化観光局	1995	
10	平安京左京6・2・ 6	京都市	3	Ⅲ-b	溝1	室町	平安京跡報告 17	古代学協会・平安博物 館	1986	温石1
11	平安京左京7・3・ 5	京都市	2	Ⅲ-a	包含層		平安京跡報告 15	(財)古代学協会	1985	
12	平安京左京8・3	京都市	28	Ⅲ-a	包含層	13~15世紀	京市埋研報6	(財)京都市埋蔵文化財 研究所	1982	
13	平安京左京8・3・ 2	京都市	2	Ⅲ-a	包含層		平安京跡報告 6	古代学協会・平安博物 館	1983	
14	平安京左京8・3・ 2	京都市	4	Ⅲ-a	井戸9・12		平安京跡報告 16	(財)古代学協会	1985	断面に漆が 付着する資 料あり
15	平安京左京8・3・ 3(1)	京都市	1	Ⅲ-a	2次土坑273	13世紀後半	京市埋研概H9	(財)京都市埋蔵文化財 研究所	1999	
16	平安京左京8・3・ 7	京都市	2	Ⅲ-a, b	包含層		京文博報1	(財)京都文化博物館	1988	
17	平安京跡左京5・ 3・11	京都市	1	Ⅲ-a	SK15	12世紀末~13世 紀前半	京埋七概80	(財)京都府埋蔵文化財 調査研究センター	1998	
18	烏丸線内遺跡No 51地点	京都市	1	Ⅲ-a	SE6	平安後期~鎌倉 後期	烏丸線年報-II -	京都市高速鉄道烏丸線 内遺跡調査会	1980	
19	吉田近衛町遺跡	京都市	3	Ⅲ-a~ b	SK01	室町	府埋概1978	京都府教育委員会	1978	
20	京大校内遺跡	京都市	1	Ⅲ-a	SD04	13世紀前半	京大年報1995	京都大学農学部構内遺 跡調査会		
21	京大校内遺跡73・ 84地点	京都市	1	Ⅲ-b	SK2	13世紀後半~14 世紀前半	京大年報S55	京都大学埋蔵文化財調 査センター	1981	
22	京大校内遺跡SD 03,SD06	京都市	3	Ⅲ-a	SD03,06,11 中層	13世紀	京大報告II	京都大学埋蔵文化財調 査センター	1981	
23	三条西殿跡	京都市	5	Ⅲ	包含層		平博紀要3	古代学協会・平安博物 館	1971	
24	三条西殿跡	京都市	1	Ⅲ-a~ b	烏丸小路西 側溝	13世紀後半	平安京跡報告7	古代学協会・平安博物 館	1983	
25	少将井遺跡	京都市	1	Ⅲ-a	?		文献3	平安博物館	1972	
26	相国寺境内承天閣	京都市	1	Ⅲ-a	WSK254		文献1	大本山相国寺承天閣美 術館	1984	
27	農学部遺跡BE33	京都市	2	Ⅱ,Ⅲ- a	包含層・ SD108・102・ 105		京大年報S51	京都大学農学部構内遺 跡調査会	1977	
28	病院内遺跡AE15	京都市	9	Ⅲ-a			京大年報S51	京都大学農学部構内遺 跡調査会	1977	

29	京大校内遺跡AM17区	京都市	3	Ⅲ-B	SK62・SD130・SE4	13後半	京大年報1992	京都大学埋蔵文化財センター	1995	硯1
30	法住寺殿跡	京都市	7	Ⅲ-a, b	井戸G3・I13		平安京跡報告13	古代学協会・平安博物館	1984	全て再加工
31	六角町遺跡	京都市	53	Ⅲ	土坑62・包含層	鎌倉	文献5	同志社大学文学部文化学科考古学研究室六角町遺跡研究グループ	1976	
32	平安京右京8・2・8	京都市	2以上		包含層	平安後期以降・室町	平安京跡発掘調査概報S63	京都市文化観光局	1989	西市外町
33	平安京右京1・3・2	京都市	?			平安?	京市埋研概H8	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1998	
34	平安京右京1・3・9,10	京都市	1				府埋概1981-1	京都府教育委員会	1981	
35	平安京右京1・4・12,13	京都市	?		SG10	13世紀	京市埋研概H8	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1998	
36	平安京右京2・2	京都市	?				京市埋研概S58	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1985	
37	平安京右京2・3・9,10	京都市	1		包含層		花大考研報告8	花園大学考古学研究室	1993	
38	平安京左京1・2・10	京都市	1		SK245	13世紀後半～14世紀前半	京埋七概80	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	1993	温石?
39	平安京左京1・3	京都市	?				京市埋研概H9	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1999	
40	平安京左京2・3	京都市	?			室町～安土	京市埋研概H3	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1995	
41	平安京左京4・4	京都市	?				京市埋研概H2	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1994	
42	平安京左京4・4・2	京都市	?			室町後半	京市埋研概H5	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1996	
43	平安京左京6・1	京都市	?		SE32	平安後期～鎌倉後期	京市埋研概S61	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1980	
44	平安京左京6・3	京都市	?				平安京跡発掘調査概報S57	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1983	
45	平安京左京7・2・7,8,9,10	京都市	?			鎌倉	京市埋研概H7	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1997	
46	平安京左京8・2	京都市	1		SK31	～室町	平安京跡発掘調査概報S57	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1982	線刻・穿孔あり
47	平安京左京8・2・14	京都市	?			鎌倉・室町?	京市埋研概H8	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1998	
48	平安京左京8・3	京都市	1		包含層	13～15世紀	京市埋研報6	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1982	転用品?
49	平安京左京8・3	京都市	1		包含層	13～15世紀	京市埋研報6	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1982	秋草文浮き彫り
50	平安京左京8・3	京都市	1		SD12	13～15世紀	京市埋研報6	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1982	線刻画
51	平安京左京8・3・16	京都市	?			鎌倉	京市埋研概H2	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1994	
52	平安京左京8・3・2	京都市	1		包含層		平安京跡報告6	古代学協会・平安博物館	1983	舟形
53	平安京左京8・3・3(2)	京都市	?		井戸20	鎌倉～室町	京市埋研概H9	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1999	
54	平安京左京8・3・6,7,10,11	京都市	?			平安～鎌倉	京市埋研概H8	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1998	
55	平安京左京9・2・16	京都市	?			平安～鎌倉	京市埋研概H5	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1996	
56	平安京左京9・2(1)	京都市	?			平安～室町	京市埋研概H4	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1995	
57	平安京左京9・3	京都市	?				京市埋研概(発掘調査編)S56	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1983	
58	平安京左京内膳町	京都市	5				府埋概1980-3	京都府教育委員会	1980	
59	平安京高倉宮・曇華院	京都市	1以上		SE12	～12世紀前半	文献4	古代学協会・平安博物館	1983	温石他
60	烏丸線内遺跡No71地点	京都市	1		包含層	平安後期～鎌倉前期	烏丸線年報-Ⅲ-1	京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会	1981	漆で須恵器と接合
61	吉田近衛町遺跡	京都市	4以上		S2溝, S102, S103, S108	13世紀～14世紀後半	京文博報4	(財)京都文化財団	1989	
62	史跡醍醐寺境内	京都市	?		SK10	鎌倉・室町	京市埋研概H2	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1994	
63	上久世遺跡	京都市	?				京市埋研概S57	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1984	
64	大谷中・高等学校校内遺跡	京都市	1	入子	包含層		文献7	大谷高等学校法住寺殿遺跡調査会	1984	
65	長刀鉾町遺跡	京都市	2		包含層	平安後期・鎌倉～室町	平安京跡報告11	古代学協会・平安博物館	1984	

京都府内出土の石鍋について

66	鳥羽離宮跡第67次	京都市	1		土器溜SX1	平安末	鳥羽離宮跡調査概要 S55	(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市埋蔵文化財調査センター	1981	硯
67	南春日町遺跡第21次	京都市	?				京市埋研概H2	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1994	
68	史跡醍醐寺境内2	京都市	?			室町	京市埋研概H9	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1999	
69	史跡醍醐寺境内	京都市	?			鎌倉～室町	京市埋研概H5	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1996	
70	天鼓の森古墳	京都市	?				京市埋研概S61	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1980	
71	最勝寺・岡崎遺跡	京都市	?			平安後期	京市埋研概H3	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1995	
72	史跡名勝嵐山	京都市	?				京市埋研概H4	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1995	
73	長岡京左京4・4	京都市	?				京市埋研概S57	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1984	
74	長岡京北辺官衙(宮301次)	向日市	1	II	包含層	11世紀?	向埋報43	(財)向日市埋蔵文化財センター	1996	
75	長岡京右京2・4・11～14(右京202次)	長岡京市	2	II,III-b	包含層	平安・鎌倉～室町	長埋七年S60	(財)長岡京市埋蔵文化財センター	1987	
76	長岡京右京5・1・12(右京618次)	長岡京市	2	III,III-b			長埋七年H10	(財)長岡京市埋蔵文化財センター	2000	温石1
77	長岡京右京5・2・5(右京114次)	長岡京市	1	III-a	包含層		長埋七報1	(財)長岡京市埋蔵文化財センター	1984	
78	長岡京右京6・2・5(右京142次)	長岡京市	1	III-a	SE14203	15世紀	長埋七年S58	(財)長岡京市埋蔵文化財センター	1984	
79	長岡京右京3・3・16(右京500次)	長岡京市	1	III-a			長埋七年H7	(財)長岡京市埋蔵文化財センター	1997	
80	長岡京跡右京2・3(右京12次)	長岡京市	2	III-a	包含層		府埋概1979	京都府教育委員会	1979	
81	長岡京右京3・3・7、今里遺跡、井ノ内遺跡(右京538次)	長岡京市	2	III-a	SE16	13世紀	長埋七年H8	(財)長岡京市埋蔵文化財センター	1998	
82	長岡京右京6・3・1・開田城ノ内遺跡(右京566次)	長岡京市	2	III-a?	SE01	14世紀前半	長市報38	長岡京市教育委員会	1998	温石1
83	長岡京右京5・3・6(右京411次)	長岡京市	1	III-b	SK41101	鎌倉	京埋七概53	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	1993	
84	長岡京右京3・4・14(右京480次)	長岡京市	1	III-d			長埋七年H6	(財)長岡京市埋蔵文化財センター	1996	
85	長岡京右京5・3・4(右京460次)	長岡京市	?		包含層	平安～鎌倉	長埋七年H5	(財)長岡京市埋蔵文化財センター	1995	
86	長岡京右京8・1・11、12(右京595次)	長岡京市	1		包含層	鎌倉	長埋七年H9	(財)長岡京市埋蔵文化財センター	1999	
87	百々遺跡	大山崎町	3	II,III-a	SR34901・SE349112	12世紀前半・10世紀後半～11世紀初頭	京埋七報24	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	1998	
88	中海道第37次	向日市	1	III-a	包含層	13世紀代?	向埋報44	(財)向日市埋蔵文化財センター	1997	
89	清水谷南遺跡	長岡京市	1	III-b	表採	室町～桃山	長埋七年S61	(財)長岡京市埋蔵文化財センター	1988	
90	御屋敷遺跡	向日市	1			14世紀前半～中頃	向日市史上巻	向日市役所	1983	温石
91	祭ノ神遺跡第2次・長法寺	長岡京市	1				長市報24	長岡京市教育委員会	1990	
92	奥海印寺遺跡第3次	長岡京市	1		包含層	13世紀後半～14世紀前半	長市報20	長岡京市教育委員会	1988	温石1
93	祭ノ神遺跡第3次	長岡京市	5		SD11・SK13	13世紀後半～14世紀初頭	長埋七年H10	(財)長岡京市埋蔵文化財センター	2000	温石4、
94	西浦遺跡	宇治市	1	III	SD01	13～14世紀	宇治市報30	宇治市教育委員会	1994	
95	赤塚遺跡	宇治市	1	III-a	SX07	15世紀(石鍋は14世紀?)	宇治市報39	宇治市教育委員会	1997	
96	宇治市街遺跡(宇治壺番46)	宇治市	1	III-b	SD38	15～16世紀	宇治市報16	宇治市教育委員会	1990	
97	三室戸寺子院跡	宇治市	1		包含層		宇治市報35	宇治市教育委員会	1996	温石?
98	尊勝寺跡	宇治市	1		包含層	共伴した土師器皿は16世紀末頃	宇治市報48	宇治市教育委員会	2000	
99	三室戸寺子院跡	宇治市	3		包含層	遺跡は12世紀後半～15世紀後半	宇治市報14	宇治市教育委員会	1989	

100	白川金色院跡	宇治市	?		?	?	宇治市報43	宇治市教育委員会	1999	
101	横枕遺跡	網野町	2	Ⅱ	谷部埋土		京埋七概82	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	1998	
102	中野遺跡	宮津市	10	Ⅱ・Ⅲ	包含層	平安後期～室町	宮津市報3・5・7	宮津市教育委員会	1980	
103	定山遺跡	岩滝町	1	Ⅲ			定山遺跡発掘調査報告	岩滝町教育委員会	1980	
104	里遺跡	綾部市	1	Ⅲ-a	包含層	14世紀?	京埋七概41	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	1991	
105	法蓮寺遺跡	宮津市	2	Ⅲ-a	包含層		太邇波考古創刊	両丹技師の会	1982	
106	龍神社境内遺跡	宮津市	4	Ⅲ-a, c			太邇波考古創刊	両丹技師の会	1982	
107	木津川河床遺跡	八幡市	8	Ⅲ-a, d, e	表採	12世紀～15世紀	中近世土器の基礎研究	日本中世土器研究会	1993	
108	千代川遺跡(第10次)	亀岡市	1	Ⅲ-e	包含層		京埋七概21	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	1986	
109	千代川遺跡(第12次)	亀岡市	1	Ⅲ-c	包含層		京埋七概26	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	1987	
110	大川遺跡	舞鶴市	?	Ⅲ-c			舞鶴市史編纂だよりNo.173	舞鶴市史編纂室	1987	
111	木津川河床遺跡	八幡市	1	Ⅲ	包含層		京埋七概16	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	1985	
112	木津川河床遺跡	八幡市	1		表採		中近世土器の基礎研究	日本中世土器研究会	1993	スタンプ
113	古殿遺跡	峰山町	1				府埋概1977	京都府教育委員会	1978	
114	途中ヶ丘遺跡	峰山町	1		包含層		峰山町文化財調査報告3	峰山町教育委員会	1977	砥石?
115	大内城跡	福知山市	1		包含層		京埋七報3	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	1984	
116	柿添遺跡	精華町	1		SD9539	12世紀中葉～13世紀前半	京埋七概68	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	1996	
117	志高遺跡	舞鶴市	?				舞鶴市文化財調査報告4	舞鶴市教育委員会	1983	

※文献名はタイトルを省略し、以下のように記述した。

『埋蔵文化財発掘調査概報』1979	府埋概1979
『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第43集	宇治市概43
『京都府遺跡調査概要』第68冊	京埋七概68
『京都府遺跡調査報告書』第3冊	京埋七報3
『長岡京市埋蔵文化財センター年報—平成7年度—』	長埋七年H7
『向日市埋蔵文化財調査報告書』第43集	向日埋報43
『長岡京市文化財調査報告書』第24冊	長市報24
『S57 京都市埋蔵文化財調査概要』	京市埋研概S57
京都市埋蔵文化財研究所調査報告第6冊	京市埋研報6
京都文化博物館調査研究報告第1集	京文博報1
『京都大学構内遺跡調査研究年報』S55	『京大年報』S55
平安京跡研究調査報告 第14号	平安京跡報告14
『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報—』	烏丸線年報
『平安博物館研究紀要』第3号	平博紀要3
『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』	京大報告
『京都市内遺跡立会調査概報』平成6年度	京都市立会H6
長岡京市埋蔵文化財調査報告書1	長埋七報1

文献

1	『大本山相国寺境内の発掘調査』
2	『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物』
3	『少将井遺跡発掘調査報告』
4	『平安京高倉宮・曇華院』
5	『京都市右京区六角町遺跡調査概報』
6	『平安京跡発掘調査報告—左京四条一坊』
7	『大谷中・高等学校校内遺跡発掘調査報告書』

※平安京跡と長岡京跡の条坊については算用数字で以下のように省略して記載した。

(例) 平安京右京一条二坊三町=平安京右京1・2・3

戦争の誕生

—人間の攻撃性と戦争の社会的起源をめぐる比較考古学—

河野一隆

- | | |
|--------------|--------------------|
| 1. 人間と争い | 5. 守りと戦い |
| 2. 食人 | 6. 伝えられた戦争 |
| 3. 犠牲・殉葬 | 7. 戦争の考古学から平和の考古学へ |
| 4. 武器の誕生と祭器化 | 英文要旨 |

要旨

考古学的に戦争を研究すること、すなわち「戦争の考古学」が日本へ導入されたのは古いことではない。しかし、人間のいさかい・争いの痕跡を考古学的に認識しようとする試みは、それ以前からあった。特に、化石人骨の人為的？な破壊に注目した「食人」の神話が、長らく考古学者を拘束していたことは否めない。人間は争いもすれば協力もする。自ら物言わぬ考古資料を評価するとき、このような人間の攻撃性といった本能的な性質に帰して説明することは、厳に慎まねばなるまい。

同様に、厚葬墓、いわゆる王墓の成立期に特徴的に見られる犠牲・殉葬も、人間の攻撃性の証拠として引き合いに出すことは適切ではない。これら人間の供犠は、社会への全体的給付としての王の義務であり、権威・権力の生成の場といった観点から捉えられねばならないのだ。

いかにして道具は武器となるのか？日本では狩猟用の石鏃の重量が重くなった時点をそれとする研究成果があるが、これは中国でもあてはまる。しかし、武器は祭器でもある。道具から武器へ、そして祭器へという流れは、社会変化とも密接にかかわり合う。個人の争いが共同体の争いとなり、ひいては国家の争いとなる過程は、発展段階的な歴史認識を前提としている。これが正しいかは攻撃する側、守る側の考古学的証拠も検討しなければならないだろう。

村を守るための溝・濠・堤は、日本のみならず、ヨーロッパ・中国・アメリカにもある。特に攻撃されやすい入口が複雑化し、堤は改修される度に大規模化し、堅固となってきた。これらの防御的色彩の強い集落は、城壁をもった都市として継承されるものもあるが、それは戦争の恒常化を示唆するものなのだろうか？いや、そうではない。

戦争とは、語られ、歴史として創られるものである。支配者が、自らを王として権威付けるために戦争を手段として利用した考古学的証拠は多くある。また、組織化された軍隊は、王による支配を社会の構成員に意識させるための格好の舞台であった。社会的な争いが歴史的な「戦争」となるためには、攻防する双方以外の、歴史的な作用が必要だったのである。そこでは、戦争は英雄とともに、歴史的現在の説明原理として「意図的に」創り出される。この戦争の虚偽性を物的資料から暴き出すことこそ、「戦争の考古学」の大きな目的と見なしてよいだろう。

「戦争の考古学」によって、戦争と平和の問題にも、考古学者も主体的に関わっていけるようになる。21世紀に向けて、世界市民としての考古学、人間のための考古学の果たす使命は決して小さなものではない。

1. 人間と争い

日本考古学における戦争の研究は古いことではない。しかし、人間のいさかい・争いの痕跡を考古学的に認識しようとする試みには、膨大な研究の蓄積がある。人間の争いの考古学的研究とは、(1)武器、(2)防御施設、(3)殺傷人骨(または出土位置からの類推)、(4)武器および武器形祭器の使用ないし副葬などの物的証拠によって、過去の戦争を発見し、人類史の中に意義付けていく点にある^(注1)。近年では、国立歴史民俗博物館が実施したように、考古学の自省的な思潮と相俟って、学際的な共同研究対象領域と見なされるようになってきた。また、1996年にはイギリスのダラム大学で、ヨーロッパの戦争をまとめたシンポジウムが実施されている^(注3)。人類にとって戦いとは本能か？人間は戦いもすれば助け合いもする。それは、類人猿の世界でも同様だ。高畑由起夫によれば、母系的社会構成のニホンザルや父系的社会構成のチンパンジーにも恒常的に抗争は存在し、時には相手を死にいたらしめるとい^(注4)う。そうであれば、戦いが人間の本能かという問いに対する回答は、歴史研究の場ではなく、哲学に譲られねばなるまい。ましてや、歴史を闘争の事件史とみ、その展開を人間の本源的な形質(=生きるための戦い)に帰す闘争史観を、評価の土台とすることも、厳に慎まれねばなるまい。

歴史が人間のための物語であり、歴史家もその所産であるという観点からは、戦争を事件の契機とみなす闘争史観は、すぐれて20世紀的な歴史認識と言えなくもない。人類がかつてない悲惨な大量殺戮を経験した今世紀は、階級闘争こそが発展の原動力と睨んだ史的唯物論を背景として、過去から現在まで、歴史の中心には常に戦う人間があり、その延長線上には今世紀が投影された歴史的な戦争が繰り返されていた。それは、換言すれば、現在を基軸として平和な過去と未来とを直線的な時間観念上に策定し、歴史的現在を動態的構造と捉える中で、闘争を社会的に許容する歴史認識を意味していたに他ならない。戦争が生み出した多くの犠牲者は、平和を勝ち取るために「戦う」。そして、戦争は戦争を生み、いつしか悪魔の挽臼のごとき戦いの連鎖に、歴史の主人公に投影された私たちも、否応なく巻き込まれざるを得なかったのである。はたして、そうだろうか？

不幸なことに、現在も戦争は地球上から無くなっておらず、戦争の原因や過程も様々である。しかし、歴史家として戦争に対峙する時には、この闘争史観という眼鏡をはずして見なければならぬだろう。そうすることによって、戦争によって歴史が発展するという誤った歴史認識は無くなるはずである。結論を先に言えば、戦争とは実体がなく、戦争犠牲だけが現実である。考古学の研究で戦争を取り上げることが、戦いによらない平和の実現にどれだけ貢献できるのだろうか。これが、「戦争の考古学」の射程が過去の戦争を掘り返すだけに止まってはならない所以である。本稿では、先行研究の成果に導かれながら、戦争の社会的起源を追求していきたい。

2. 食人

人間の攻撃性と常に同時に語られるのが「食人」である。これは人間存在に関わる問題であるが、民俗誌でもインドネシアやニューギニアで多くの食人が報告されてきた。人骨に残る損傷が

人為的なものと判定されれば、考古学研究は人間の本能的な攻撃性を実証できるのだろうか。しかし、この問題は人為的か否かの判定が微妙であり、かつ、馬場悠男によると、現在では食人の証拠とされた資料の大部分に否定的な結論が出されている。^(注5) いく、北京原人の頭蓋冠には利器による陥没骨折が認められる、イタリアのモンテチルチェオ石灰岩洞窟の円形配列状の石の中央で発見されたネアンデルタール人の頭蓋骨は、食人儀式的証拠であるなど。これらは、現在、自然的な損傷またはハイエナによる偶然の作用であることが判明している。一方、アメリカ・コロラド州のマンコス遺跡では、骨幹部・骨端部が完全に破碎され、それらにはカットマークも認められることから、食人の確実な証拠とみなされてきた。しかし、オーストラリア先住民の再埋葬の際に骨を砕く儀式があるというから、今後も検討を要する。なお、沖縄県で発見された港川人には、左右の肘関節に同形の

傷痕があって、葬送儀礼に当たって、意図的に付けられたものだという。中国では、手足の指を切り落としたり、抜歯を行ったりして、通過儀礼や哀悼の象徴とすることを割体と呼び、死体の割体(割体葬儀)は、死者が祟りをして生者に災いをもたらさないようにする呪的行為と見なされていた。^(注6) 春成秀爾も哀悼抜歯について民族例を参照して、縄文時代の抜歯風習について新たな視点から評価を与えて^(注7) いる。これら割体は言うまでもなく「食人」ではない。

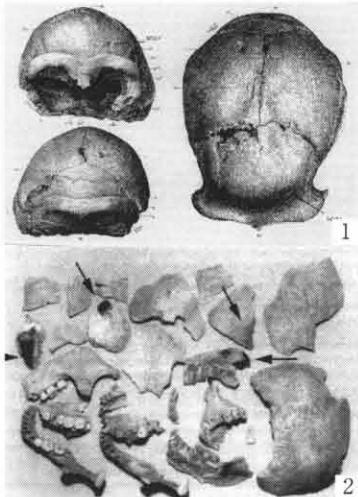
以上の検討から、食人を示す考古学的証拠はなく、まして「食人風習」などというものは無かったと断言できる。それは、民俗誌に触発された近・現代人が過去の人間に着せた汚名に過ぎないのである。



第1図 戦う人間

人間はさまざまな武器を取って戦った。

(注14より、ヨーロッパ：中石器時代～銅器時代)



第2図 食人の痕跡

1. 北京原人の頭蓋骨
2. アメリカ・キャニオンビュート^(注8) 3遺跡^(注9)
(注3より)

3. 犠牲・殉葬

史的唯物論の古典学説によると、人を殺して祭祀のための生贄とすることや、首長や領主のための殉死と言った現象、すなわち人間の供犠は、エンゲルスによれば、一夫多妻制を基礎として父権制確立後、階級国家形成に向かって発展する時期に登場し、マルクスによれば、捕虜は野蛮の第1時期は火あぶり、第2時期には神霊に捧げる儀礼、第3時期には奴隷のために供されるといふ。

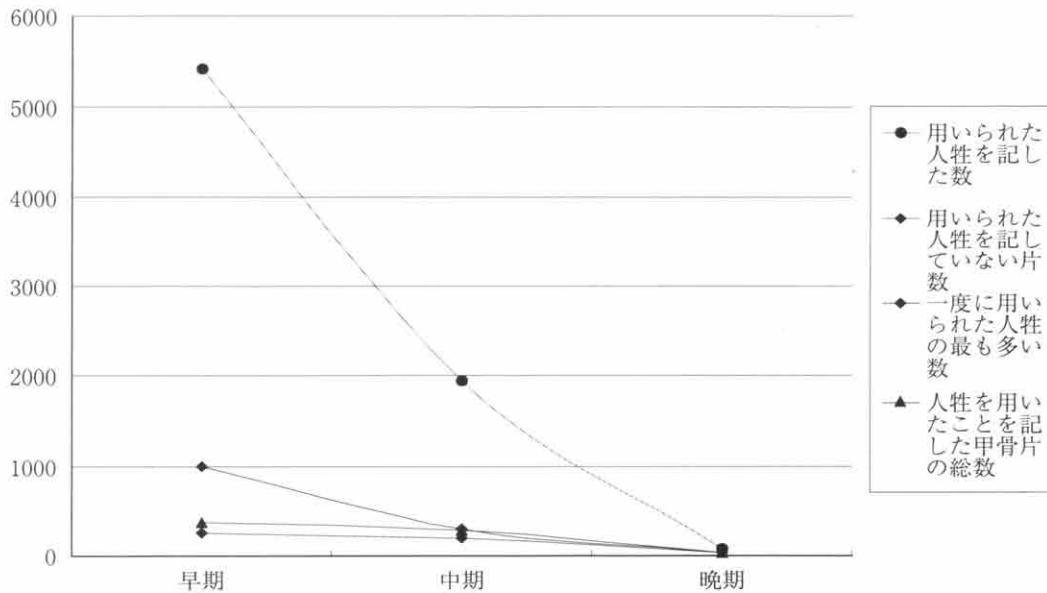
人間の供犠は、旧大陸・新大陸を問わず、時期的にも広く拡散しているが、特にオリエント(エジプト・メソポタミア)地域と中国地域で顕著に認められる。前者はエジプトでは第1王朝^(注8)、メソポタミアでは初期王朝期^(注9)、中国では殷王朝期^(注10)であり、多量の副葬品や検出した個人墓、いわゆる厚葬墓が登場する時期

と合致している点に注目する必要がある。これらを比較検討すると、犠牲・殉葬には、ある共通した流れが看取される。まず、男女合葬墓や住居基礎への奠基性などの先駆的な事例があって、次に厚葬墓への大規模な殉葬が出現するようだ。これは時期が下るにつれて減少し、厚葬墓は神殿と複合体化することで、形式化され、衰退・消滅する。一方、差異としては、オリエントでは高官・侍従などの王権の構成員が殉葬されるのに対し、中国では異民族の捕虜や奴隷などを王の祖先を祭るために殺した犠牲の比重が高い。また、エジプトでは棺に納められたものが多いが、メソポタミア・中国では棺に入れられないものが多いなどの差異もある。以上のような凄惨な現象は、専政的なアジア的古代国家が確立する過渡期に通文化的に認められ、共同体の制外者としての自然を畏怖する原始的な宗教の犠牲者であると捉えられていた。したがって、人間的で合理的な心性が芽生え、発達するにしたがって、犠牲・殉葬の習俗は衰退し、公的権力による規制の対象にされるという道程をたどると考えられてきた。

しかし、比較考古学的に分析してみると、これらは、遊牧騎馬民族などに見られる動物犠牲とはやや異質な観念体系に基づくものであり、社会的な機能、共同体の再生産のための人間の供犠という逆説的な意味合いが強く全面に立ち現れていることに気付かされる。それは、共同体の再生のための儀式装置として王墓が登場する時期に、犠牲・殉葬習俗が盛行する^(注11)事実が示唆している。これら犠牲・殉葬は、共同体の時間・空間を支配し、社会的規範を実現するための、異次元^(注12)交換を目的とした儀式的構造の中で動態的に捉えられねばならず、人間の攻撃性によって説明することは不適切といわざるを得ない^(注13)。

4. 武器の誕生と祭器化

人間の攻撃性が考古学的に認められないとすれば、道具が武器として特化するのはいかなる契機によるものか。J. チャプマンはヨーロッパの中石器時代から銅器時代までの抗争を瞥見する

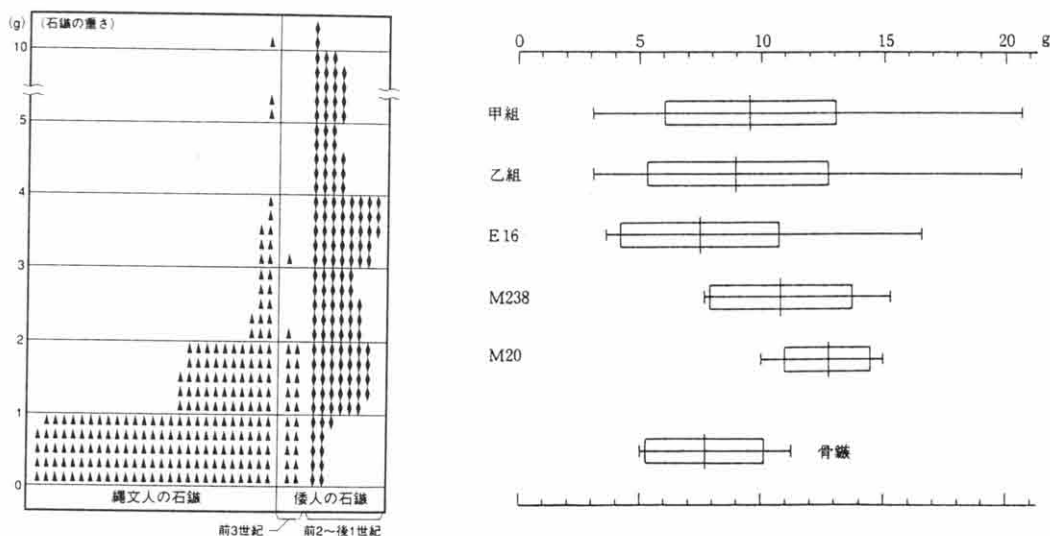


第3図 殷代における殉葬者数の変遷
(注10書より作成)

中で、道具(tool)・道具型武器(tool-weapon)・武器型道具(weapon-tool)・武器(weapon)を段階的に捉えた。^(注14)日本では狩猟用の石鏃の重量が重くなった時点^(注15)を武器の誕生と見る佐原 眞の研究成果が良く知られている。岡村秀典は河南省安陽出土の鏃重量を検討し、墓に副葬された鏃が建築遺構出土のものより相対的に重く、骨鏃は後者に近いことを明示した。^(注16)新石器時代以降、濠や土塁を築いた防御的集落が築かれることと鏃の重量化とは、盾と矛の関係にあるので、世界的に自明の現象のように見える。しかし、後述するように集落の防御性と見なされる諸施設が、一概に恒常的な戦争状態に対するものかは検討を要するのと同様に、鏃の重量変化を過大に評価することにも慎重でありたい。というのは、武器の機能分化と戦闘形態の変化も併せて説明されねばならないと考えるからだ。

武器の機能分化で注目せねばならないのは、戦闘用武器と儀礼用武器(祭器)の分離である。^(注17)武器が祭器でもある所以は、武威による排除の論理にしたがって、聖別する道具へと容易に転化するからである。この論理が成立するためには、観念としての神=社会の規範が常駐・固定化した実体ではなく、浮遊し、拘束する境界領域に位置づけられていることを前提としなければならない。したがって、祭器としての武器の定型化には、神観念の変質をも投影されていたとみる視点からの分析も必要なのではなかろうか。^(注18)

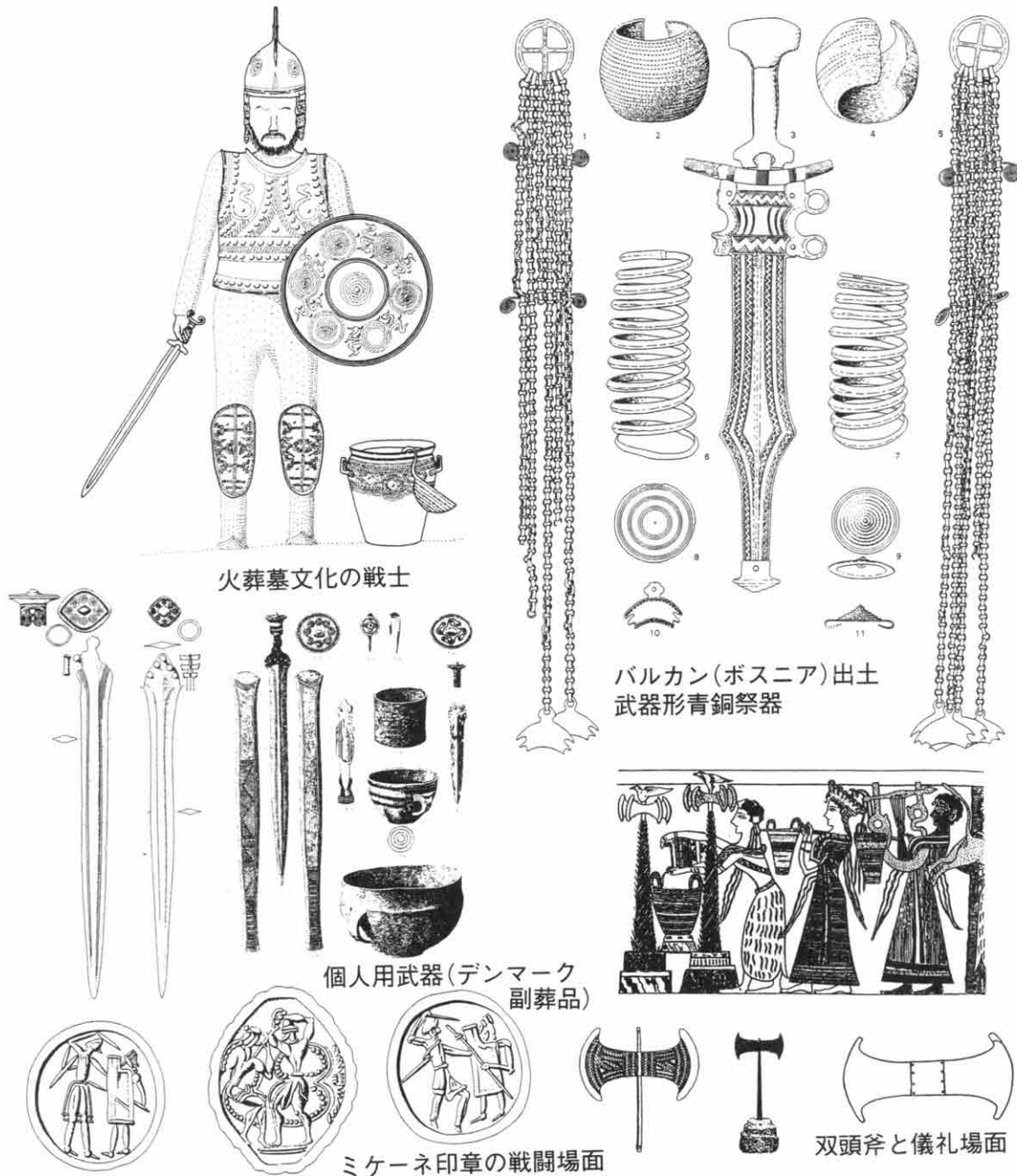
戦闘形態の変化も武器の変化を説明する上で無視できない要素である。佐原 眞^(注19)は、千田嘉博^(注20)のデータを引いて、遠距離用武器(鉄砲・弓矢・礮)による殺傷者数が常に近距離用武器(槍・刀)の殺傷者数を大勢として上回る点を指摘した。一方、藤尾慎一郎は、戦士個人の能力発揮によって効果が左右される近距離用武器は、個人の英雄性の発現が視認されやすく、戦闘指揮官の誕生に道を付けたことを指摘する。^(注21)戦争犠牲者数の多寡で戦争を評価することは間違いだが、以上のような武器の用途に応じた変化を看過してはならない。



第4図 武器の誕生(左：石鏃重量の変化(日本) 右：河南省安陽出土鏃の重量)
(注15・16から)

ヨーロッパではエーゲ文明で、元来武器である双頭斧が儀礼に使われていることは、宮殿壁画などからも明らかである。^(注22) 一方、内陸部でもボスニア共和国のベリキモスニイでは、加飾された青銅製剣が耳飾り・髪飾りと共に出土した。火葬墓文化期の兵士の理念型は、触角式剣、加飾された胄・盾・膝当てなどを装備したものであったという。^(注24) 一方、東アジアでは中国の新石器時代の陶罐に石鏃が彩画されており、玉器・金属器でも武器が祭器に転化するプロセスを看取することができる。^(注25) さらに、日本列島では中国東北地方に起源を持つ青銅武器が、大型化や材質転換を経て共同体の祭器や副葬品として拡散することは、ここで改めて言うまでもない。

以上の検討を踏まえると、英雄の誕生についても新たな説明ができそうだ。英雄とは、時間・空間を共有する社会のために語られた物語の主人公であり、異常出生したか外界からの異人である場合が多く、戦争説話と結びついて、歴史的現在の説明原理の役割を社会によって担わされた社会的個人のことである。社会的な抗争・闘争は個人の感情のみを契機とするものでは決してない。物質・非物質的な資源への欲求が第一義的にあり、その表象をめぐる戦いこそが戦争となるのである。ロマン主義的な英雄時代があって、首長や王が生まれるのではなく、換言すれば、英雄とは歴史の実体として社会の成員によって認識されるよう、社会の規範に準じて策定されたものに他ならない。同様に、個人の争いが共同体の争いとなり、ひいては国家の争いとなる過程は、発展段階的な歴史認識を前提としている以上、戦闘指揮官としての英雄が社会構成体の総括的統一体に成長したと見なせるかについても再検討が必要である。後述するように、私は権力と権威が恒常的に更新されねばならない王権(神王王権)の権力生成プロセスの一環として、資源欲求・戦争・英雄を取り込んでいて、それが事件史としての歴史の認識と不即離にあると考えている。^(注26) したがって、戦争を国家形成との関連で捉えることは重要だけれども、それを主たる動因にできるかは政体分析を通じた議論の詰めが必要だと私は考える。



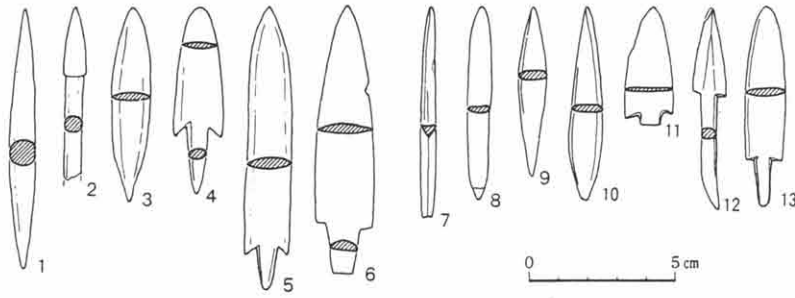
第5図 ヨーロッパにおける武器、武器形祭器
挿図出典 注23・注17引用の注22より

5. 守りと戦い

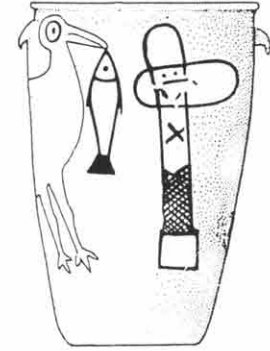
防御のための施設を周囲にめぐらせた集落は世界各地で知られている。これらは、北米西海岸の事例のように、必ずしも農耕の登場と関連するとは言えない事例も見つかっているが、V.G. チャイルドが指摘したごとく、^(注27) おおむね新石器文化の開始と連動する事例が多い。

ブリテンでは、新石器時代開始期に巨大な間欠周溝遺構(causewayed camps or enclosure)が登場するが、ドーセット州のハンブレドンヒル遺跡などで周溝内で発見された人骨が示唆するように、^(注28) 防御施設というよりも社会の共同的儀礼空間という色彩の強いことが指摘されている。いみじくも、J. トーマスが指摘したように、生産経済の開始は現存在としての人間のアイデンテ

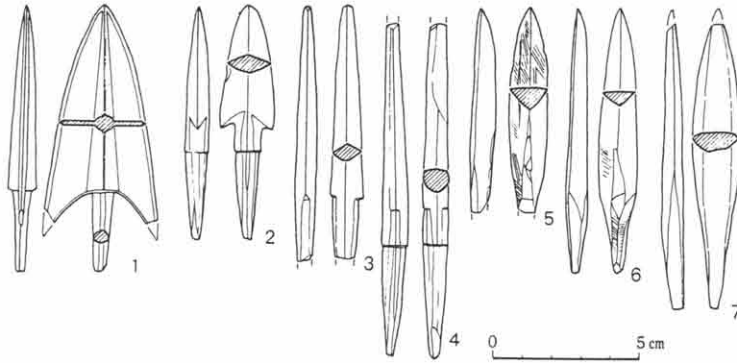
中国・河北省新石器時代の骨鏃



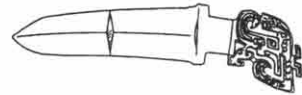
甕棺に描かれた石鏃



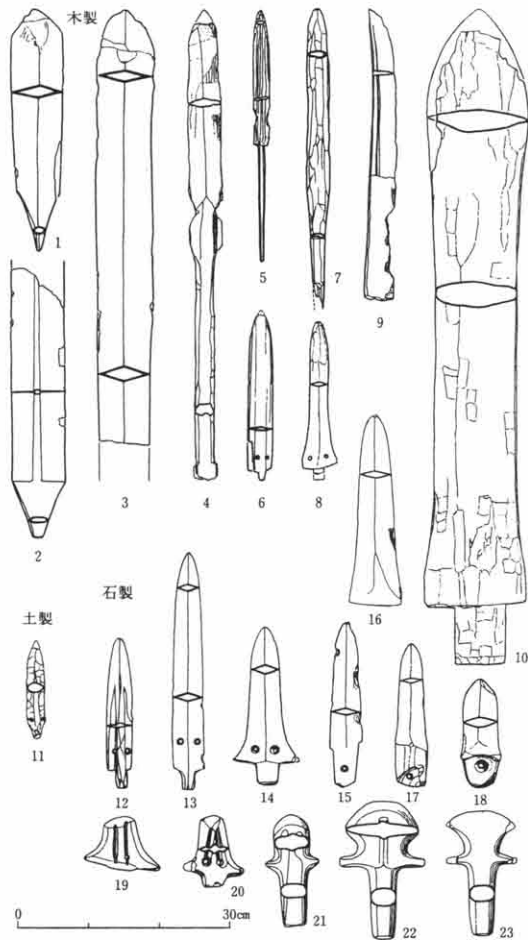
中国・安陽殷墟出土の鏃



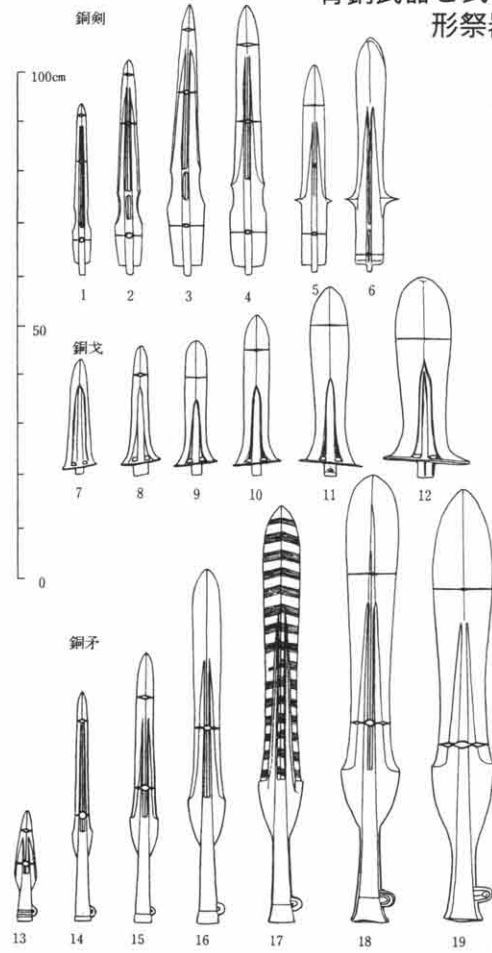
中国の武器形青銅器



武器形の木製品と石製品



青銅武器と武器形祭器



第6図 東アジアにおける武器、武器形祭器
挿図出典 注16・17より

イティを経済外的に拘束した可能性が高く、切り取られた分節空間の象徴として捉えることも聞くべき見解であり、藤尾慎一郎が詳説した新石器時代ブリテン島の「死の考古学」との関連も想起する必要がある。同様に、ギリシャのディミニ遺跡・セスクロ遺跡などの、石造囲郭施設を持った集落も一概に防御的性格とみなして良いかについても検討の余地がある。ところが、明確な抗争の痕跡が報告されたcausewayed campもある。グロウセスターシャイヤー州に所在するクリックリーヒル遺跡では、柵と周溝の途切れた出入口部分に最も鍬の集積が認められ、建物・柵とも焼亡していた。また、出入口部を入り組ませたり、櫓状の建物を建てたりするようになる変化は、日本の中世城郭の虎口の複雑化と同様の防御機能の変化として説明することができよう。防御壁そのものも厚みを増し、より堅固となっていく。ちなみにヨーロッパとアジアの防御集落の差異は、濠と土塁との位置関係の差にあるという^(注32)。

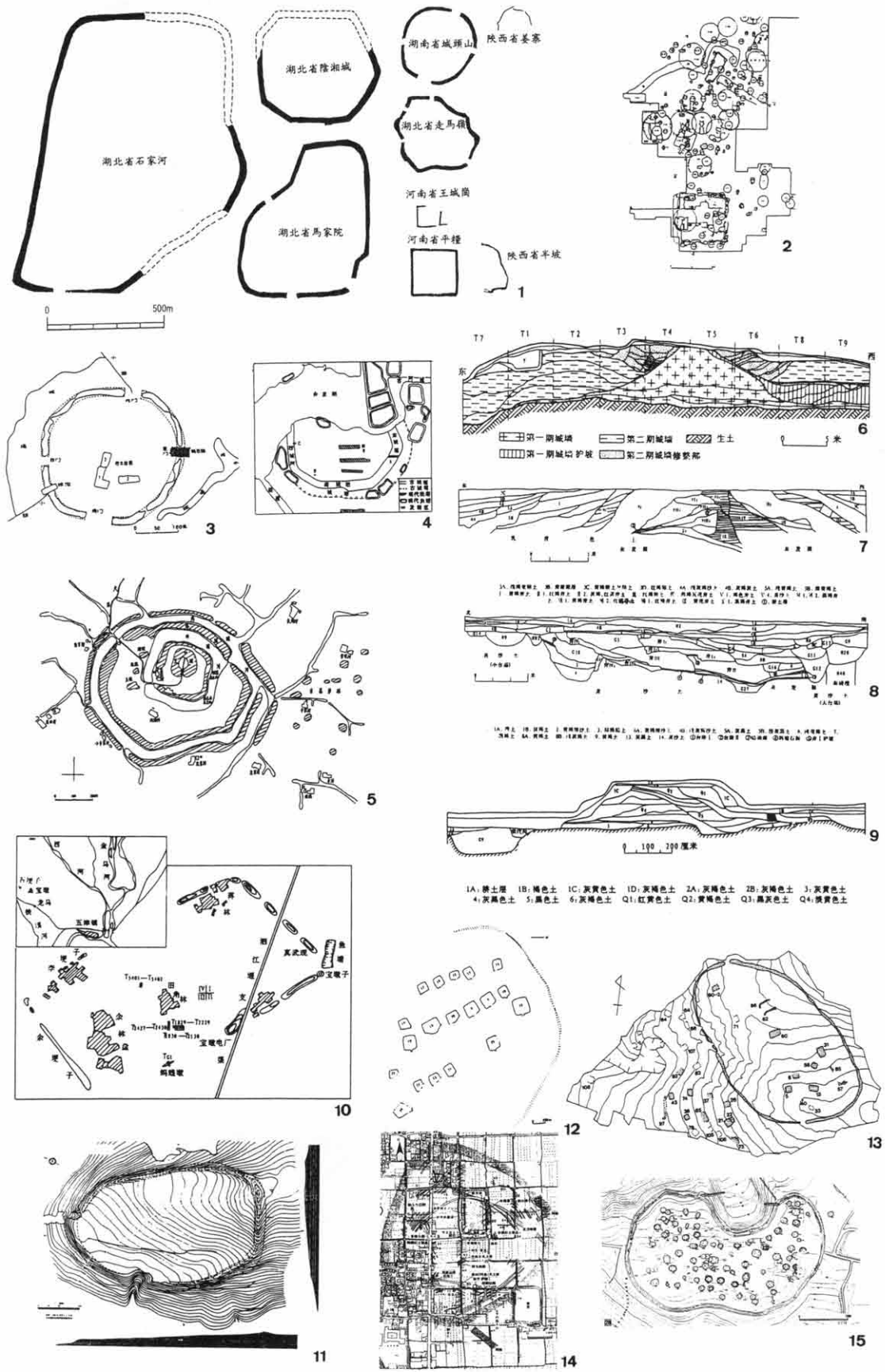
アジアでは、長江下流域に位置する湖北省陰湘城遺跡・馬家院遺跡、湖南省城頭山遺跡などが囲郭施設を持つ集落として知られ、複数回の土塁の修築・拡張が認められている^(注33)。また、江蘇省淹城遺跡は、商代に築かれ西周代に廃絶する、周囲に水濠をめぐらせた囲郭施設であるが、全体の輪郭が楕円形であるのに対して、中城・内城などの中枢部は方形に区画されている^(注34)。円形区画と方形区画のイデオロギー的な差異が現れているようで、日本列島の前方後円墳の「外円内方」区画原理と考え併せ、示唆的な意味を持つようだ^(注35)。この一方で、内蒙古、および遼寧省・黒龍江省の新石器時代にも濠によって囲郭された集落が存在する。黒龍江省白音長干遺跡では、楕円形囲郭施設の内部に、多角形住居を含む列状に配列された住居跡が検出された。また、朝鮮半島でも新石器時代には慶尚南道検丹里遺跡・城山貝塚などで環濠集落が検出され、日本列島との関連がうかがえる。日本列島でも福岡県板付遺跡、奈良県唐古・鍵遺跡、大阪府池上・曾根遺跡が知られている。また、佐賀県吉野ヶ里遺跡も環濠集落の景観復元の上で、しばしば典型例とされることは改めて述べるまでもない。

アメリカ大陸ではケンタッキー州のジョナサン・クリーク遺跡で、馬面状の突出部を持つ大型の防護柵と小型防護柵などの複数の囲郭施設によって防御された集落が調査されたが、建物の大半は焼亡していた^(注37)。この集落は2種の建物構造が列状に配置されていて、規模の大小が認められる。特に大型建物の集中部分は複数の柵で囲郭され、集落の中枢部分と判断される。また、アメリカのアナサジ文化のモンテズマ＝キャッスル遺跡では、崖の中腹を土壁で塞いで築かれた城塞がみられ、社会的抗争を伴う緊張状態があったことをうかがわせる^(注38)。

これらの防御集落と同様に、戦争犠牲者の存在が挙げられる。佐賀県吉野ヶ里遺跡では、甕棺に首の無い人骨が屈肢葬されていた。一方、福岡県新町遺跡では、木棺墓の底部の腰坑状の小土坑から若年男性の首



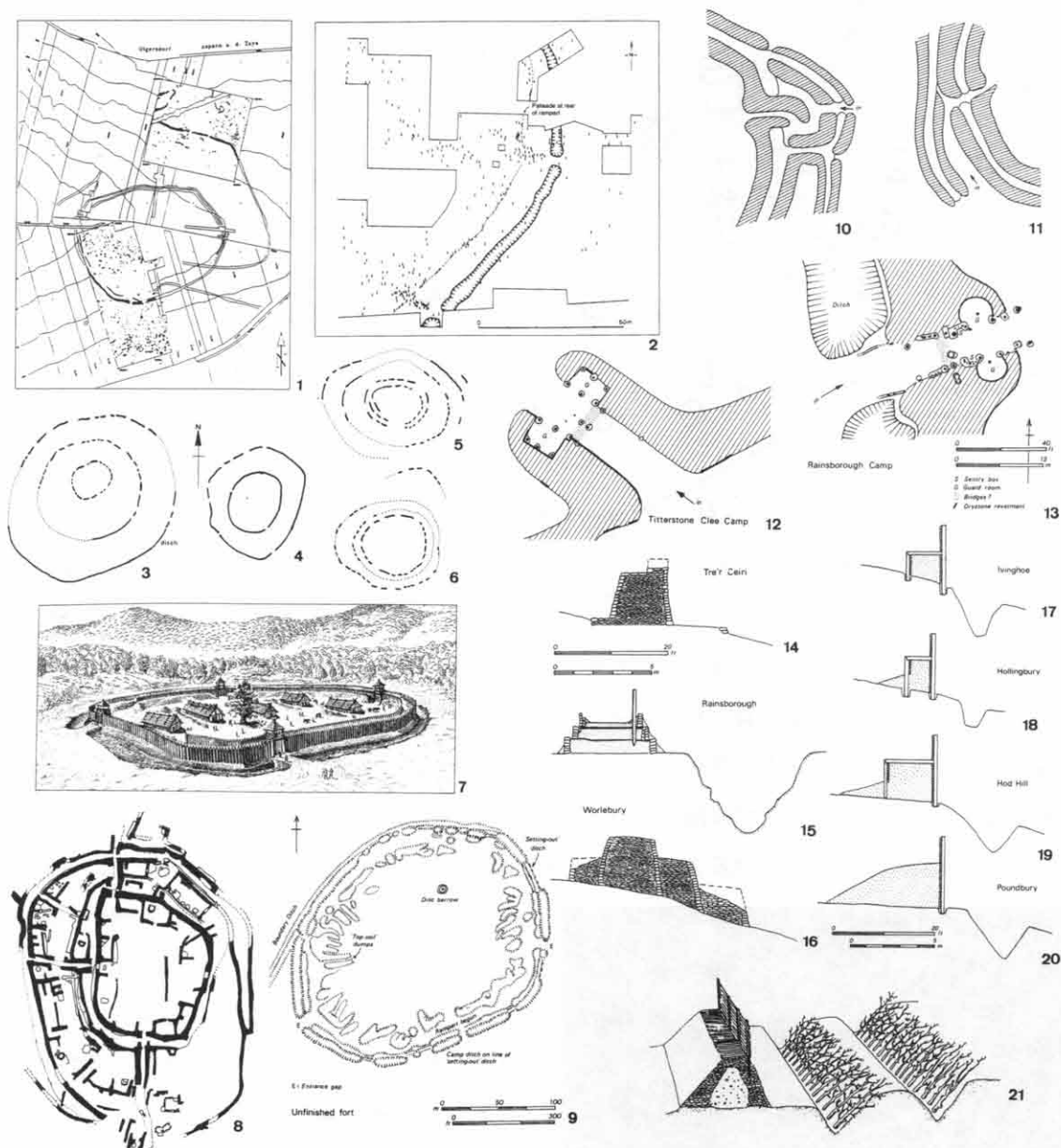
第7図 濠と堤
イギリス・アプベリー遺跡の環濠(右側が内部)
(注28より)



第8図 東アジアにおける防御の施設

挿図内容(第8図)

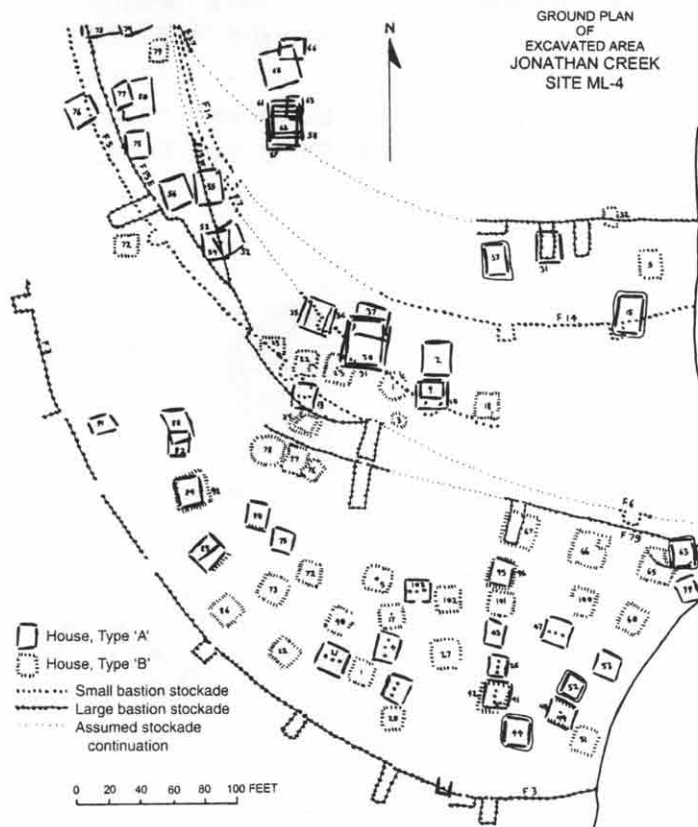
1. 中国新石器時代の環壕集落 2. 陝西省・姜寨遺跡(中国) 3. 湖南省・城頭山遺跡(中国)
 4・6. 湖北省・陰湘城遺跡(中国) 5. 江蘇省・淹城遺跡(中国) 7・8. 山東省・景陽崗城遺跡(中国)
 9・10. 四川省・宝墩遺跡(中国) 11. 内モンゴ・南梁石城遺跡(中国) 12. 内モンゴ・白音長汗遺跡(中国)
 13. 慶尚南道・検丹里遺跡(韓国) 14. 奈良県・唐古・鍵遺跡(日本) 15. 神奈川県・大塚遺跡(日本)
 (出典：国立歴史民俗博物館編『倭国乱る』 1996、釜山大学校博物館『蔚山検丹里集落遺跡』 1995・注33より)



第9図 ヨーロッパにおける防御の施設

挿図内容(第9図)

1. 二重環壕を持つシュルツ遺跡(オーストリア) 2. クリックリーヒル遺跡(イギリス)
 3~6. イギリス新石器時代の間欠周溝遺構 7. 柵で防御された環壕集落
 8. 石壁で囲まれたディミニ遺跡(ギリシャ) 9. マウント・プレザント遺跡(イギリス)
 10・11. 集落出入口部の複雑化 12・13. 集落出入口の槽状施設 14~20. 土塁の修築・複雑化
 21. ローマ時代の逆茂木
 (出典：出典：国立歴史民俗博物館編『倭国乱る』 1996、および注2・3・19・28書より)



第10図 守りの施設(アメリカ)
 アメリカ・ジョナサン・クリーク遺跡(注37より)

ーヴォ文化のヴェルホレンスク墓地で、埋葬人骨に矢が刺さっているのが観察された^(注42)。単独の戦争犠牲者のみならず、大量虐殺されたと見られる遺跡もある。中国の河南省安陽殷墟に営まれた王陵区では、首をはねられた人骨や首だけを埋納した祭祀坑が検出されているが、犠牲・殉葬の一種と考えられるので、ここでは触れない。アメリカのサウス・ダコタ州のクロー・クリーク遺跡では、紀元1325年に戦争で虐殺されたと見られる多量の人骨の集積が検出された^(注43)。また、戦死者をまとめて埋葬したとみられる例が中国山西省長平遺跡で見つかっており、記録の伝える長平の戦いで犠牲となった趙兵であったと考えられている^(注44)。日本でも、近年、鳥取県青谷上寺地遺跡で多量虐殺にあったと人骨集積が検出されたが、いまだ詳細が判明していない。この遺跡は遺物の残りが非常に良好なので、集積した人骨の意味の究明が待たれる所であるが、改めて再論することにした。



第11図 英雄か？戦争犠牲者か？
 京都府・東土川遺跡の木棺墓
 (腹部に当たる位置に石剣と石鏃を検出)

だけが埋葬されていた。前者は戦争によって首級を取られた人物、後者は首級を副葬された人物と見られる。京都市東土川遺跡でも中期後半の木棺墓から、腹部に石剣・石鏃をうけて犠牲となった人物の墓を検出し、本『情報』誌上でも紹介されたことがある^(注39)。これらの、いわゆる「戦士の墓」は、前期末から中期後半にかけてピークがあり、西日本、とりわけ北部九州を中心に集中している。一方、西アジアではエジプトのジャベル・サハラ遺跡で、屈葬された人骨の腹部に多くの鏃を受けた例が知られており、イギリス、エイボンのトルマートン墓では胸部に銅鏃を受けた事例がある^(注41)。小畑弘己によれば、東シベリアのグラスコー

ーヴォ文化のヴェルホレンスク墓地で、埋葬人骨に矢が刺さっているのが観察された^(注42)。単独の戦争犠牲者のみならず、大量虐殺されたと見られる遺跡もある。中国の河南省安陽殷墟に営まれた王陵区では、首をはねられた人骨や首だけを埋納した祭祀坑が検出されているが、犠牲・殉葬の一種と考えられるので、ここでは触れない。アメリカのサウス・ダコタ州のクロー・クリーク遺跡では、紀元1325年に戦争で虐殺されたと見られる多量の人骨の集積が検出された^(注43)。また、戦死者をまとめて埋葬したとみられる例が中国山西省長平遺跡で見つかっており、記録の伝える長平の戦いで犠牲となった趙兵であったと考えられている^(注44)。日本でも、近年、鳥取県青谷上寺地遺跡で多量虐殺にあったと人骨集積が検出されたが、いまだ詳細が判明していない。この遺跡は遺物の残りが非常に良好なので、集積した人骨の意味の究明が待たれる所であるが、改めて再論することにした。

6. 伝えられた戦争

戦争とは、語られ、歴史として創られるものである。支配者が、自らを王として権威付けるために、戦争を手段として利用した考古学的証拠は数多くある。社会的な抗争・闘争が歴史的所産である戦争となるためには、戦争が繰り返し語り継がれるための仕掛けが必要だ。それが、戦争の物質的表象すなわち考古資料としての「描かれた戦争」である。

漢の武帝の西南夷遠征で討伐された遊牧騎馬民族の滇は、雲南省の滇池の南方、晋寧石寨山古墓群・江川李家山古墓群に王墓群を築いたが、石寨山古墓群出土の貯貝器には戦争場面の半肉彫小像が作り付けられている。貯貝器は写実的な滇の生活場面をうかがう上で重要な資料だが、王墓に副葬された威信財であることを考え併せると、社会の物語(事件史・起源説話・世界観など)を語り伝えるものであった可能性がある。貯貝器上の戦争が実体か架空かは、改めて議論せねばならないが、戦争がモチーフの一つに選ばれていることには、戦争の社会的な役割を示唆しているようで興味深い。

時間・空間を共有する社会の物語としての戦争を、儀式装置としての機能を一層高める役割を担ったのが軍隊であった。イアン・ショーは、エジプト新王国の軍隊を検討し、以下のような構成を明らかにした。軍隊の総責任者は王であるが、通常は王の息子が総司令官を務め、書記と武官とが機能分化し、外人部隊をも加えつつ、約5,000人の軍が編成される。ここで書記が同行するのは、軍隊の事績を書き留めて、社会的個人としての王のための事件史を、再構成するためである。第19王朝のファラオであるラムセスⅡ世がヒッタイト王とカデシュで戦ったように、新王国の軍隊は国際戦争のための軍編成がなされていたと見なすべきであろう。これと対照的なのが、日本列島の律令制下の軍編成である。下向井龍彦によるとここでは、將軍—軍監—軍団という序列が認められるものの、軍監までは中央派遣将校団であり、軍団以下は諸国動因兵力であった。軍の規模も1000人程度と、エジプトの軍隊との隔たりは大きい。

王墓にはしばしば、軍隊をうつした仮器が副葬される。秦始皇帝陵に付設された兵馬俑坑は有名だ。エジプト中王国時代のメセフィティ墓では、盾を持った軍隊の木俑群が検出された。メソポタミアでは、ラガシュ出土の有名な禿鷹の碑に軍隊のレリーフが描かれている。戦争が王の事績として語られ、軍隊が王墓に副葬されることは、軍隊が、戦争を心的表象とする社会の、再生産のための実際表象として、機能したことを示唆している。

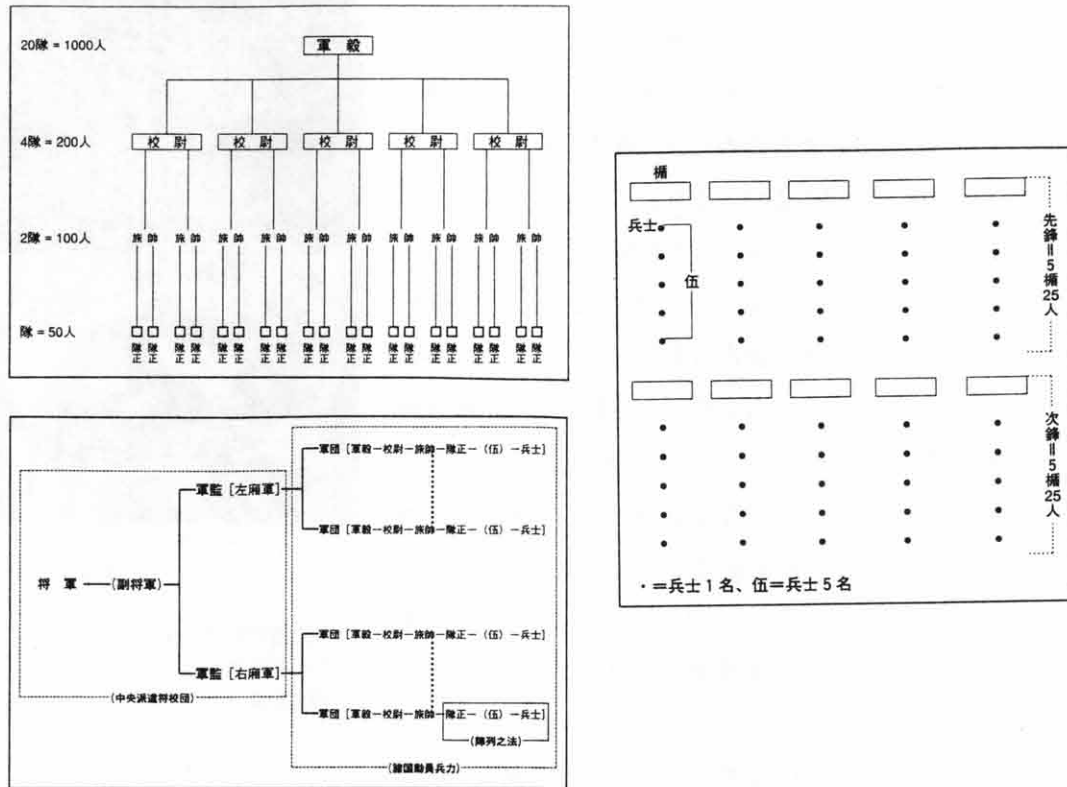
戦争とは攻防する双方のみで成立するものではない。社会的な抗争・闘争が戦争に転化するためには、歴史的現在の発見、すなわち歴史の語りがある前提として成立しなければならない。戦争は、社会のために再構成される歴史によって、「意図的に」創り出されるものである。戦争の



第12図 戦争犠牲者たち

1. クロー・クリーク遺跡の大虐殺
(アメリカ・サウスダコタ州)
2. 脊髄に刺さる銅鏃
(イギリス・トルマートン墓)
(注28より)

日本・律令制下の軍隊



エジプト新王国時代の軍隊

軍隊の種類：歩兵隊
 戦車隊
 駐留地／植民地隊
 精鋭隊
 操船隊
 外人隊

軍隊の規模：軍＝約5,000人
 主隊＝500人以上(少なくとも2つの部隊を含む)
 部隊＝250人(5小隊)
 小隊＝50人(5分隊)
 分隊＝10人

王

総司令官(通常王の息子が務める)

北軍の執行代理官

南軍の執行代理官

将軍

歩兵隊の書記官

主隊長

軍旗旗手

副官／執行代理官

書記官

軍務官

執行代理書記官

小隊長

集合書記官

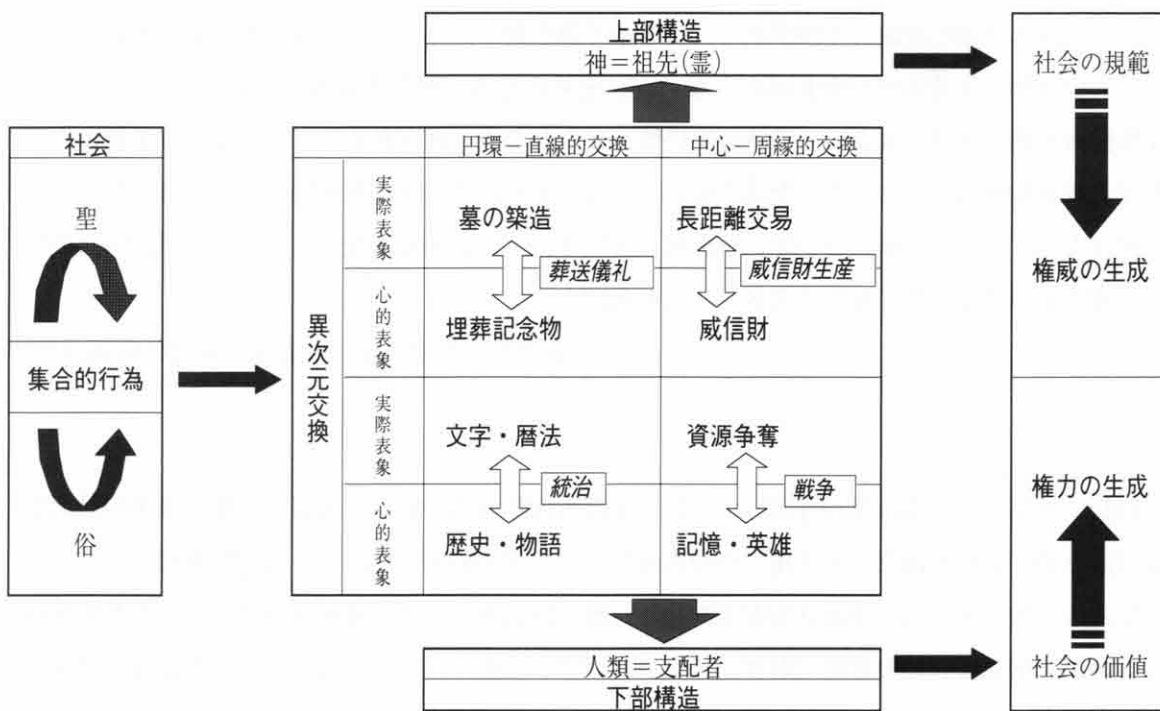
駐屯軍隊長

軍隊書記

分隊長

歩兵

第13図 軍隊の編成(律令制下の日本と新王国時代のエジプト)



第14図 戦争と王権

誕生を探ることは、人間の攻撃性を理由に、考古資料に認められる暴力的行為を遡及させてゆくことではない。人間の争いは、歴史によって戦争になったのである。以上の、議論をまとめて、結論として言うならば、戦争の誕生とは、歴史的現在の説明原理に他ならないということなのである。

7. 戦争の考古学から平和の考古学へ

戦争の考古学の目的は、以上に議論してきたように、戦争を物質的資料によって明らかにし、人間の平和への展望に考古学者も主体的に関わっていくことである。繰り返して強調してきたように、発展段階論的な歴史認識を持ち込むことは、闘争こそが歴史を前進させるという近代的な歴史観を直接投影したに過ぎなかったのである。人類にとって戦いとはいかなる意味を持つのか。その意味の創出に向かって、戦争の考古学が、将来的に深化されねばならない重要な領域の一つとなっていくことを期待したい。

人間にとっての戦いには2つの画期が認められる。すなわち、第1の画期とは農耕社会という食料生産経済の導入期であり、第2の画期とはいわゆる国家形成期である。宇野隆夫は、この2大画期を佐原 眞・福井勝義をはじめとする各研究成果をひきつつ、資源の高付加価値化の契機と捉えている^(註48)。闘争・抗争が、社会構成体の複雑性を昂進させる、すなわち「進化」させる意味を持つことは否定できない。しかし、考古学的な研究対象としてとりあげる「戦争」に、価値の昂進過程を見るかについては、私は慎重でいたいと思う。なぜなら、戦争は歴史が創り出したも

のに他ならないのだから。

2つの世界大戦を経験した20世紀も、ようやく幕を閉じようとしている。恒久的な平和のために、人間は努力を積んでいかねばならないが、それが他者を排除するものであってはならない。攻撃性は人間の本性ではない。戦争の虚偽性、すなわち語り継がれることで歴史が意図的に作り上げた戦争を研究することで、今後も考古学者は平和のための手段を提供していかねばならないと私は考える。この意味において、新世紀に射程を据えた、世界市民としての考古学、人間のための考古学の使命は果てしなく大きいと言わねばならない。

(かわの・かずたか=調査第1課資料係調査員)

付記 本稿は、平成12年10月22日(日)に、園部町国際交流会館で「武器と人間—戦争の社会的な起源をめぐる比較研究—」と題した発表をもとに、若干の字句の訂正、文章の補訂を行ったものである。発表当日は、園部町教育委員会辻 健二郎氏をはじめ、園部町役場・園部町教育委員会・園部町文化博物館の皆様にお世話になったほか、参加いただいた方々にも、有益なご意見をいただいた。記して感謝したい。

- 注1 設楽博巳「東日本の戦いの始まり」(国立歴史民俗博物館編『倭国乱る』 朝日新聞社) 1996
- 注2 国立歴史民俗博物館監修『人類にとって戦いとは』全3巻 国立歴史民俗博物館 1999
- 注3 J. Carman and A. Harding ed. *Ancient Warfare*, Sutton Publishing, 1999
- 注4 高畑由起夫「競争・争い・暴力の進化—ヒト以外の霊長類の場合—」(『人類にとって戦いとは』戦いの進化と国家の形成 国立歴史民俗博物館) 1999
- 注5 馬場悠男「ヒトの攻撃性と食人」(『人類にとって戦いとは』戦いの進化と国家の形成 国立歴史民俗博物館) 1999
- 注6 黄 展岳(宇津木章監訳・佐藤三千夫訳『中国古代の殉葬習俗』人間犠牲(人牲・人殉)の研究 第一書房) 2000
- 注7 春成秀爾「哀悼抜歯」(『国立歴史民俗博物館研究紀要』第83集 国立歴史民俗博物館) 2000
- 注8 G. A. Reisner, *The Development of Egyptian Tombs Down to Accession of Cheops*, Cambridge Harvard University Press,
- 注9 ウーリー, L・モーレー P, R, S (森岡妙子訳)『カルデア人のウル』 みすず書房 1986
- 注10 末次信行「殷墟西北岡王陵区の一七四号小墓をめぐって」(『郵政考古紀要』27 郵政考古学会) 1999
- 注11 都出比呂志『王陵の考古学』 岩波書店 2000
- 注12 嶋田義仁『異次元交換の政治人類学 人類学的思考とはなにか』 頸草書房 1993
- 注13 本節の内容については、別稿を準備しているので、詳細はそちらを参照されたい。
河野一隆「王への供犠・王の義務」(『北近畿の考古学』 両丹考古学研究会) 2001
- 注14 J. Chapman, *The Origins of Warfare in the Prehistory of Central and Eastern Europe*,

J.Carman and A.Harding ed. *Warfare*, Sutton Publishing, 1999

- 注15 佐原 眞「かつて戦争があったー石鐮の変質ー」（『古代学研究』第78集 古代学研究会）1975
- 注16 岡村秀典「中国新石器時代の戦争」（『古文化談叢』第30巻(下) 九州古文化研究会）1993
- 注17 春成秀爾「武器から祭器へ」（『人類にとって戦いとは』戦いの進化と国家の形成 国立歴史民俗博物館）1999
- 注18 広瀬和雄「クラから神殿へー古代カミ観念に関する一試論ー」（浅川滋雄編『先史日本の住居とその周辺』 同成社）1998
- 注19 佐原 眞「日本・世界の戦争の起源」（『人類にとって戦いとは』戦いの進化と国家の形成 国立歴史民俗博物館）1999
- 注20 千田嘉博「弥生の戦いと中世の戦い」（国立歴史民俗博物館編『倭国乱る』 朝日新聞社）1996
- 注21 藤尾慎一郎「弥生時代の戦いに関する諸問題」（『人類にとって戦いとは』戦いのシステムと対外戦略 国立歴史民俗博物館）1999
- 注22 Sir Arthur Evans, *The Palace of Minos at Knossos*, 1921 (1964 reprinted)
- 注23 A.Harding, *Warfare : A Defining Characteristic of Bronze Age Europe*, J.Carman and A.Harding ed. *Ancient Warfare*, 1999
- 注24 注23に同じ、p165.
- 注25 注16参照。
- 注26 河野一隆「表象の考古学としての神聖王権」（『表象としての鉄器副葬』 鉄器文化研究会）2000
- 注27 V.G.Childe, *War in Prehistoric Societies*, *The Sociological Review*, vol.33, 1941
- 注28 Timothy Darvill, *Prehistoric Britain*, Routledge, 1987
- 注29 J.Thomas, *Time Culture Identity -An Interpretive Archaeology-*, Routledge, 1996
- なお、本書については、下垣仁志氏(京都大学大学院)よりご教示いただき、全訳をご恵与いただいた。記して謝意を表したい。
- 注30 藤尾慎一郎「ブリテン新石器時代における死の考古学」（『国立歴史民俗博物館紀要』第68集 国立歴史民俗博物館）1996
- 注31 R.J.Mercer, *The Origins of Warfare in the British Isles*, J.Carman and A.Harding ed. *Warfare*, Sutton Publishing, 1999
- 注32 注19文献、62～63頁。
- 注33 徐 光輝「從聚落形態看中国古代文明及国家的起源過程一兼及朝鮮半島和日本列島一」（『国際文化研究』 龍谷大学）1999
- 注34 原口正三「中国淹城遺跡について」（『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1987
- 注35 広瀬和雄「弥生時代の首長」（『弥生の環濠都市と巨大神殿』）1996
- 注36 寺澤 薫「環濠集落の系譜」（『古代学研究』第146号 古代学研究会）1999
- 注37 Jonathan Hass, *The Origins of War and Ethnic Violence*, J.Carman and A.Harding ed. *Warfare*, Sutton Publishing, 1999
- 注38 都出比呂志「アメリカの戦いの始まり」（国立歴史民俗博物館編『倭国乱る』 朝日新聞社）1996
- 注39 中川和哉「桂川右岸における石剣の出土例」（『京都府埋蔵文化財情報』第68号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1998
- 注40 藤井純夫「西アジアの戦いの始まり」（国立歴史民俗博物館編『倭国乱る』 朝日新聞社）1996

- 注41 注28文献、p129。
- 注42 小畑弘己「東シベリア新石器時代の埋葬習俗に関する基礎研究」(『先史学・考古学研究』熊本大学文学部考古学研究室創設20周年記念論文集 龍田考古学界) 1994
- 注43 注37文献、p24。
- 注44 山西省考古研究所・晋城市文化局・高平市博物館「長平之戦遺址永祿一号屍骨坑発掘簡報」(『文物』1996-6 文物出版社) 1996
- 注45 岡村秀典「漢帝国の世界戦略と武器輸出」(『人類にとって戦いとは』戦いの進化と国家の形成 国立歴史民俗博物館) 1999
- 注46 Ian Shaw, *Egyptian Warfare and Weapons*, Shire Egiptology, 1991
- 注47 下向井龍彦「律令軍制と国衙軍制」(『人類にとって戦いとは』戦いのシステムと対外戦略 国立歴史民俗博物館) 1999
- 注48 宇野隆夫「書評 人類史への学際的発信」(『歴博』No. 102 国立歴史民俗博物館) 2000

ABSTRACT

The Birth of Warfare

KAWANO Kazutaka

When and why human began to fight each other? We have continued to study the traces of violence and struggle archaeologically for long time.

From the viewpoint which history is a '*narratology*' for humankind and historian is also product of history, it can be called that the struggle view of which warfare is inevitable for humankind is characteristically based on the historical recognition in this century. This century, we experienced many miserable slaughters, and as a background of historical materialism which class struggles are believed to be the driving force of growth of human society. Human being is always fighting each other in the core of historical recognition, and on the extended line on which, the historical warfare which is projected on this century were repeated. Sure enough, is warfare humankind's instinct? Can it be documented by archaeology?

It cannot be denied that on the evidence that some artificial destruction is observed on human bones, most archaeologists have been captured by the myth of the "*cannibals*(man-eaters)" long time. But now, anything of archaeological evidences regarded as cannibalism are altogether negative and so, it is believed that cannibalism have not been existed in the history of humankind. It goes without saying that humankind is fighting or collaborative each other at anytime.

Similarly, it is not appropriate to regard the sacrifices of men and women, which is the characteristic in the formation period of the royal tomb, as the evidence of humankind's instinct of attacking others. These human sacrifices are the gift to the divine king who must play a role to reproduce the society by authorizing the political power.

How a tools change into deadly weapons? It is supposed that when arrowhead becomes heavier, the function of arrowhead is changed from hunting into deadly weapon. But a weapon is also used as ritualistic implement. The process of changing from a tool for ordinary use to a deadly weapon and finally to a ritualistic implement is closely related to the transition of the structure of society. Along with that, the process which struggle between individuals turns into struggle between communities, as a result into struggle between states are based on the historical materialism of human evolution. Whether this is true or not must be examined by the archaeological evidences of protection from others, separately from the evidences of attacking others.

The ditch and bank for protecting the settlement from enemies are not only in Japan

but also in Europe, China and the United States. The entrance of the settlement is the easiest part to be attacked, so it becomes complicated gradually, the bank of the settlement is rebuild and stronger, then the settlement become strongly to be guarded more and more. If archaeologists presume that these fortified settlements are predecessors of cities with protect-wall in 'urban revolution', can they discover the evidence of the birth of warfare? I don't think so.

Warfare in history is created as explanation for *historical present* and it is handed down historically. There is many archaeological evidences that the ruler made himself the omnipotent existence (Almighty God) and warfare in history was used for authorizing himself in the king list legitimately. Moreover, the systematic army prepared for a king was located as a appropriate stage to recognize the political power and authority of a king for social members. Because the dual body of a king was used as the resource to rebirth the society in sacred kingdom. So to speak, the ruler deliberately used the historical warfare as means to solve the struggle between *actual representation* and *mental representation* for reproducing the power of the king. The same explanation is applicable to the funeral rite of the king for reproducing the authority.

What is the important factor to separate the social struggles from historical warfare? Warfare is "intentionally" created with hero or heroin in the age of epos and an action to talk about historical warfare is nothing less than to reaffirm the present as it is. That is to say, warfare is created for explanating the *historical present*. Then, revealing the artificiality of the warfare from archaeological record may regard it as the main purpose of '*archaeology of warfare*'.

By '*archaeology of warfare*', archaeologists must be tackle actively with the problem of war and peace. In history of humankind, there are two epoch-makings of struggle. That is to say, the first is the introduction of productive economy i.e. agriculture, and the second is the state formation period. However these two epoch-makings are supposed as evolution of value in society, I wish to be careful about whether warfare evolves the human society or not.

20th century which we have experienced two World War is closing. It is needless to say that we have to make an effort for peace, but we must not eliminate the others for this purpose. Warfare is not caused by instinct of human being. To achieve permanent peace in cosmopolitan ideal, the aim of the archaeology for humankind is endless and become more and more important toward next century.

平成12年度発掘調査略報

7. シリガイ・東禅寺古墳群、エノク経塚群

所在地 京都府宮津市須津字シリガイ・東禅寺ほか

調査期間 平成12年6月1日～9月19日

調査面積 868m²

はじめに 鳥取豊岡宮津自動車道建設予定地内を京都府教育委員会と宮津市教育委員会が分布調査を実施し、宮津市須津地内に古墳状隆起が分布していることが判明した。その字名より、シリガイ古墳群(9基)と東禅寺古墳群(3基)と命名された。今回、京都府道路公社の委託を受けて、これらの埋葬主体の有無とその性格の確認を目的として、試掘調査を実施した。その後、シリガイ9号墳地点で確認された経塚群の発掘調査を行った。

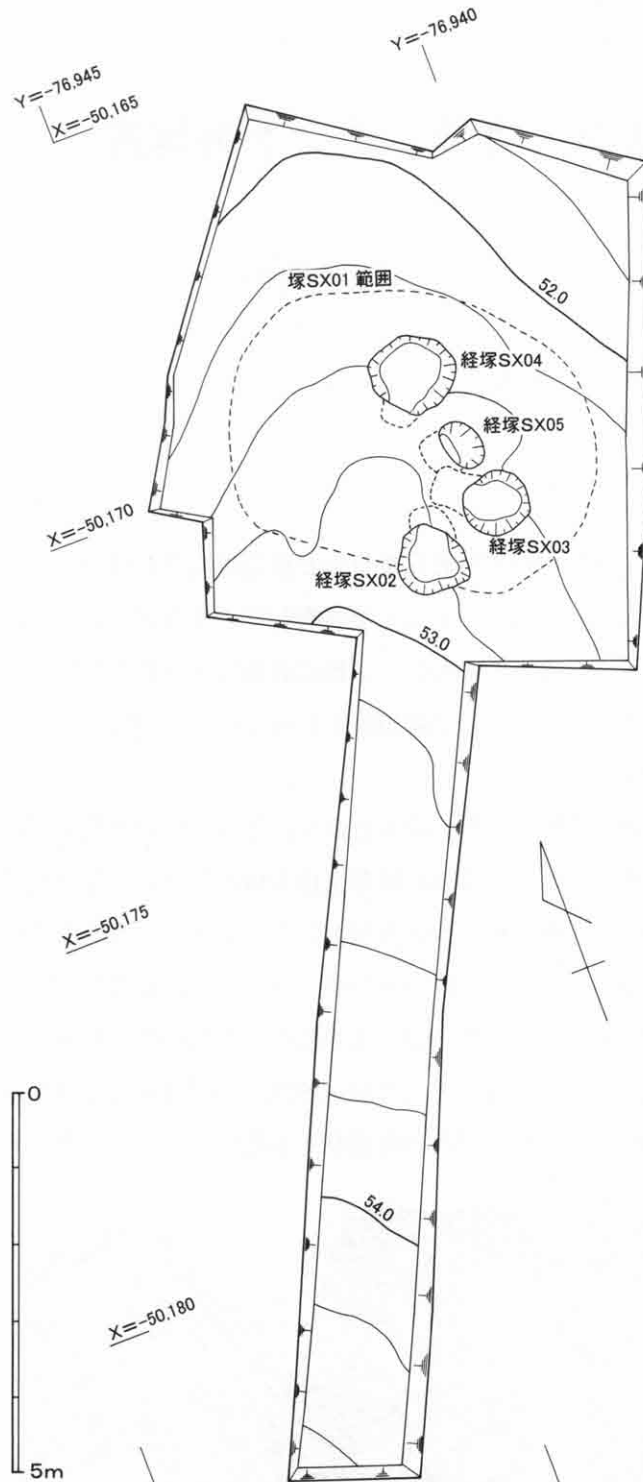
調査概要 東禅寺古墳群は、尾根筋に3基の古墳状隆起が並ぶもので、それぞれの墳頂平坦部に試掘トレンチを入れたところ、1・3号墳でそれぞれ1基の埋葬主体を検出した。1号墳の墳頂部からは、古墳時代前期頃のものと思われる土師器高杯が2点出土した。シリガイ古墳群では9基の古墳状隆起を調査したが、古墳の埋葬主体は全く検出できなかった。ただ、数基の古墳状隆起からは古墳時代の須恵器片が出土しており、後世の開墾等により削平された可能性も考えられる。また、シリガイ9号墳地点では、人頭大の石を埋め込んだ塚を確認し、経塚もしくは古墓と判明した。調査の結果、この塚の下層から12～13世紀代の経塚が4基見つかった。この場所は、「エノク(家の奥)」と呼ばれており、新たに見つかった経塚群をエノク経塚群と命名した。

エノク経塚群 塚SX01は、幅約3.5m・長さ約5m・高さ約35cmに盛り上げられたもので、北東側の斜面のみ、人頭大の石が棚状に組まれていた。この石礫の間からは土師製筒形土器・同蓋が小片になって出土し、塚の表面および西裾部の流出土中から2枚の貨銭(熙寧元寶;1068、元豊通寶;1078初鑄)が出土した。



第1図 調査地位位置図(1/25,000)

1.シリガイ古墳群 2.東禅寺古墳群 3.エノク経塚群



第2図 エノク経塚群検出遺構配置図

経塚 S X 02～04は、一辺90～110cm・深さ30～50cmの方形～円形の竪穴を掘り、その壁面に横穴を穿って、内部に外容器を納めていた。これらの横穴の開口部は、拳大から人頭大の石10個前後を組み合わせで塞いでいた。経塚 S X 02は横穴内に平石を据え、その上に須恵器甕を倒立させていた。平石の下からは、和鏡が1面出土した。経塚 S X 03は外容器として越前焼三耳壺が用いられていた。壺は正立で置かれており、土師器皿が蓋として利用されていた。この越前焼は13世紀代のものと判断される。経塚 S X 04は、横穴内に平石を据え、須恵器甕が倒立して据えられていた。この甕の側面2方向には平石が立て置かれていた。これらの外容器の内部からは、遺物は全く出土しなかった。経塚 S X 05は、斜め下方に坑を穿つだけで、その内部に須恵器甕を斜め横位に納めていた。経塚 S X 04と経塚 S X 03の狭い間隙に設けようとして、竪穴を省略したものと思われる。須恵器甕は、12～13世紀代のものと判断される。

まとめ エノク経塚群は、4基の経塚が規則的に配置されていること、経塚の横穴はいずれも尾根先端の高まりに向けて近接して穿たれていること、最終的には4基の経塚群

が塚 S X 01にその範囲を完全に覆われていることから、それ以前に作った経塚群の位置・方向等の細部にわたる記憶が、失せてしまうほどの長期間にわたって、経塚を作り増していったとは考えにくい。そのため、これら4基の経塚は同時もしくは比較的短い時間幅の中で作られ、そして、経塚の埋納が終了した時点で塚 S X 01が盛り上げられたものと推測される。塚 S X 01は、下位の経塚4基を、覆うように作られているため、地中に構築した経塚を示す標識としたと判断される。

(岩松 保)

8. ^{しよくぶつえんきた}植物園北遺跡

所在地 京都市左京区下鴨半木町1
 調査期間 平成12年7月18日～9月28日
 調査面積 約500m²

はじめに 京都府立大学構内は、前年度に実施した試掘調査の結果、弥生時代～古墳時代・平安時代の遺物・遺構が確認され、古代に集落が営まれた場所であることがわかった。今回、構内で京都府立大学1号館改築工事が計画されたことから、工事に先立って発掘調査を実施した。

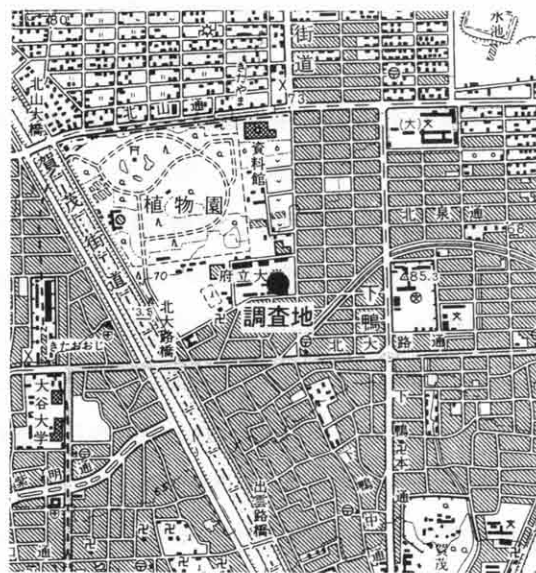
調査の概要 平成11年度に行われた試掘調査の成果に基づき、工事予定地区内に二つの調査地区(A・B地区)を設けて実施した。

A地区 調査地区内は旧校舎の基礎工事等によって大きく壊れていて、包含層と遺構面が遺存する場所はごくわずかであった。遺存していた包含層・遺構面を精査して、ピットを多数検出した。ピットは掘立柱建物跡の柱穴と推定され、埋土の状態から、平安時代から鎌倉時代に属するものと考えられる。出土遺物は、平安時代の杯身・杯蓋・甕・壺などの須恵器類・緑釉の皿・土師器類などの日常生活用具類が主にみられる。縄文時代晩期に遡る可能性のある土器破片、奈良時代に遡る可能性のある布目瓦片など、平安時代以前の遺物も含まれていた。

B地区 B地区では、A地区で検出された包含層の南側への広がりを確かめた。包含層の一部とピット、土坑等の遺構を検出した。遺構の形成時期は、平安時代～鎌倉時代頃の遺物包含層から切り込んでいるものがあり、A地区と同じような年代を推定している。調査地の南側で良好な遺物包含層が確認されており、調査地の南側にさらに延びることが予想される。

まとめ 今回の調査で明らかになった事柄は以下の通りである。調査地点は、包含層に含まれる遺物の年代から、縄文時代晩期頃に人々の生活が始まり、弥生時代～中世にかけて断続的に土地利用が行われていたことが判明した。平安時代から鎌倉時代にかけては複数の掘立柱建物跡が建てられており、宅地として利用されていたことがわかった。大学構内には、A地区を起点として遺構、包含層が広範囲に展開すると予想される。

(田代 弘)



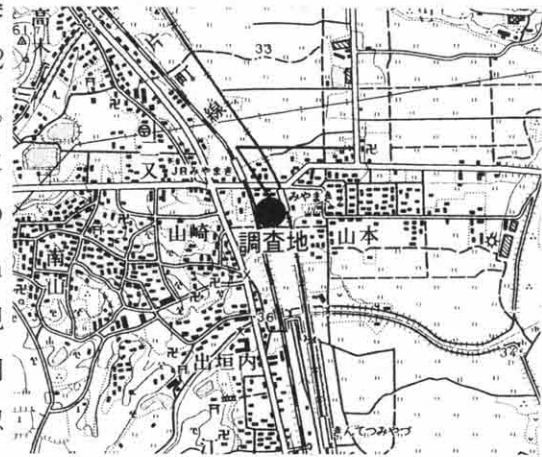
第1図 調査地位置図(1/25,000)

9. 三山木遺跡

所在地 京都府京田辺市三山木山崎・高飛
 調査期間 平成12年5月15日～9月28日
 調査面積 約1,400m²

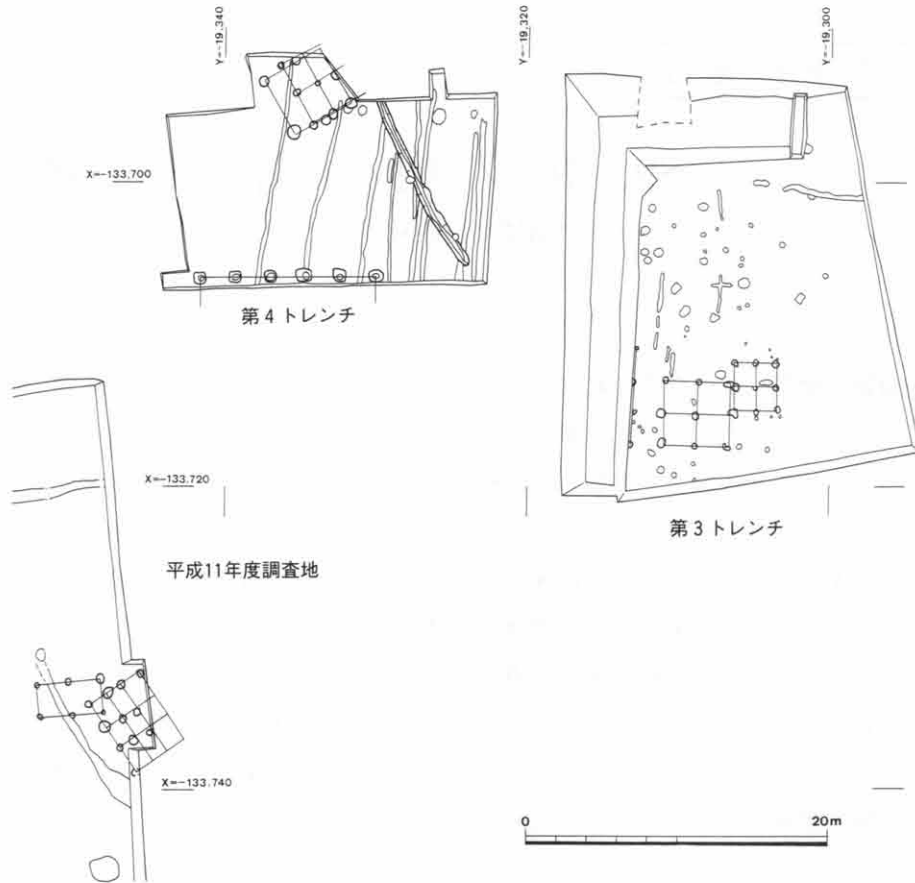
はじめに この調査は、綴喜都市計画事業三山木地区区画整理事業に伴い京田辺市の依頼を受けて実施した。対象地には、三山木遺跡と二又遺跡が存在する。三山木山崎から東方に延びる低丘陵先端の微高地部に、弥生時代から鎌倉時代にかけての集落遺跡とする三山木遺跡が広がる。その北方約200mの府道生駒・井手線北側には、奈良時代から鎌倉時代にかけての複合遺跡とする二又遺跡が広がる。両遺跡とも一部発掘調査が実施され、その概要が徐々に明らかに成りつつある。三山木遺跡については、低丘陵周辺部より弥生時代前期から中期にかけての土器・石器などが多量に出土し、当時の南山城地域を考える上で貴重な資料を得ることができた。二又遺跡については、奈良から平安時代にかけての掘立柱建物跡・柵列・土塁状遺構・溝・井戸などを検出し、当地が山陽道の山本駅に想定される地域であるだけに関心が寄せられる。

調査概要 4か所の調査地を設定した。その内1か所は、山崎から延びる丘陵尾根筋上に当たる。尾根筋北側と南側の低地部を調査した際に弥生土器が多量に出土していることから、当時の住居跡などが存在すると想定された。しかし、後世に大きく削平されており、顕著な遺構の検出には至らなかった。残り3か所は、近鉄三山木駅近辺に設定した。調査の結果、平安時代の掘立柱建物跡の一面と鎌倉時代の水田面を検出した。水田面については、大きく3面検出した。時期は2時期に分かれる。下層の水田面は、北東方向から南西方向に向かって下がる階段地形が形成されていた。この水田に伴う畦畔や溝は残っておらず、出土遺物も無く時期については不明である。中層の水田面に伴う遺構は、N69°Wの溝2条を検出した。溝の規模は、幅約1m・深さ約0.2m・検出長約16mを測り、溝間約4.5mで平行する。出土遺物から鎌倉時代と思われた。上層の水田面に伴う遺構は、真東西方向の溝2条を検出した。溝の規模は、幅約0.5m・深さ約0.2m・検出長約13.5mを測り、溝間約8mで平行する。これらの溝は、現在の地形から想定される方格地割りに平行する。調査地南側からは、溝に直交する形で畦畔を1条確認した。畦畔には杭状のものが点在する。これら平行



第1図 調査地位置図(1/25,000)

する溝間の土質と溝をはさんだ周辺の土質とは大きく異なる。周辺部の土質がシルト質であることから、水田を区画する道状の遺構であった可能性もある。第3・4トレンチで検出した建物跡およびそれに付属する施設としては、掘立柱建物跡5棟と柵列、溝跡1条である。これら



第2図 第3・4トレンチ平面図

の遺構は、その主軸方位から大きく2時期に分類できた。出土遺物から、主軸方位が磁北を向く遺構については平安時代(9世紀後半～10世紀前半)、磁北から大きく振る遺構については、出土遺物が無く時期不明である。北方約2,000mに所在する興戸遺跡においても同様の遺構がすでに確認されており、時代が下がるにつれて磁北方向の遺構が認められるという成果を得ている。このことから、今回検出した磁北から大きく傾く遺構については、平安時代(9世紀後半)以前である可能性が高いと類推する。掘立柱建物跡については、昨年度調査を実施した隣接地においても2方向の建物を検出した。特に9世紀後半頃には、第4トレンチの一部から南側に東西5間を測る比較的大型の建物が存在し、その両側には2間×2間の倉庫2棟・1間×2間からなる付属棟が設けられていたと思われる。倉庫周辺には「L」字に柵列がめぐらされており、この付近は居住空間であったと思われる。

まとめ 今回の調査結果ならびに昨年度の成果も含めて考えると、4棟から構成される掘立柱建物跡群は、主屋・倉・付属棟から成るものと思われる。時期は、9世紀後半から10世紀前半と想定される。現在の近鉄三山木駅近辺は、鎌倉時代においては水田として土地利用されており、数回にわたって畦畔の付け替えが行われていた。これらの成果は、普賢寺川と遠藤川に挟まれた地域に成立していた古代山本郷から中世荘園山本荘の一端をかいま見ることができたと考えられる。

(岡崎研一)

府内遺跡紹介

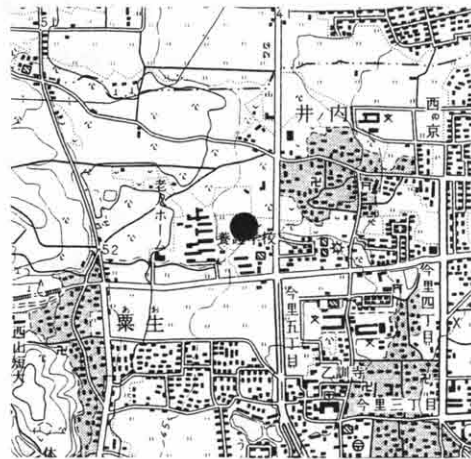
89. 井ノ内稲荷塚古墳

—継体朝の「弟国宮」と下植野南遺跡—

遺跡の概要 長岡京市の北郊に広がる竹林中に、全長46mの前方後円墳、井内稲荷塚古墳が現存する。この古墳は、平成5年～9年にかけて、長岡京市教育委員会と大阪大学文学部考古学研究室によって発掘調査が実施され、横穴式石室が後円部に、木棺直葬墓が前方部に築かれていることが分かった。横穴式石室は、向日市物集女車塚古墳と並んで乙訓地域でも最古級であり、閉塞には木板を用いた可能性が指摘されている。石室内には4体の埋葬が行われており、その内の1体は釘を用いない箱形木棺に納められていた。盗掘は受けていたものの、出土遺物は轡・壺鏡・杏葉などの馬具、胡籙金具、須恵器・土師器などが見られ、6世紀前葉に築かれた乙訓地域の首長墓の一つと見なすことができる。第4次調査の概報でも指摘されているように、「継体大王の活動を考古学的にとらえる」上で、無視できない古墳であることは疑いない。

遺跡の意義 ところで、乙訓地域の宮と言え、誰しも長岡宮を想起するが、継体朝の「弟国宮」については、考古学的にはほとんど注意されてこなかった。近江で生まれ、母方の越前三国に引き取られた継体大王は、悪逆非道な武烈の死後、継承者として越前・近江・尾張などの諸豪族によって擁立されたが、抵抗が激しく20年余り大和に入ることができなかった。樟葉宮で即位した彼は、筒城宮・弟国宮を転々とした後、ようやく大和にはいる。治世中、朝鮮半島施策をめぐる筑紫君磐井の反乱が起こるが、物部鹿鹿比によって鎮圧される。没後は三島藍野陵に葬られ、大阪府高槻市今城塚古墳が有力視されている。これが、記紀編者の脚色もあろうが、伝えられる継体像であり、出自と遷宮の不自然さから継体を新王朝の創始者と見る見解もあることは、ここで改めて言うまでもない。

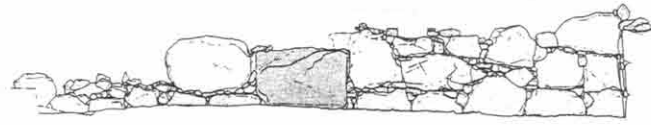
ところで、考古学的に乙訓と尾張との繋がりを示す資料が徐々に知られてきた。名古屋台地に6世紀前半に築かれた断夫山古墳は、全長150mを誇る尾張最大の前方後円墳である。この古墳は現在、熱田神宮の管理下に置かれ、発掘調査はおろか、主体部の推定さえ困難だが、規模から尾張連から出た継体の后妃、「日子媛」かその父「尾張連草香」の墓である可能性が考えられている。この断夫山古墳に後続する首長墓である名古屋市小幡茶臼山古墳は、近年発掘調査が実施されて横穴式石室が検出されたが、左片袖の畿内系のものであった。特に、玄室の長幅比・羨道の長幅比が井ノ内稲荷塚に酷似し、あたかも石室の設計図を裏焼きしたかのようなようであった。さらに、この古墳では破壊された家形石棺が納められていたが、



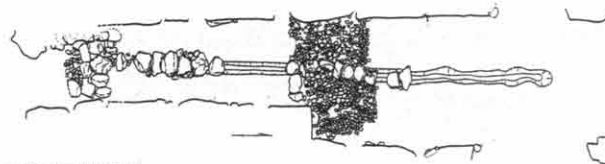
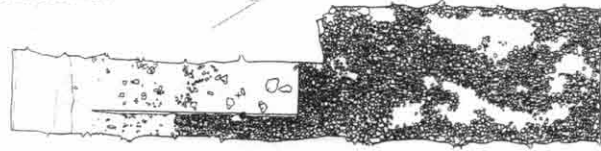
第1図 遺跡の位置

復原によると、二上山白石で作られた蓋の扁平な石棺を地元(犬山市～可児市にかけて分布)の石材によってうつしたものであり、物集女車塚古墳石棺に類似するという。このように、愛知県内では乙訓との繋がりを示唆する資料が知られており、乙訓でも地域色の強い尾張との関連を示す遺構・遺物の検出が今後、期待されよう。その候補地として最有力なのが、大山崎町下植野南遺跡である。

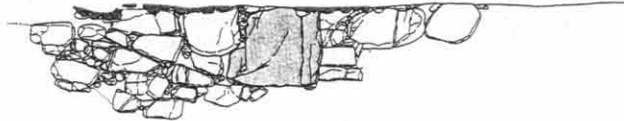
下植野南遺跡は、本「情報」誌にも何度か詳報・略報を掲載したが、大山崎町教育委員会の調査とも併せて、多数の竪穴式住居跡が検出されており、古墳時代後期の乙訓最大の拠点集落である。特に、本号の詳報で述べられた弥生時代方形周溝墓の上層の竪穴式住居跡からは、挂甲小札や轡の引手壺などの一般集落とは異なる生産関連遺物が見られた。また、この周辺



井ノ内稲荷塚古墳



小幡茶白山古墳



第2図 井内稲荷塚古墳と小幡茶白山古墳

は韓式土器・陶質土器の比重が山城地域でも高い地域の一つで、渡来人の集住が推定される。さらに、地理的には、後代、山崎津が設けられたように、淀川を遡上して湖国に抜ける重要拠点であることは、改めて強調するまでもない。翻って、継体の遷宮をみると、筒城宮は擁立氏族の一つ、息長氏の基盤に設けられたと見られるが、樟葉宮・弟国宮の両者は三川合流の地峡部を押さえる交通の要衝であることを理由に設けられた可能性があり、日本海から琵琶湖を經由して淀川水系へ抜ける水運を掌握した継体の政治的拠点が設けられるにふさわしい。加えて、筑紫君磐井の乱鎮圧のための物部軍は三島の「筑紫津」から船出した可能性が指摘されているが、これは大阪府高槻市津之江に比定されるという。だとすれば、筑紫津の上流の山崎や樟葉が看過されるはずはなく、継体の弟国宮は山崎津との関連を考慮せねばならないと考える。

遺跡の紹介 阪急長岡天神駅よりバス「光明寺道」バス停下車。竹林中に古墳は現存する。

(河野一隆)

参考文献

大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団『井ノ内稲荷塚古墳』Ⅱ 1997

服部哲也「断夫山時代その後—小幡茶白山古墳出現の背景—」(『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』第1号) 1999

古閑正浩「京都府乙訓地域の韓式系土器・カマド形煮沸具の様相」(『韓式系土器研究』Ⅵ) 1996

長岡京跡調査だより・75

前回『たより』以降の長岡京連絡協議会は、平成12年8月23日・9月27日・10月26日に開催された。報告のあった京内の発掘調査は宮内8件、左京域7件、右京域6件であった。京域外の6件を併せると、合計27件となる。

調査地一覧表(2000年10月現在)

番号	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第390次	7ANBDC-3	向日市寺戸町殿長22-1・3	(財)向日市埋文センター	6/1~9/30
2	宮内第391次	7ANCMM-4	向日市向日町南山7	(財)向日市埋文センター	6/28~7/4
3	宮内第392次	7ANBDC-4	向日市寺戸町殿長22-1・3	(財)向日市埋文センター	8/1~9/30
4	宮内第393次	7ANEHJ-8	向日市鶏冠井町祓所62-3・4	(財)向日市埋文センター	8/17~8/27
5	宮内第394次	7ANBKT-3	向日市寺戸町岸ノ下25-1	(財)向日市埋文センター	8/24~9/14
6	宮内第395次	7ANBKT-4	向日市寺戸町岸ノ下25-118	(財)向日市埋文センター	9/5~9/13
7	宮内第396次	7ANDYR-2	向日市森本町藪路35-17	(財)向日市埋文センター	10/2~10/4
8	宮内第397次	7ANEKT-3	向日市寺戸町楓畑5-1	(財)向日市埋文センター	10/16~10/21
9	左京第452次	7ANFMI-8	向日市上植野町南淀井9-1	(財)向日市埋文センター	8/1~8/11
10	左京第453次	7ANFKW-6	向日市上植野町桑原14-1他	(財)向日市埋文センター	9/12~10/11
11	左京第455次	7ANDTK-7	向日市森本町高田1	(財)向日市埋文センター	9/25~11/10
12	左京第457次	7ANDTK-8	向日市寺戸町高田1	(財)向日市埋文センター	10/16~11/10
13	中海道第51次	3NNANK-51	向日市物集女町中海道6-1	(財)向日市埋文センター	7/3~8/11
14	中海道第52次	3NNANK-52	向日市物集女町中海道59-6	(財)向日市埋文センター	7/118/10
15	右京第678次	7ANQNC-1	長岡京市勝竜寺西町3-1	(財)長岡京市埋文センター	7/17~10/27
16	右京第679次	7ANIKB-2	長岡京市一文橋二丁目59-1	(財)長岡京市埋文センター	7/24~9/21
17	右京第681次	7ANMKI-7	長岡京市東神足二丁目7	(財)長岡京市埋文センター	9/4~10/31
18	右京第682次	7ANOND-2	長岡京市下海印寺西山田35	(財)長岡京市埋文センター	9/11~9/21
19	右京第683次	7ANIOK-6	長岡京市天神五丁目13-1・2	(財)長岡京市埋文センター	9/20~10/24
20	右京第684次	7ANMTT-6	長岡京市東神足二丁目1-1	(財)長岡京市埋文センター	10/23~2/23
21	大山崎町第41次遺跡確認調査	7YYMSNM-10	大山崎町字円明寺小字夏目	大山崎町教育委員会	9/22~9/27
22	左京第450次	7ANXOO-2	京都市伏見区羽東師菱川町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	6/26~
23	左京第454次	7ANVMK-5	京都市南区久世東土川町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	10/11~

24	下植野南遺跡		大山崎下植野門田地内	(財)京都府埋文センター	4/11～2/末
25	百々遺跡	IK38次	大山崎町字円明寺小字夏目	(財)京都府埋文センター	8/21～
26	五塚原古墳		向日市寺戸町芝山	五塚原古墳発掘調査団	7/11～8/31

長岡京跡発掘調査抄報

宮内 第390・392次調査は、推定宮内北一条大路・「朝堂院中軸道路」、長岡宮北辺官衙等に位置する。長岡京期の遺構は、北一条大路の両側溝(側溝間84尺)、南側溝に並行する築地基礎地業(幅2.7m・深さ0.3m)が逆「L」字状に屈曲(宮内朱雀大路交差点)して検出されたが、北面中門が想定される位置には、現状では門がなかった可能性が強い。しかし、土器溜まりS X141では墨書土器「玉」(9世紀中葉の施釉陶器)が出土し、「玉手門」が想起される。第393次調査は、第二次内裏外郭で東西方向の石組み溝が出土した。第397次調査は柱掘形の規模が大きく、東西2間以上・南北1間以上の総柱の建物(倉庫)が出土した。

左京 第455次調査は、東二坊大路西側溝、5尺離れて併行する南北方向の柱列、柵S A45546が出土したが、第457次調査では一条条間南小路の側溝はなかった。第450次調査は長辺11m・短辺7m・深さ0.5mの落ち込みS X169が出土した。この性格は不明であるが、興味深いものである。

右京 第678次調査は地表下3mまでの掘削で顕著な遺構はなし。第679次調査は江戸時代以後の小畑川流路堆積のため、長岡京に関する遺構はないが、弥生土器、長岡京期前後の須恵器、近世陶磁器等の遺物が出土した。第681次調査は、中世勝龍寺の堀は土塁の手前で止まることが判明した。また、中世の井戸、土坑、柱穴等も検出された。第682次調査は、西山山麓の開析谷の斜面および谷筋に並行する自然流路を確認した。人頭大の礫が並び、祭祀遺構の可能性もある。第683次調査は古墳・長岡京期に関するものはなく、弥生時代の土坑3基から石鏃が出土した。

京外 中海道遺跡第51・52次調査は概ね標高30m台の扇状地緩斜面に立地する。弥生時代の溝S D5301、平安時代の掘立柱建物跡S B5303を検出した。溝は最大幅1.8m・深さ0.9mを測り、断面形は「V」字状を呈する。地形の傾斜面と同様に東へ蛇行し、人為的な溝であることが想起された。掘立柱建物跡は庇付建物の北西部を確認し、柱間寸法は梁間9～10尺・桁行10尺以上で、かなり大きな建物である。下植野南遺跡は中世の久我畷の両側溝、平安時代の掘立柱建物跡数棟、古墳時代の竪穴式住居跡10数棟、弥生時代の方形周溝墓20数基が検出されている。百々遺跡IK38次調査は鎌倉時代後期の掘立柱建物跡S B04(2×2間の総柱建物)が出土した。大山崎町第41次調査は古墳時代の溝S D02(幅2～3.5m)が検出された。五塚原古墳の調査は、古墳の正確な規模および墳丘の構造を確認することを目的に実施された。調査は、墳丘の測量図の作成と並行して、後円部、前方部前面・側面の3か所にトレンチを設定した。調査の結果、墳丘の遺存状態が悪く、葺石やテラス等の外部施設の詳細は今後の課題である。遺物については、埴輪・土師器等は全く出土せず、墳丘に埴輪が樹立されていなかった可能性が高い。墳丘の規模、築造時期については、来年度以降の調査に期待したい。

(竹井治雄)

センターの動向(00. 8～10)

1. できごと
- 8.1 森垣外遺跡(精華町)、関係者説明会
- 2 女谷横穴群(八幡市)、発掘調査開始
- 3 稲葉遺跡(京田辺市)発掘調査終了(4.18～)
- 9 南稲葉遺跡(綾部市)、現地説明会
- 11 東禅寺古墳群(宮津市)、試掘調査終了(7.13～)
森垣外遺跡、発掘調査終了(6.2～)
- 19 下植野南遺跡(大山崎町)、現地説明会
- 21 百々遺跡(大山崎町)、発掘調査開始
- 23 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 29 中尾芳治理事、下植野南遺跡現地視察
中谷雅治理事、今林古墳群(園部町)現地視察
- 30 中谷雅治理事、赤坂今井墳丘墓(峰山町)現地視察
- 9.6 木津川河床遺跡(下水道関係、八幡市)、
発掘調査開始
- 9 今林古墳群・今林遺跡、現地説明会
- 14 職員研修(於：当センター)講師：河野一隆・野島 永調査員「玉作りの製作技法とその展開」
- 19 シリガイ古墳群・エノク経塚(宮津市)、
現地説明会、発掘調査終了(6.1～)
- 21 三山木遺跡(京田辺市)、現地説明会
- 26 今林古墳群・今林遺跡、発掘調査終了(4.11～)
- 27 佐原 眞理事、赤坂今井墳丘墓現地視察
- 28 三山木遺跡、発掘調査終了(5.15～)
- 10.1 設立20周年記念特別展覧会「京都・時を旅して」開催(於：向日市文化資料館、～10.29)
- 3 樋口隆康理事長・都出比呂志理事、赤坂今井墳丘墓視察
植物園北遺跡(京都市)、関係者説明会
- 4 沢田正昭奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長、赤坂今井墳丘墓現地視察
- 5～6 全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(於：山口市)田中 彰主任調査員、鍋田幸世・岡田正記主事出席
- 7～8 日本考古学協会2000年度大会(於：鹿児島市)柴 暁彦調査員参加
- 10 武田佐知子大阪外語大教授、赤坂今井墳丘墓現地視察
- 11 門脇禎二京都橘女子大前学長、赤坂今井墳丘墓現地視察
- 12 口丹波文化財保護行政関係者連絡協議会、当センターで開催
- 13 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック研修会(於：長岡京市)石井清司・引原茂治主任調査員、岡崎研一主査調査員、森島康雄・中村周平調査員参加
木津川河床遺跡(府道関係、八幡市)、
発掘調査開始
- 15 赤坂今井墳丘墓(峰山町)、現地説明会
- 20 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於：当センター)
- 25 理事協議会(於：当センター)樋口隆康

理事長、中澤圭二副理事長、木村英男常務理事・事務局長、川上 貢、藤井 学、佐原 眞、中尾芳治、津守俊一、中谷雅治理事出席、

特別展「京都・時を旅して」視察

26 長岡京連絡協議会(於：当センター)

31 職員研修(於：当センター)講師：福嶋利範事務局次長「臨時職員の雇用をめぐる問題について」

2. 普及啓発活動

10.14 設立20周年記念特別講演会『京都・古代の輝き』開催(於：向日市民会館)上田正昭京都大学名誉教授「平安京のあけぼの」、水野正好奈良大学教授「古代の玉・霊の輝き」



特別展覧会「京都・時を旅して」
風景



特別講演会「京都・古代の輝き」
風景

受贈図書一覧(00.8~10)

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第312集 志羅山遺跡第46・66・74次発掘調査報告書、同第313集 佐野遺跡第1次・三日町I遺跡第2次発掘調査報告書、同第314集 惣前町遺跡発掘調査報告書、同第315集 日の出町I遺跡発掘調査報告書、同第316集 山王山遺跡第9次発掘調査報告書、同第317集 川岸場II遺跡発掘調査報告書、同第318集 沢田I遺跡発掘調査報告書、同第319集 狼沢II・高松寺・上駒板遺跡発掘調査報告書、同第320集 峠山牧場I遺跡B地区発掘調査報告書、同第321集 向中野館跡第4次・小幅遺跡第11次・台太郎遺跡第19次発掘調査報告書、同第322集 芦名沢II遺跡発掘調査報告書、同第323集 下村遺跡発掘調査報告書、同第324集 安栖野遺跡発掘調査報告書、同第325集 下醍醐遺跡発掘調査報告書、同第326集 下醍醐遺跡発掘調査報告書、同第327集 佐野原遺跡発掘調査報告書、同第328集 上寺田・本巻遺跡発掘調査報告書、同第329集 西館跡発掘調査報告書、同第330集 水ノ口遺跡発掘調査報告書、同第331集 休場遺跡発掘調査報告書、同第332集 相ノ沢遺跡発掘調査報告書、同第333集 上野平遺跡発掘調査報告書、同第334集 上台遺跡発掘調査報告書、同第335集 大向上平遺跡発掘調査報告書、同第336集 長倉I遺跡発掘調査報告書、同第337集 島田II遺跡発掘調査報告書、同第338集 向中野館跡第3次・小幅遺跡発掘調査報告書、同第339集 矢神遺跡発掘調査報告書、同第340集 岩手県埋蔵文化財発掘調査略報、紀要XIX

(財)福島県文化センター

福島県文化財調査報告書第369集 福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告書8

(財)いわき市教育文化事業団

いわき市埋蔵文化財調査報告第61冊 中山館跡Ⅲ区、同第72冊 根岸遺跡

(財)茨城県教育財団

年報19、研究ノート9号

(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第233集 向原／相野谷、同第234集 長沖古墳群、同第235集 道合中／光明寺、同第236集 道合高木前遺跡、同第237集 戸張／中原、同第238集 与野東、同第239集 稲荷谷、同第240集 天神東遺跡、同第241集 如意／如意南、同第243集 浜平岩陰／入波沢西／入波沢東遺跡、同第244集 太田貝塚、同第245集 築道下遺跡Ⅲ、同第

246集 築道下遺跡Ⅳ、同第247集 小沼耕地遺跡Ⅱ、同第248集 上敷免北遺跡、同第249集 金井遺跡B地区Ⅱ、同第250集 宮西遺跡、同第251集 熊野／新田、同第252集 上ノ宮遺跡、同第253集 深作稻荷谷遺跡、同第254集 石神貝塚、同第255集 下野田本村遺跡、同第256集 海老島遺跡、同第257集 堀東／城西Ⅱ、年報20

(財)千葉県文化財センター

研究連絡誌第55～57号、研究紀要20、千葉県文化財センター調査報告第393集 成東町嶋戸東遺跡第3次発掘調査報告書

(財)山武郡市文化財センター

(財)山武郡市文化財センター発掘調査報告書第65集 小野山田遺跡群I

(財)船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター

埋蔵文化財センター調査報告書第3集 東中山台遺跡群(8・9)、同第4集 印内台遺跡群(19)、同第8集 印内台遺跡群(24)、同第9集 藤崎台遺跡、同第11集 印内台遺跡群(22)、同第12集 宮本台遺跡群(7)、同第13集 東中山台遺跡群(11)、同第14集 東中山台遺跡群(12)、年報2、同3

(財)東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財センター

東京都埋蔵文化財センター調査報告書第78集 汐留遺跡Ⅱ、同第82集 多摩ニュータウン遺跡 No.339遺跡、同第86集 尾張藩上屋敷跡遺跡V

(財)かながわ考古学財団

かながわ考古学財団調査報告19 宮ヶ瀬遺跡群XⅢ、同48 吉岡遺跡群Ⅷ、同67 坪ノ内・貝ヶ窪遺跡(No.18・19・43)・笠窪・谷戸遺跡、同77 坪ノ内・宮ノ前遺跡(No.16・17)、同78 平和坂遺跡、同80 三ツ俣遺跡Ⅱ(F地区)、同81 三ツ俣遺跡Ⅱ(G地区)、長柄・桜山第1・2号墳、三ツ俣遺跡、川尻石器時代遺跡範囲確認調査報告書

(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター

茅ヶ崎城Ⅱ、大熊仲町遺跡

(財)山梨文化財研究所

上ノ原遺跡、石之坪遺跡(東地区)

(財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書36 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5、同53 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書6

(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

新潟県埋蔵文化財調査報告書第95集 上中島遺跡・野林遺跡、同第97集 大武遺跡(中世編)、年報平成11年

度

(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

紀要第3号、埋蔵文化財調査概要平成11年度、埋蔵文化財年報11、永代遺跡発掘調査レポート、富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第11集 開辭大滝遺跡・地崎遺跡発掘調査報告、同第12集 北陸新幹線関係埋蔵文化財包蔵地調査報告

富山県埋蔵文化財センター

縄文繚乱

多治見市文化財保護センター

小名田窯下古窯跡群発掘調査報告書 多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第47号、小泉4丁目発掘調査報告書 同第52号、平田遺跡 同第54号、白土原15号窯発掘調査報告書 同第56号、平田遺跡Ⅱ 同第57号、高田古窯跡群発掘調査報告書

三重県埋蔵文化財センター

勢武谷経塚・勢武谷遺跡、近畿自動車道尾鷲勢和線(紀勢～勢和間)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ、辻子遺跡・山村遺跡・菟上遺跡・東海道想定地他、一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ、三重県埋蔵文化財調査報告115-9 一般国道23号中勢道路(9工区)遺跡発掘調査報告、同169 中出向遺跡(第2次)発掘調査報告、同186-1 東村城跡発掘調査報告、同207 道瀬遺跡(第2次)発掘調査報告、同208-1 外山遺跡・片落C遺跡、同210 佐田遺跡発掘調査報告

(財)滋賀県文化財保護協会

レトロ・レトロの展覧会

(財)大阪府文化財調査研究センター

河内平野遺跡群の動態Ⅷ、丹上遺跡(その7)・観音寺(その3)、池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅡⅡ、(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第16集 日野根遺跡、同第46集 井関・亀川遺跡発掘調査報告書、同第50集 溝昨遺跡(その3・4)、同第52集 河原城遺跡Ⅰ、大阪府埋蔵文化財研究会(第41回)資料

桜井市立埋蔵文化財センター

三輪山周辺の考古学

(財)鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財センター

滝山猿縣平墳墓群、円護寺坂ノ下遺跡、秋里遺跡、平成11(1999)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

島根県埋蔵文化財調査センター

埋蔵文化財調査センター年報Ⅷ、西川津遺跡Ⅶ、島勝負廻Ⅰ遺跡・白石大谷Ⅱ遺跡・シトギ免遺跡・野津原Ⅱ遺跡・山守免遺跡・石地藏遺跡、野津原Ⅱ(西区)遺跡・女夫岩西遺跡・城山遺跡、下山遺跡(1)、神原Ⅰ遺跡・神原Ⅱ遺跡、三田谷Ⅰ遺跡、三田谷Ⅲ遺跡、社日古墳、神主城跡・室崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・横路古墳、大畑遺跡発掘調査報告書

(財)東広島市教育文化振興事業団文化財センター

文化財センター調査報告書第9冊 西本6号遺跡発掘調査報告書Ⅰ、同第23冊 山崎2号遺跡発掘調査報告書、同第25冊 上弘遺跡・荒谷土居屋敷遺跡発掘調査報告書、同第26冊 史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅱ、文化財論究 第1集

(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

松山市文化財調査報告書第71集 岩崎遺跡、同第74集 大山寺経田遺跡、同第75集 古市遺跡・下刈屋遺跡、同第76集 来住・久米地区の遺跡Ⅲ、同第78集 大洲遺跡、繚乱の時

(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室

北九州市埋蔵文化財調査報告書第239集 貫・丸尾遺跡、同第240集 片野遺跡、同第241集 脇田丸山遺跡2、同第242集 高槻遺跡第9地点、同第243集 高坊遺跡、同第244集 堅町遺跡第1地点、同第245集 小倉城跡第3地点、同第246集 高槻遺跡第10地点、同第247集 上貫遺跡(C)、同第248集 長野小西田遺跡、同第249集 上横代遺跡、同第250集 丸ノ内遺跡、同第251集 北方遺跡第7次調査、同第252集 長野フンデ遺跡、同第253集 丸ノ内南遺跡、同第254集 行正遺跡、埋蔵文化財調査室年報16、研究紀要第14号

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第17集 神殿遺跡B・C地区南平第3遺跡・南平第4遺跡・中ノ原遺跡、同第22集 石用遺跡・友尻遺跡、同第23集 石塚城跡・鳥ノ子遺跡、同第24集 黒草第1・第2第3遺跡・本野原遺跡・七野第3遺跡、同第25集 上の原第2遺跡・上の原第1遺跡・上の原第4遺跡・白ヶ野第3遺跡A地区、同第26集 山中前遺跡、同第27集 竹ノ内遺跡、同第28集 大島畠田遺跡、同第29集 平田迫遺跡

上ノ国町教育委員会

史跡上之國勝山館跡ⅡⅠ、町内遺跡発掘調査事業報告書Ⅲ

足利市教育委員会

足利市埋蔵文化財調査報告書第34集 春日遺跡第1次発掘調査報告書、同第36集 中日向13号墳発掘調査報告書、同第37集 高松遺跡第2次発掘調査報告書、同第38集 平成8年度文化財保護年報、同第39集 平成9年度文化財保護年報、同第40集 小俣川沿岸遺跡群発掘調査報告書、同第41集 南大町遺跡第1次発掘調査報告書、同第42集 平成10年度文化財保護年報

吉井町教育委員会

平成10年度 町内遺跡発掘調査報告書、同平成11年度、椿谷遺跡・釜ヶ渕遺跡発掘調査報告書、多比良観音山遺跡発掘調査報告書、多比良天神原遺跡発掘調査報告書

坂戸市教育委員会

景台遺跡発掘調査報告書Ⅱ、同Ⅲ、若葉台遺跡発掘調査報告書Ⅴ

文京区教育委員会

文京区文化財研究紀要平成11年度

日野市教育委員会

おちかわ、日野市埋蔵文化財発掘調査報告55 七ツ塚遺跡3、同57 仁王塚遺跡、同62 南広間地遺跡13、同65 南広間地遺跡14、同66 七ツ塚遺跡6、同67 七ツ塚遺跡7、同68 七ツ塚遺跡8、日野市の古民家

長坂町教育委員会

長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第18集 宮久保遺跡、同第19集 紺屋遺跡

境川村教育委員会

境川村埋蔵文化財発掘調査報告第14輯 一の沢遺跡第7・8次

八田村教育委員会

八田村文化財調査報告書第1集 村内遺跡詳細分布調査報告書

伊那市教育委員会

伊那市のまつり

金井町教育委員会

第15回全国天領ゼミナール記録集、金井町文化財調査報告第10集 北條家総合調査報告書

氷見市教育委員会

氷見市埋蔵文化財調査報告第29冊 柳田布尾山古墳

婦中町教育委員会

県営担い手育成基盤整備事業に係る埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告

小松市教育委員会

額見町遺跡(額見町遺跡C・D地区)、矢田借屋古墳群、今江五丁目遺跡

各務原市教育委員会

平成10年度各務原市内遺跡発掘調査報告書

垂井町教育委員会

美濃国府跡発掘調査報告Ⅱ

安濃町教育委員会

安濃町埋蔵文化財調査報告書20 南在神遺跡/迫上遺跡/下箕内遺跡発掘調査報告書

和泉市教育委員会

和泉市埋蔵文化財発掘調査概報10、史跡池上曾根遺跡保存整備事業報告書、史跡池上曾根遺跡97・98

富田林市教育委員会

富田林市埋蔵文化財調査報告31 平成11年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書

熊取町教育委員会

熊取町埋蔵文化財調査報告第33集 熊取町遺跡群発掘調査概要報告書XⅣ、同第34集 久保城跡発掘調査概

要報告書Ⅰ、同第35集 七山東遺跡発掘調査概要報告書Ⅰ

姫路市教育委員会

TSUBOHORI 平成10年度

三木市教育委員会

三木市文化研究資料第14集 三木市埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ、同第15集 高木古墳群・高木多重土壘1、同第16集 高木古墳群・高木多重土壘2

中町教育委員会

中町文化財報告21 巨大石室墳を掘る、同24 曾我井・野入遺跡Ⅰ・多哥寺遺跡Ⅲ

倉吉市教育委員会

倉吉市文化財調査報告書第102集 高峰遺跡・矢内谷峰遺跡発掘調査報告書、同第103集 若林遺跡発掘調査報告書、同第104集 クズマ遺跡第2次発掘調査報告書、同第105集 福田寺遺跡発掘調査報告書(3次調査)

三原市教育委員会

美生古墳群、三原市文化財調査報告書第1集 三原市内遺跡1、同第2集 三原市内遺跡2

府中市教育委員会

府中市埋蔵文化財調査報告第11冊 府中市内遺跡5

徳島県教育委員会

黒谷川郡頭遺跡Ⅵ

高松市教育委員会

高松市埋蔵文化財発掘調査報告第44集 一角遺跡、同第45集 高松市内遺跡発掘調査概報、同第46集 香西南西打遺跡、同第47集 上西原遺跡、同第48集 宮西・一角遺跡、同第49集 川南・東遺跡

太宰府市教育委員会

大宰府の文化財第40集 筑前国分寺跡Ⅱ、同第41集 馬場遺跡第4次、同第42集 大宰府条坊跡XⅠ、同第43集 大宰府条坊跡XⅡ、同第44集 太宰府・佐野地区遺跡群Ⅸ、同第45集 横岳遺跡、同第46集 大宰府条坊跡XⅢ、同第47集 御笠団印出土地周辺遺跡Ⅰ、同第48集 大宰府条坊跡XⅣ、同第49集 大宰府条坊跡XⅤ、同第50集 太宰府・佐野地区遺跡群X

古賀市教育委員会

薬王寺廃寺 古賀古賀町文化財調査報告書第20集

甘木市教育委員会

甘木市文化財調査報告書第49集 堤当正寺古墳、同第50集 福嶽城跡

上陽町教育委員会

久木原遺跡 上陽町文化財調査報告書第1集

唐津市教育委員会

唐津市文化財調査報告書第88集 土地開発に伴う市内遺跡確認調査報告、同第89集 菅牟田荒谷遺跡(1)、同第90集 岸高Ⅱ遺跡、同第91集 菅牟田西山遺跡

- (3)、同第92集 枝去木分校入口遺跡、同第93集 菜畑内田遺跡、同第94集 野原遺跡
- 佐伯市教育委員会**
佐伯城下町遺跡
- 宮崎市教育委員会**
浮かび上がる宮崎平野の巨大古墳
- 串間市教育委員会**
串間市文化財調査報告書第20集 市内遺跡発掘調査報告書、同第21集 上條原遺跡発掘調査報告書
- 三股町教育委員会**
三股町文化財調査報告書第2集 諏訪廻第1遺跡
- 田野町教育委員会**
田野町文化財調査報告書第32集 ズクノ山第2遺跡F地区、同第33集 本野遺跡、同第34集 高野原遺跡、同第35集 高野原遺跡B・C地区、同第36集 高野原遺跡(E～G地区)
- 陸前高田市立博物館**
紀要第4号
- 上高津貝塚ふるさと歴史の広場**
古代震ヶ浦事情、上高津貝塚E地点
- かみつけの里博物館**
鍋について考える
- 栃木県立博物館**
大谷寺洞穴遺跡出土展、掘り出された「文字」
- 栃木県立なす風土記の丘資料館**
関東以北の前方後方墳・方墳の鏡
- 国立歴史民俗博物館**
研究報告第83～85集、天下統一と城
- 千葉県立中央博物館**
研究報告 人文科学
- 大田区立郷土博物館**
江戸時代の旅 弥次喜多道中
- 神奈川県立歴史博物館**
年報平成11年度
- 高岡市立博物館**
年報第14号
- 氷見市立博物館**
館蔵品展Ⅱ
- 石川県立歴史博物館**
能登最大の中世荘園若山荘を歩く
- 福井県立博物館**
よみがえるふくいのからし
- 三方町縄文博物館**
河姆渡遺跡と鳥浜貝塚の交流展、三方町文化財調査報告書第14集 ユリ遺跡
- 静岡市立登呂博物館**
館報第10号、きょうのごはんあに？
- 名古屋市博物館**
年報No. 23
- 豊橋市美術博物館**
豊橋市埋蔵文化財調査報告書第52集 二川古窯址群Ⅰ、同第53集 坂津地区遺跡範囲確認調査、同第54集 大西遺跡Ⅱ、三ツ山古墳調査概要Ⅱ
- 斎宮歴史博物館**
器は語る700年、平成11年度年報
- 滋賀県立安土城考古博物館**
学校の宝物
- 大阪市立博物館**
館報No. 39、研究紀要第32冊
- 岸和田市立郷土資料館**
岸和田市立郷土資料館名品集
- 柏原市立歴史資料館**
館報11、玉手箱の横穴群、見てみよう民具の世界、松岳山古墳群の埴輪
- 吹田市立博物館**
受け継がれてきた吹田の文化財
- 八尾市立歴史民俗資料館**
絵図が語る八尾のかたち
- 太子町立竹内街道歴史資料館**
館報第6号、太子町立竹内街道歴史資料館調査報告第2集 叡福寺の縁起・霊宝目録と境内古絵図、聖徳太子廟の香花寺
- 神戸市立博物館**
館蔵品目録 考古・歴史の部16、同美術の部16、研究紀要第16号、年報No. 15
- 明石市立文化博物館**
明石市文化財年報平成9年度
- 西宮市立郷土資料館**
西宮市文化財資料第44号 西宮市埋蔵文化財発掘調査報告書
- 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館**
飛鳥池遺跡
- 香芝市二上山博物館**
葛城の英雄・けはや
- 鳥根県立八雲立つ風土記の丘資料館**
あなたの古代出雲は？
- 下関市立考古博物館**
倭人 文字と出会う
- 九州歴史資料館**
年報平成11年度、研究論集25
- 伊都歴史資料館**
前原市文化財調査報告書第70集 平原遺跡
- 熊本市立熊本博物館**
館報No. 12
- ミュージアム知覧**

- 館報第6号、知覧町文化財ガイドブック
- 千葉大学文学部考古学研究室
本寿寺洞穴・長兵衛岩陰第1次発掘調査概報
- 日本大学史学会
史叢第62号
- 青山学院大学史学研究室
青山史学第18号
- 早稲田大学考古学会
古代 第108号
- 滋賀大学教育学部考古学研究室
滋賀県史学会誌第12号
- 滋賀県立大学人間文化学部
古代武器研究1
- 大阪女子大学
上方文化研究センター研究年報 創刊号
- 大阪大学大学院文学研究科考古学研究室
昼飯大塚古墳Ⅴ、今塚大塚古墳第3次調査概要・井ノ内車塚古墳第3次調査概要
- 奈良大学文学部
奈良大学文学部考古学研究報告1 白米山西古墳群発掘調査報告書
- 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
岡山大学構内遺跡調査研究年報17
- 忠南大校博物館
忠南大校博物館叢書第18輯 扶餘官北里百濟遺蹟発掘報告Ⅱ
- 釜慶大校博物館
釜慶大校博物館研究叢書第5輯 金海龜山洞古墳
- 北網園北見文化センター
南丘4遺跡
- 高崎市市史編さん室
新編高崎市史資料編2 原始古代Ⅱ、同資料編3 中世1
落川・一の宮遺跡(日野3・2・7号線)調査会
落川・一の宮遺跡Ⅰ
- 都立学校遺跡調査会
菅谷遺跡
- (株)ジャパン通信情報センター
文化財発掘出土情報 第221号
- 朝日新聞社
朝日百科・日本の至宝別冊 国宝と歴史の旅8
文化庁
遺跡保存方法の検討 水中遺跡
- 鎌倉考古学研究所
鎌倉遺跡調査会調査報告5 極楽寺旧境内遺跡、同6
神奈川県鎌倉市長谷小路周辺遺跡13、同7 神奈川県鎌倉市下馬周辺遺跡4、同12 神奈川県鎌倉市北条時房・顕時邸跡7、第10回鎌倉市遺跡調査・研究発表要旨
- 玉川文化財研究所
池端地区遺跡群発掘調査報告書、早川城山地区遺跡群発掘調査報告書
- 浜松市埋蔵文化財調査事務所
谷山田遺跡、鳥居松遺跡2 飯田町山寺野遺跡、御殿山遺跡
- 安濃町遺跡調査会
安濃町埋蔵文化財調査報告書10 山添遺跡発掘調査報告書
- 雄山閣出版(株)
季刊考古学・別冊10 丹後の弥生王墓と巨大古墳
- (財)古代学協会
古代文化 第52巻第7～9号
- 全国埋蔵文化財法人連絡協議会
奈良時代末から平安時代初頭の各地の状況
- 津名郡町村会
津名郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ
- 朝鮮学会
朝鮮学報 第175輯
- 広島県立廿日市西高等学校
研究紀要 汗と夢第8号
- 博物館等建設推進九州会議・編集委員会
Museum kyushu 通巻66号
- (財)京都市埋蔵文化財研究所
平成10年度京都市埋蔵文化財調査概要、研究紀要第6号
- 京都府教育委員会
恭仁宮跡発掘調査報告書Ⅱ、醍醐寺 開山堂・如意輪堂・修理工事報告書
- 京都市文化市民局
京都市の文化財(第18巻)
- 大江町教育委員会
大江町文化財調査報告書第8集
- 園部町教育委員会
園部町文化財調査報告第13集 徳雲寺遺跡谷群
- 長岡京市教育委員会
長岡京市文化財調査報告書第41冊
- 八幡市教育委員会
ふるさと学習館館報 創刊号
- 京都府立山城郷土資料館
山城・お茶の100年
- 京都市歴史資料館
聚楽第と京都
- 亀岡市文化資料館
農具たちの同窓会

宇治市歴史資料館

よみがえる鉄道黄金時代

城陽市歴史民俗資料館

お茶・人・暮らし

京都大学埋蔵文化財研究センター

京都大学構内遺跡調査研究年報1996年度

(財)泉屋博古館

紀要第17巻

口丹波史談会

盃魚庭落葉 上之二

京都国道工事事務所

40年のあゆみ

八幡市上津屋土地区画整理組合

八幡市上津屋土地区画整理事業誌

河野一隆

丹後文化圏、新出土 亀形石造物遺構、豊橋市埋蔵文化財調査報告書第42集 市場遺跡・市杵嶋神社古墓群・牟呂王塚古墳、同第43集 磯辺王塚古墳、須恵器生産の出現から消滅、外山古墳群発掘調査概報

森島康雄

近世城下町の諸相発表資料

崔 仁善

順天大博物館地方文化叢書第18 全南東部地域の文化遺蹟と遺物

林 永珍

光州雙村洞住居址、伏岩里古墳

編集後記

20世紀最後の刊行になる第78号が完成しましたので、お送りいたします。朝晩がめっきり寒くなり、酷暑の夏が昨日のことのように思い出されます。本号の編集作業中、世間を騒がせた「旧石器ねつ造」のニュースが飛び込んできました。華やかな文化財報道の反面で、埋蔵文化財の普及啓発のあり方について自戒の念をもって考えさせられる事件でした。と同時に、私たちも、考古学の成果を鵜呑みにするだけでなく、疑ってかかる「批判的精神」も同時にはぐくんでいきたいものです。時節柄、ご自愛ください。新世紀も本情報誌をご愛読下さい。

(編集担当＝河野一隆)

京都府埋蔵文化財情報 第78号

平成12年12月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877 (代) Fax 075-922-1189(代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER